

女鑑

第拾參年第拾六號

明治三十六年八月十五日發行

口繪

[illegible]

[illegible]

女子職業之振興

女子獨立的覺悟

無數談片

將來到處な

健体ノ

毎月二回十五日發兌

[illegible]

御注文の節は婦女界の廣告に依りたる旨御附記被下度候

新意匠

羽衣コートの御披露

一羽衣コート甲種金三圓六十錢
一羽衣コート乙種金壹圓九十錢
以上各種

御望の方は御報次第說明書幷に直段書を呈す



一吳服物一式幷に御禮式御衣裳

其他新規仕立日本衣服品々

一男女御袴

寸尺區別種々調製有之候

東京市麻布區飯倉町四丁目

發賣元 萬長吳服店

電話新橋千百六十七番



デシン石鹸

定價十二錢

此デシン石鹸

は其原料を臺灣總督府專賣局製劑のデシンフエクトールに採りたれば各種の皮膚病に[illegible]頗る有効なる事既に諸大醫の證明せらるる所なり

デシンフエクトールは[illegible]●しつ●[illegible]●[illegible]●たむし●いんきん●水蟲●[illegible]其他一切の皮膚病に効あり[illegible]本品[illegible]使用の途殊に消毒殺菌に供する[illegible]利目あり且つ廉價なり殊に病院[illegible]産婆検[illegible]員の如き衛生的業務に就事するもの丶必ず常用すべき也

注意（養蠶家は養蠶操作の際洗手に之を用ゆれば消毒の効あり御試用を乞ふ）

東京市日本橋區[illegible]町（東京衛生商會）

發賣元 鈴木長兵衞

特電話本局一二三六番

●賣捌所は各地の藥店○賣藥店に有之候

女鑑 第拾柒年第拾六號 目次

定價

一冊	金拾錢
六冊(三ヶ月分)	前金五拾七錢
十二冊(半ヶ年分)	前金壹圓拾錢
廿四冊(一ヶ年分)	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁	金八圓
一頁	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年八月十四日印刷
明治三十六年八月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊秦一

東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人　並木貞維

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

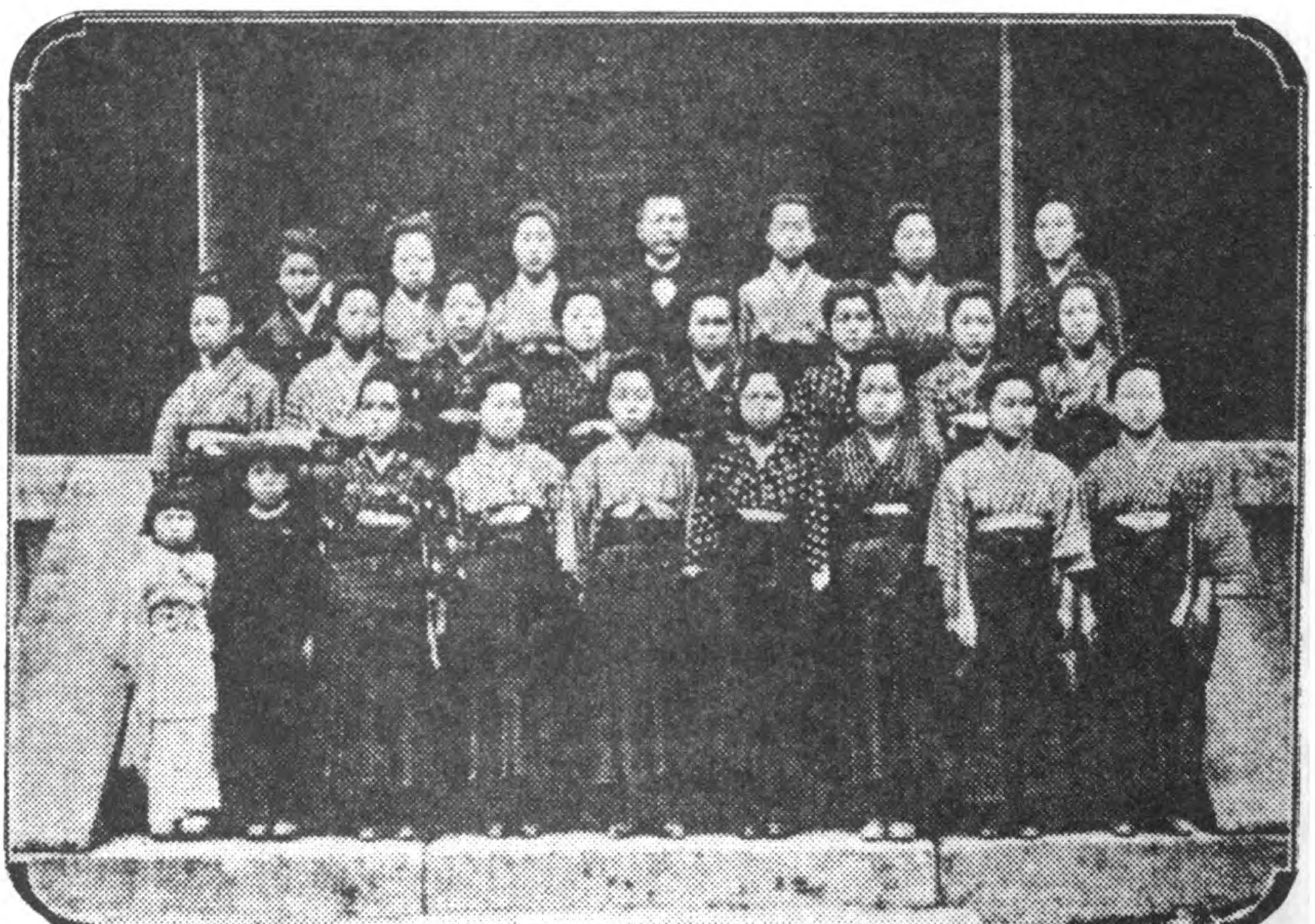


淑德女學校職員及卒業生

女鑑兼題投稿優等者



篠出圓子孃



京部淑女學校音樂部生徒

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

西洋洗濯

○工場ハ本邦第一ノ大規模ニシテ蒸氣力ニヨリ精巧ナル機械ヲ使用ス

○機械ハ歐洲ニテ有名ナル佛國最新式衛生洗濯機械ナリ

○消毒室ヲ設備シ一般ニ蒸汽消毒ヲ行ヒテ後洗濯及仕上ヲ爲ス

○乾燥室ノ設ケアレハ雨天ニテモ即日仕上ケ上納ヲ爲ス

○機械力ニ由ルヲ以テ洗濯代價ハ無比ノ低廉ナリ

御注意　弊社の集配人には烙印を刻したる番號付姓名記入の雇配札所持爲致居候間時々御檢の上御洗濯物御下付被下度候

資本金二十萬圓

東京市芝區三田豊岡町四番地

日本衛生洗布株式會社

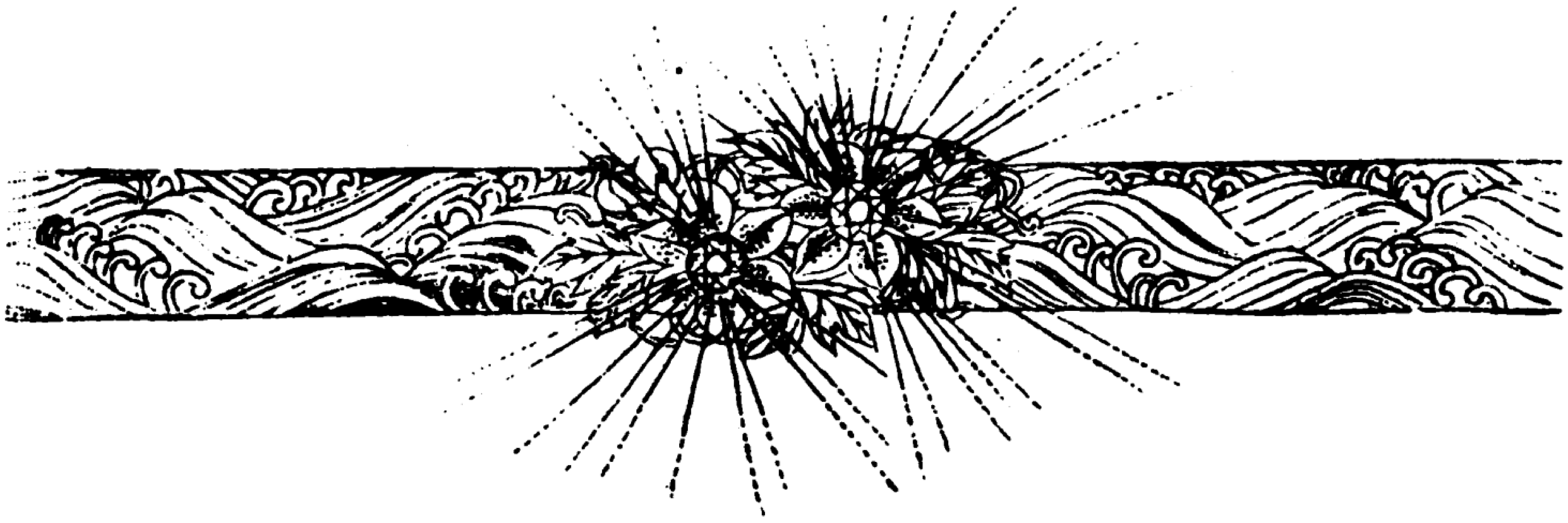
電話新橋一三二九



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候





貴金製金具附帶留

花も錦も夫々の取合せありてこそすべての價あれ帶美はしくとも帶留佳ならねば裝ひとゝのはず茲に本店新製の帶留は諸大家の意匠に係る斬新の圖案を其儘黄金白金銀赤銅朧銀等に彫刻或はダイヤモンド眞珠其他の寶石類を箝入し紐は鹽瀨地の縫ひ取り又は金襴錦朱珍等いづれも美術の精巧を極はめたる品なれば霞の帶の引もきらざる御注文あらんことを

東京市京橋區尾張町
白牡丹本店
松田幸治郎

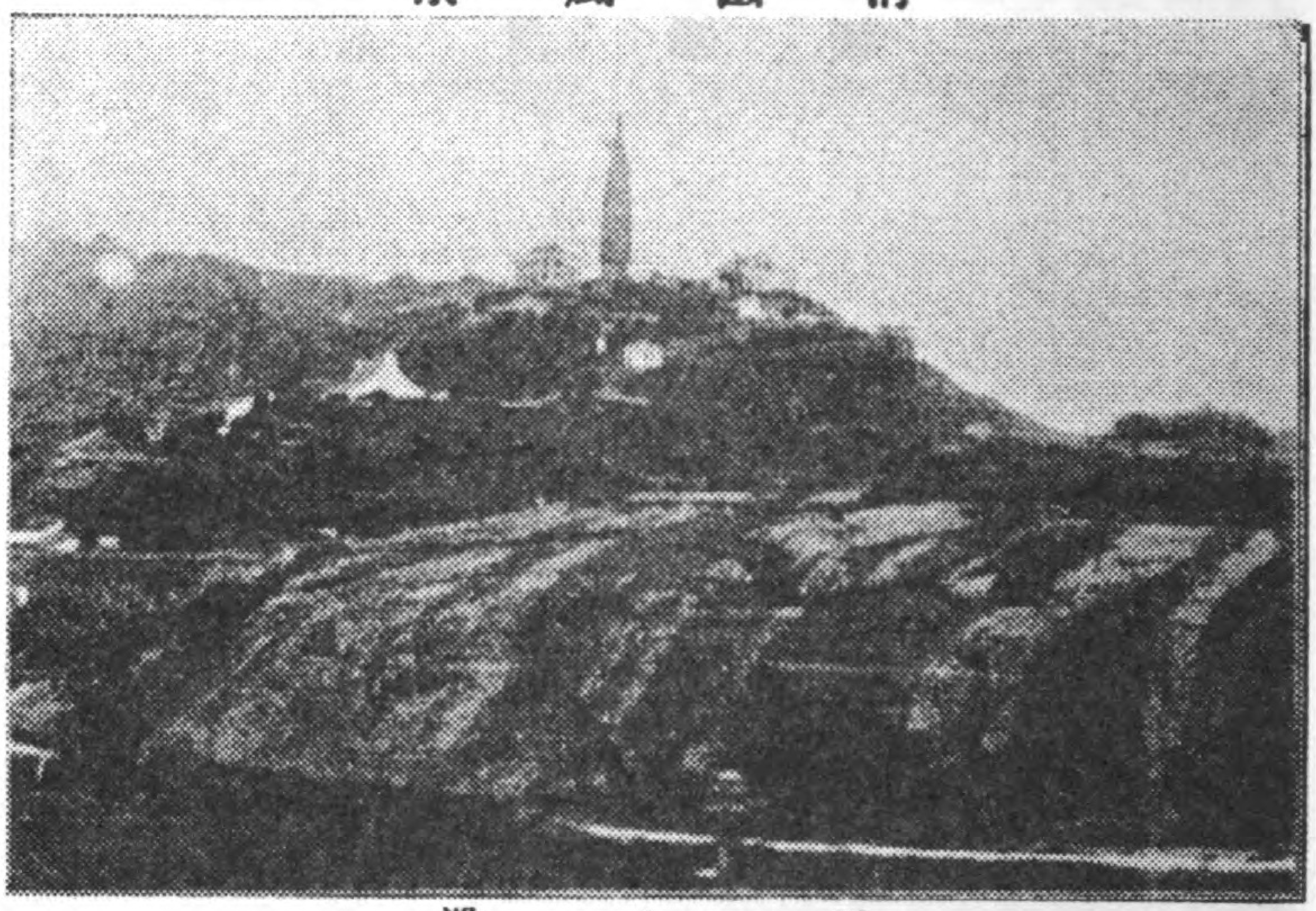
（金製彫刻金具付價）
十二圓十五圓廿圓卅圓以上六十圓迄

（寶石入金具付之價）
二十圓三十五圓五十圓以上一百圓迄

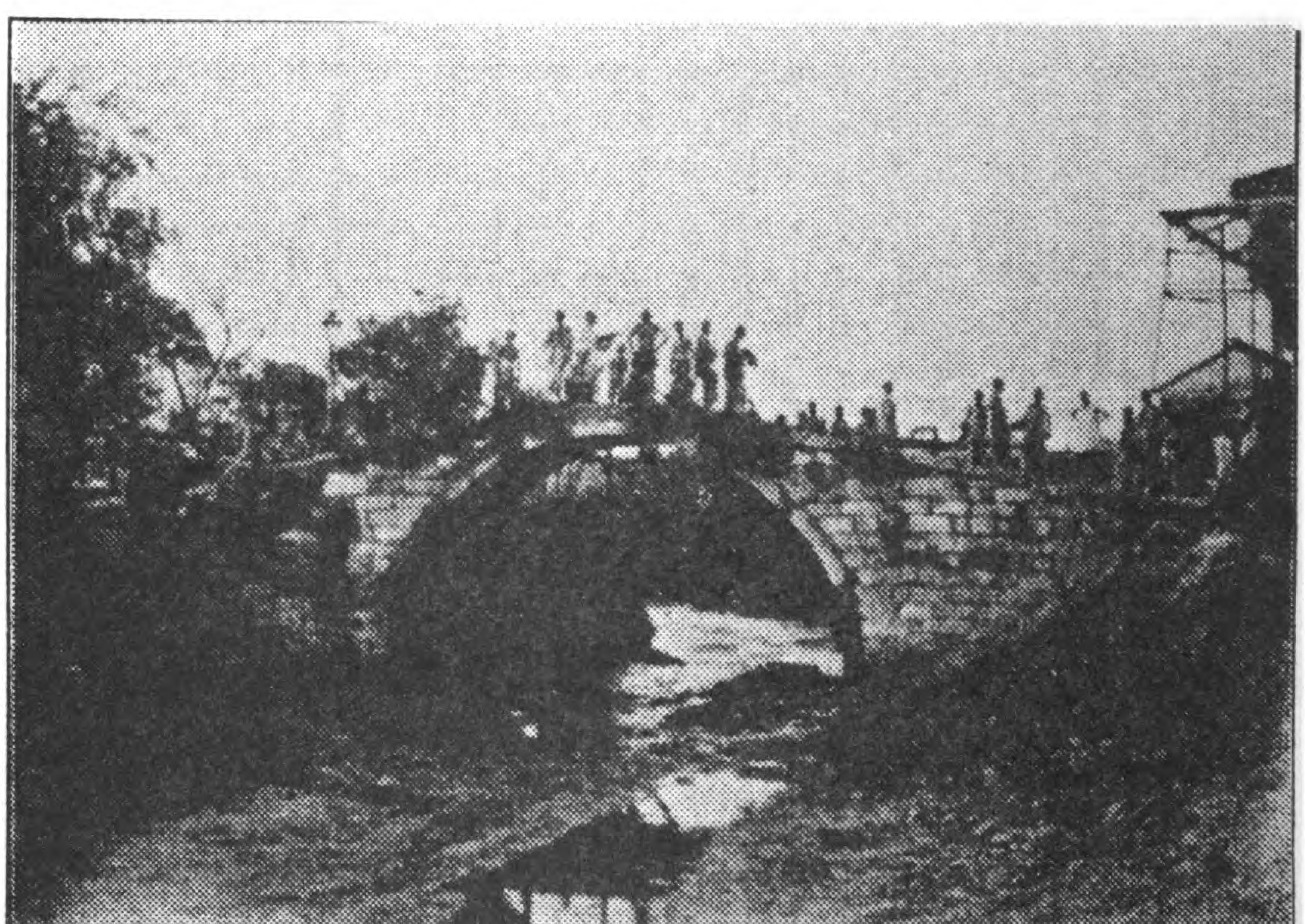
（銀赤銅朧銀　並彫刻金具付之價）
三圓五圓六圓八圓以上十圓位迄各種

（本店に於ては市内の分支店共通仕候）
小間物切手發賣致候間御用命奉願候

清國風景

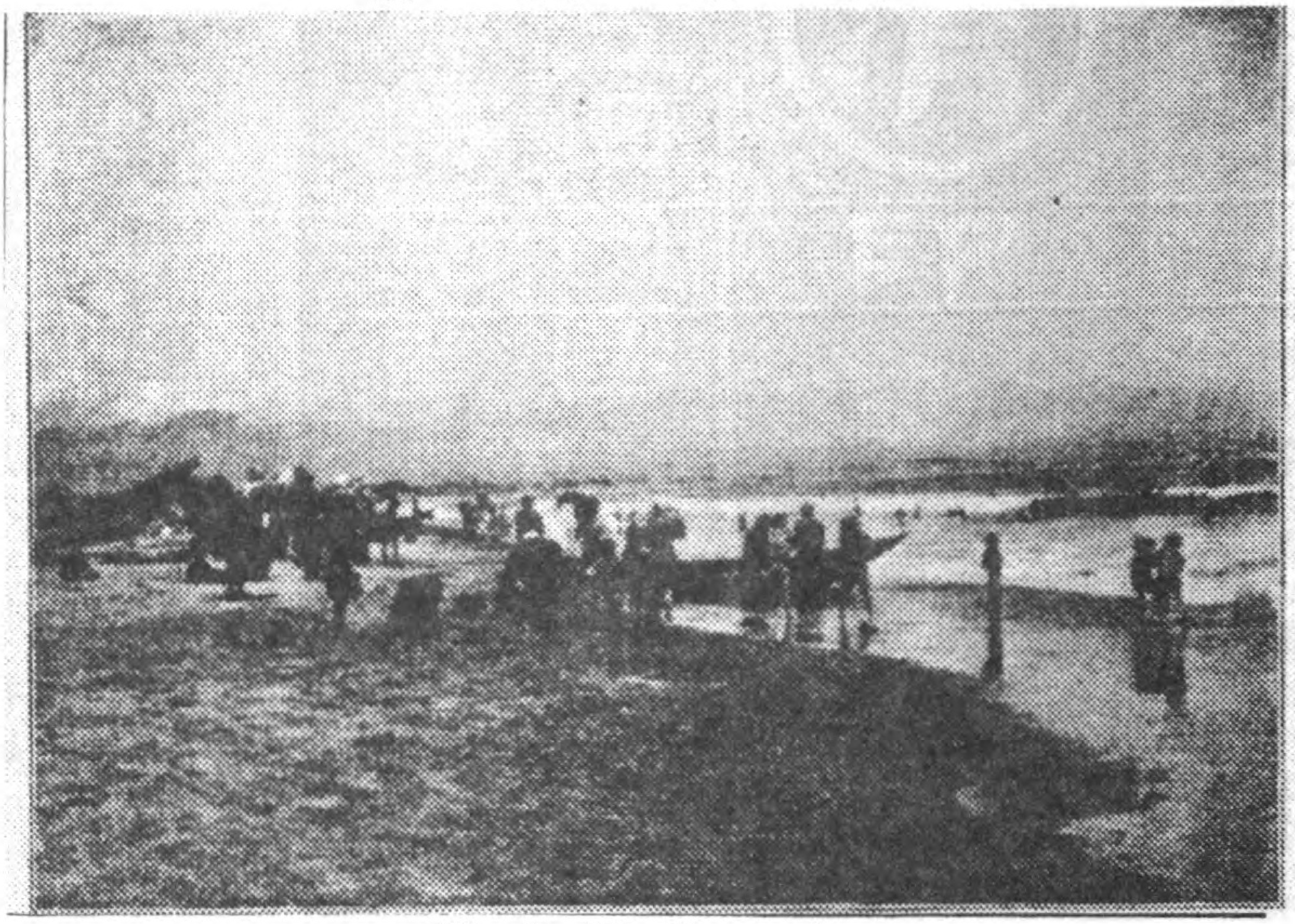


西湖



上海西門外橋

函館風景



大森濱海水浴



蓴菜沼より駒岳を望む

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

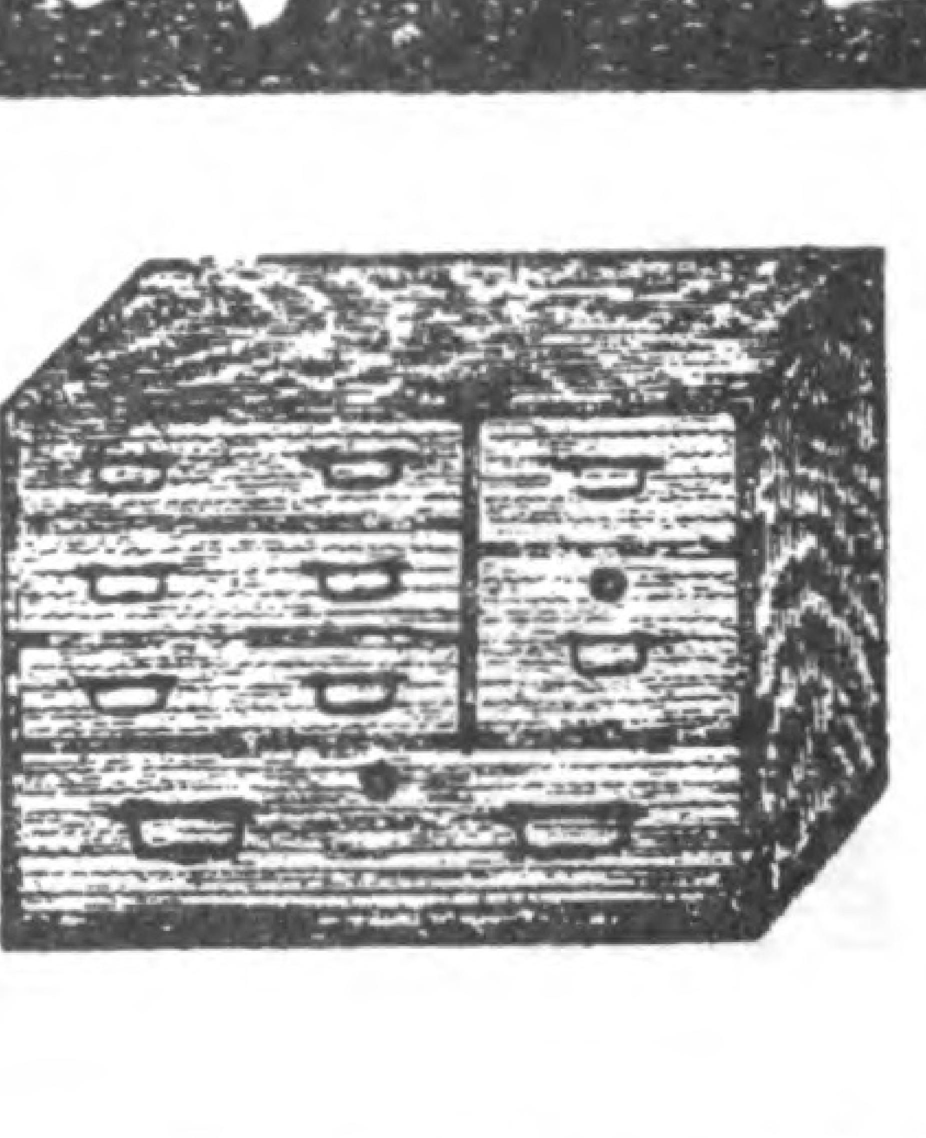
明治卅六年七月一日を以て擧行せられ候**第五回内國勸業博覽會褒賞授與式**に於て**一等銀牌授與**せられ候同業者出品の種類中に於て此稀有の名譽を荷ひ候こと（殊には出品七點とも）江湖御愛顧各位の御餘光と難有奉感佩候因て益々奮勵製作に關する總てに一層●注意を加へ尚各位の御引立に酬ひ可申候此段謹告仕候

清印 たんすの名譽

出品七点とも

第五回内國勸業博覽會

一等賞銀牌受領



御注文の思召ある御方には御申込次第たんす目錄一冊呈上仕候

（但郵劵貳錢封入の事）

東京市京橋區水谷町一番地角

清

越中屋 鷲塚清次郎

電話新橋五百七十一番

支店 越清支店

東京市京橋區水谷町三番地

㊥ 代理店 中原元助
大阪市東區南本町四丁目角

㊎ 特約店 桑野商店
長崎市酒屋町

㊀ 特約店 丸一家具合資會社
長崎市今鍛冶屋町

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

畏れ多くも**東宮殿下**の行啓を辱うし御買上の榮を賜

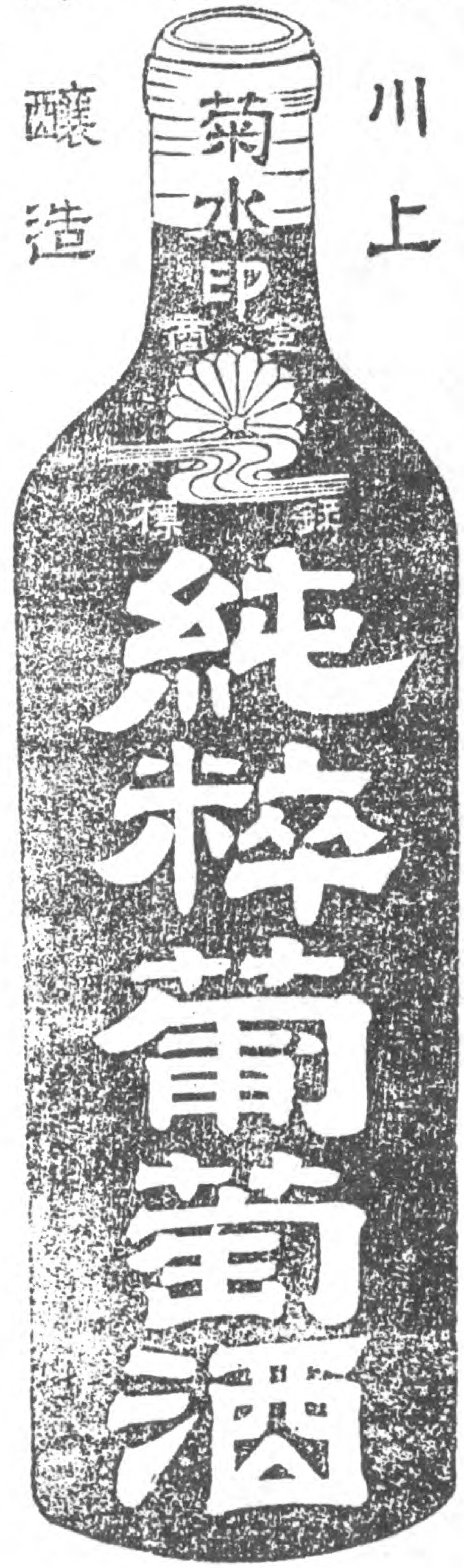
畏れ多くも**東宮殿下**の行啓を辱うし御買げの**榮**を**賜**りし越後岩の原葡萄園主人川上善兵衛氏の造品なり

發賣元

東京神田旅籠町三丁目（電話下谷百〇二番）

日本葡萄酒株式會社東京支店

高等滋養飲料



岩の原葡萄園

於第五回内國勸業大博覽會一等賞受領

衛生試驗所の分析報告及諸大家の賛評は本品の純良なるを證明す

販賣所

各府縣有名なる**藥舗洋酒店**にあり

女鑑

第拾參年第拾六號

女子の職業と報酬

男性と女性とは、その本來の性格に於て、相違あるが故に、隨つて其の位置、職業等を同一ならしめむと欲するは、殆んど望むべからざるが如しと雖も、我國今日の有様にては、或る範圍に於ける或る程度までは、男女間の位置と職業とが、同等均一に赴きつゝあるは慶ぶべし。例へば初等敎育並に中等敎育に於ける敎員たる資格の如きは、女性が男性と同じく收取し得べきところのものにして、乃ち敎授、敎諭若くは訓導といふが如き、位置に於て毫も差別なきは、女性に於ける進歩の一なりと認むることを得べし、又た郵便電信事務に於ける或る事務の如き、銀行其他の會社に於て是れまで男子の事務とせしところのものを分ちて、女子の事務と

爲せしものあるが如きは、職業に於ても、或る程度までは幾分か同一に歸しつゝあるを知るに足るべし。猶此他にも一々數へ來れば、已往數百年來男子の領域に屬せしものにして、近年女子の爲に次第に蠶食せられつゝあるもの、少なからざるべし。而して此の蠶食は、或る範圍に於ける或る程度を脱せざる限りは、慥に女性の進歩にして、則ち亦た世界文明の進歩とはいはざるを得ず。是れ豈に女性と男性との位置及び職業が、次第に接近しつゝあるを證するに足らざらむや。

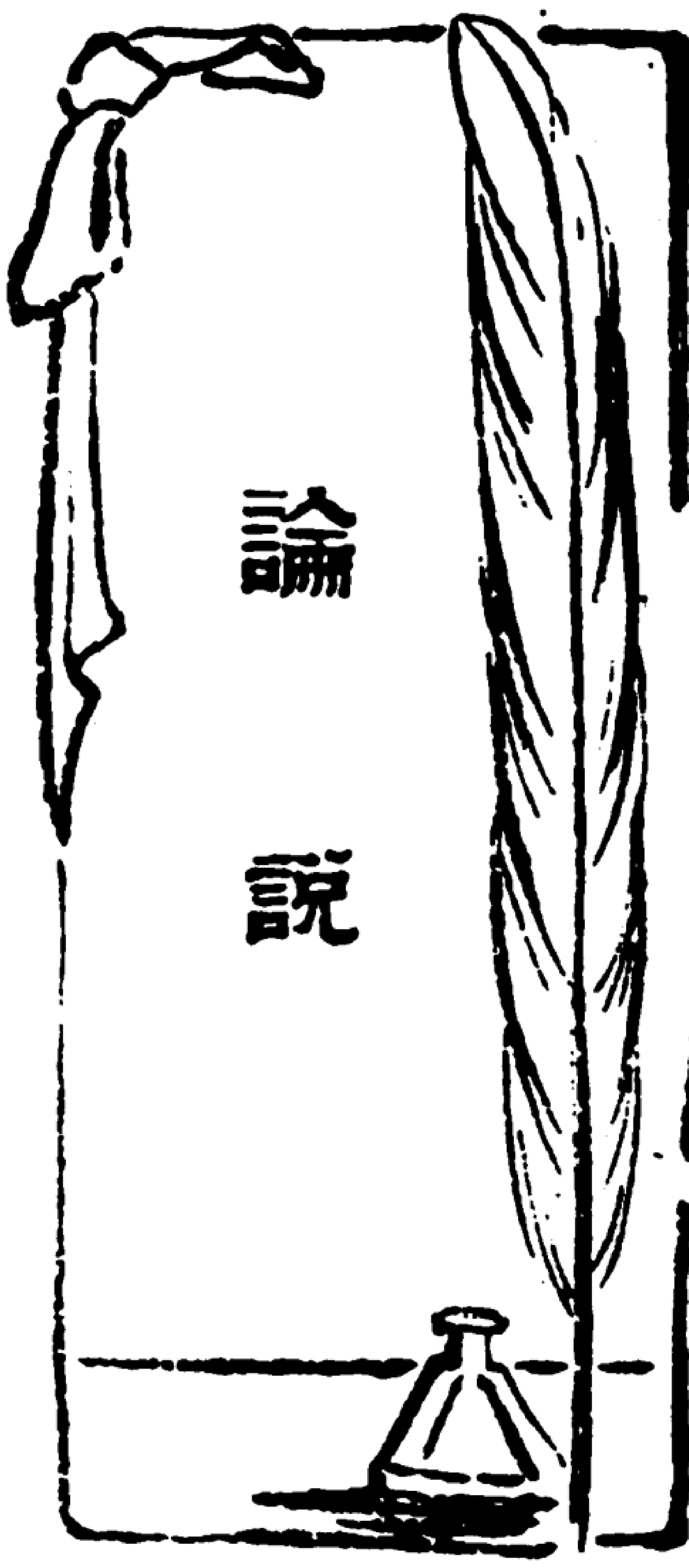
男女間の位置、職業が、斯く次第に接近しつゝあるに拘はらず。その待遇の同一ならざるのみか、甚しき相違あるは頗る遺憾の次第といふべし。同じく師範學校を卒業したる本科正敎員の資格を有するものにても、その訓導の職に就くや、一は男子たるを以て、概ね十五圓の月俸を受け、一は女子なるが故に、多くは拾圓に過ぎざるが如きは、比準を失したる待遇ならざるか。同じく檢定試驗を受けて、專科正敎員、又は準敎員などの資格を得たるものも、男女たる區別あるのみの故によりて、學力、經驗、熱心等の如何に係はらず、その待遇初より逕庭あるは不當ならざるか、將又郵便電信事務、銀行會社事務に於ける雇人の如きも男子なれば日給三

十錢以上を給すべきところにも、女子には僅に二十錢、二十五錢を以て足れりとするは、偏頗なる待遇といはざるを得ず。この頃ろ某大銀行が女子事務員を雇入れたる給額は月俸僅に七圓を過ぎずといへり。若し生活問題のみを以て論せば、地方の教員となりて、十圓未滿の俸給に安んずるは猶可なり。而かも東京の中央にありて、二十錢の日給若くは七圓の月給にして、如何ぞ衣食の資に不足を告げざるを得んや。

そもそも我國の習慣として、女子は男子に支持養育せられ家にありては父母に育まれ、嫁しては夫に養はるゝを以て當然のこととなし、偶々職業を營むものあるも、内職と稱して、たゞ一家の生計を補助するまでのことゝして、決して重きを措かれざりし故に、裁縫手仕事など必要なる職業も、婦人の内職てふ名の下に、その賃錢は、概して男子の職業に比し、半額以下を過ぐる能はざりし事實の觀念は、今日に殘留して、同じき位置にありても、その待遇に厚薄あり同じき職業に於ても、その報酬に多少あるを免かれざるは、強ち無理ならざる事情もあるべしと雖も、今日の女子は昔日の女子と其趣を異にして、中流以下の社會にありては、獨立の生活を營みて、自ら其身を養ふのみならず、往々にして父母を養ひ、嫁して其夫を補助するの必要

あるもの甚だ多し。さるを徇は内職時代の舊慣に據りて、その待遇を定むるは、女子其人の不幸のみならず、また世運進歩の阻害たらざるを得ざるべし。生活問題の急迫せる今の世にありて、十圓未滿の俸給を以て、生計を立てんと欲するは、容易のことにあらざるべく。無理なる節約を爲すか、又は職業以外に何事かの内職を營むにあらざれば、家族は愚か一身の計にも窮せざるを得ざるべし。斯くては如何にして、婦人の位置を進め、品格を高むるを得べきぞ。則ち間接には世運の進歩にも影響を及ぼすべきは理の最も見易きものならずや。

今一歩を進めていはゞ、是れまで一家の片隅に埋められたる婦女子が、始めて、世に出で丶、有用の器たるを得るに至れるは、國家に取りても、社會に取りても、將又男子に取りても頗る悦ぶべきことなれば、成るべく歡迎優待して、益々之が發達を圖るこそ、寧ろ必要のこと丶といふべきなれ、されば女子發達の方便としては、寧ろ男子に比して待遇を善くすべしといふも亦た不當のこととはいふべからざるに似たり。希くば蕾をして花たらしめよ、花をして果を結ばしめよ。女子問題を解決せんとするもの此點につきて一考を下して可なり。



女子の獨立的修養

東京高等師範學校教授
兼東京音樂學校教授　上原六四郎

予は數多の女の子を持つて居るし、又予の兄にも女の子が有りますが、兄は軍人であるので、始終家庭に在りて直接子女の教育に當たるといふことは出來ぬ。そこで自然自分が代つて此等の子供の世話を燒くといふ工合であるから、女子の教育に就ては、年來多少經驗も積み、又其躾方に關しても種々考慮を廻らして居ることである。方今我國では、女子の教育即ち躾方に關して二種の思想の衝突が起きて居るやうに見える。乃ち歐米流と日本在來の風とである。そこで此二法中、孰れが今日に適當であるか、孰れを採用するが得策ならんかと云ふに、各一得一失あるを免がれ難い譯で、我國傳來の方法にも一の長所がある。一概に守舊頑陋を以て目し批難することは出來ぬ。然るに又一方に於ては、歐米風の訓育法も近來隨分流行して來るといふ現狀であるが、右はどうも一難題である、和洋兩法相調和して、望み通りの圓滿なる効果を收むることは中々容易でない。若し日本固有の教育法を採用して之に偏するときは、その弊や時勢と伴はざる人物を造るやうになる。さればとて又亞米利加風の如く極端に進み過ぎても宜しくない。さうすれば所謂お轉婆娘を養成するばかりになる。女子は誰でも一度は他家に嫁ぐも

のである。以上の如き躾方では、第一其人の婚嫁することを妨げる一の故障になる。

果して然らば、日本の女子の躾方に關しては、今後成る可く和洋偏重偏輕の弊なく、能く中庸を得て失はざるやうに勉めなければならぬ。之は予一個の意見にあらず、誰人も異口同音に唱へて居ることであるが、併し右兩主義を適用して中庸を得る事、即ち日本在來の風と亞米利加風とを巧に折衷して好結果を收めやうといふは、却々困難なる話で、實際に於ては、如何しても一方に傾くことを免れ難いのである、然らば一方に傾くことは到底免れ得ないとすれば、兩法孰れに傾く方弊害尠なからうかと云ふに、予の意見では、寧ろ日本在來の風に從つて養成する方穩當であらうかと思ふ。

前陳の如く、女子の教育に就ては、往時の如く餘り窮屈なる箱庭主義は最早通らぬ。鐵鎖を以て縛り置く様な壓制主義も行はれぬ。自由も必要であり、交際も大切であるから、此點に於ては、將來も尚ほ大に改善を加へねばならぬ。歐米の婦人などは、寸時交際して試ても、思索に、風采に、實に羨ましい様な考は起る。談話をしても、無害にして而も愉快なことを話し、議論をしても、勿勿男優りのことを言ふ。所が顧みて日本の婦人は如何かといふに、それ等の事は、性來缺けて居る譯ではあるまいけれどまあさう見える。快活なる話もせねば議論も出ぬ。惡ういへば、否有體にいへば、唯々として唯だ主人の機嫌を取るばかりの事である。自己の良人を慰むるは固より結構なことであるけれど、日本婦人の動作は尊ぶべき理想より發するのではない。卑屈の精神が基因となつて、良人の鼻息をのみ窺ふに至りては、如何に

も感服されぬ次第である。併し斯くいへばとて、予は決して亞米利加流に、婦人に對して極端まで權利を與へよといふ意見ではない。考へて見るに、此點に關しては、佛蘭西杯の慣習は餘程中庸を得て居るやうに思はれる。家庭に在りても婦人は相應に權利を得て居る。又日本のやうに男子に壓制されて、獨立自活は容易に出來ぬといふ弊は無いのである。

我國の婦人が夫の鼻息をのみ窺ひ、卑屈な了見で夫の機嫌のみを取り、自恃心の缺乏して居ることに就ては、種々な源因もあるであらうが、大體より觀察して見ると、我國の婦人は一般に一定の職業を有せず、社會に出でゝ獨立的生活を營み得ざることは、其の主因であらうと思はれる。從來日本の婦人は、一身の運命を擧げて良人に寄托し、立身興家の方法他に無いやうに心得、自ら社會に立たうといふ精神も、技能も共に缺けて居る。それ故に、身一旦不虞の難に遭ひ、良人でも死亡する事でも起ると、生活の道は忽ち杜絶して了ふ。立派な家庭の婦人であつて、斯かる苦境に陷るものは、日本には實に有り勝のことである。されば予の意見では、今後人の妻女たらんとする人々は、音樂なり、裁縫なり、料理法なり、看護術なり、何なり婦人に適當なる職業的敎育を充分仕込んで置くことは頗る必要であらうと思ふ。中等の敎育を受くるものは、此等の一通りの心得即ち常識は修め得らるゝことであらうが、縱令家庭の事情に依り中等敎育を受け得ざるものに於ても、此等の智識は成るべく多量蓄積するやうに勉めねばならぬ。從來とても此事全然行はれぬではないが、尙ほ一層注意して充分修養を積み、技倆を備へる心掛けは肝要である。

婦人の思想を開發すると此の如く、技藝を練習せしむること此の如くするに於ては、婦人にも一定の見識といふものが着いて來る、從つて卑屈に流れぬ。品性も高まる。氣力も強くなる。男子に對しても男らしく交際することを得、結局婦人の社會的地位が高まるといふ好結果を收むるやうになるに相違ない。之に就いて、予は一の實例を有つて居る。予の姪は先年或る醫師に嫁したが、此人は最初藥劑師を望んだけれど、其後醫師にならうといふ考思を起し、終に其志を遂げ、今度は更に海外留學を企て、到頭之も實行して。丁度其頃姪を嫁がせたのであるが、不幸にして歸朝後間もなく死亡した。然るに姪は平素音樂を研究して居つたので、夫の洋行不在中にも、相應に家計の助力を爲し、又其死亡後に於ても、如何なりと自身獨立して生活するといふ現狀である。斯かる次第であるから、婦人は何でも適當なる職業を撰擇し、及ぶ丈け之を練習して置くことは極めて肝要である。一般婦人の生活がさういふ風に進んで來ると、前陳の如く、種々な方面に於て、女性の地位を高め、勢力を增すことも左程困難であるまいと思ふ。

家庭園藝

◎岩桔梗　元と深山の產なれども近年巣鴨邊の植木屋にても培養して賣出せり其丈一寸位にして桔梗の如く花は濃紫にして最と優し春先植替ゆる時干鰯を鉢底に入れて培ひ昨今開花の季節に根を洗ひて水盤に入るゝを妙とすべし◎世帶草　其葉滌の如く細く京阪地方の產なり秋先に至りて穗を出し招く尾花のそれにも似て風情ある眺めなり晩秋葉を苅込み春先植替ゆる時油粕を培ひ白南京の角鉢などに植込めば配合最も宜しからん



三枝清風女史傳

須藤求馬

清風女史、名は斐、字は子章、清風はその號、別に茅淵老嫗と號す。徳川麾下の士三枝某の女にして、土屋紀伊守の妻室なり。女史天稟慧敏にして讀書を好み、學は和漢を兼ね、博覧にして強記、詩歌文章をよくし繪畫をも能くし、心たてことに雄々しくして、家政萬端の行き届きたるは言ふまでもなく、内々には公の事にもたつさはり。良人を助けてその不足を補ひ。夫紀伊守勘定奉行を勤められし際、土屋は内室のかげにて此の役を勤めらるゝなど、世の人の譏りし程なりとぞ。また糸竹の道にも精しく、中につきて四ッの緒に堪能なり。忍び忍び京に上りて、雲上人の御許に彼れ此れまねりて、あるは糸或るは竹、互に取りかへつゝ、諸共に遊びもし。又上達部より種々の秘曲をも傳授せられし事あり。女史幼き頃は、大阪に住せしよしにて、大阪の地役などにて父に隨ひてありしが、後に江戸に下り、また夫に從ひて堺に行き、紀伊守長崎奉行に轉任するに及びては、また隨ひ行かざりしと見ゆ。かゝる故に、京阪には多く知れる人ありて、自から雲の上にもその名聞えたりといふ。

初め文化五年外國船(英吉利)長崎に來りて暴動騷擾せし時、時の奉行たる松平圖書頭(伊織)その事

によりて自殺せられたり。紀伊守は松平の學文の師なる由なり。文化六年の春、松平圖書頭の後を承けて長崎奉行に紀伊守任ぜられたり。後紀伊守御留守居を勤められ、八十餘歲にて紅裏御免にて勤められしとぞ。

女史は詩文を善くせしを以て、その著はす所、曹太家女論語解、列女傳拾遺、枝氏家訓、和泉日記、旅の命毛等あり。文久某年所天に先ちて歿りぬ、淺草海禪寺に葬る。

さて我國の女流にして、曹太家女論語を註釋せしは、前に清風女史あり、後に若江秋蘭女史あり旅の命毛は、土屋紀伊守堺奉行に任ぜられし時、即ち文化四年暮春の交、女史良人に隨ひて任地に赴かれたりし時、草枕旅の打ちきゝ物語にて、到る處詩を賦し歌を讀み、まゝ和漢の故事を引き出て辯論をも試み、文體は淸少納言の枕草子に擬して、その心がまへも淸少納言に近し。そが中の一二節を摘で揭ぐれば。原吉原の邊を過ぎつる折、富士の峯を眺むる條。

原吉原をそ行、かねてもこゝに不盡の根なこりなく眺めはやとそ、…………覆て見えずこゝらならんとおもふ、根かたはかりけちゑんなるものから、ほゐなくこひしき事のかぎりなり。むかしう堤の春色のみ望みしが、早梅は夏をむかへて結び、殘絮は春を送りて飛ふ。濛々たる空の物むつかしきを、風少し心地凉しうおほゆるにとばかり見あぐれば、只こゝもとの目の前に不二名殘なく霽れわたり、あなうれしともうれし、けふ見ずば、またいつの世にながむべき命のほども定めなきをとまでに思ひいれつゝ、ましろきもせず。花水橋にしばしばかりのおも影とはやうかはりて、裾野より頂にいたりて隠なく見ゆ。右のかたに愛

鷹山をかけたり、そのかけより寶永山つらなりて見ゆ。卯月の景色しるく、半らばかりより雪は消て、白き糸を引下たしたらんやうに見ゆ、眞白なる頂も、只白きにはあらで、白きが中に濃淡あり、高きと低きとくだりにすぢを削りなせり。たとへば、白芙蓉の瓣の白きすぢをひきたるごとなり。から高卑濃淡の自からなる白妙のさまを、などて世々の畫工はかき分けざりけん、と口惜しく思へど。げに少納言のかきをとりするものといふにやなずらへまし。しばしありて風やみぬれば、目たゝく中に見へずなりぬ」と記るされ。即ち一首を賦して曰へらく。

鄕國辭レ親何百里。高山流水逐レ我從。
雲間聳出富峯雪。烟浪洗成三保松。
行抱二離恨一歸夢少。頻侵二塵事一旅愁濃。
空期後會知何日。驛路猶遙對二暮鐘一。

かくものされ、また薩埵山を踰えたる所を記されたるを見るに。

さつた山こゆるほど、空晴れわたり、八重雲ともいつかいにけん更になし。雨の名殘山道なめらかにて、たから細きを登るいとあやうし。

上有二萬仞山一。下有二千丈水一。
蒼々兩岸間。濶狹谷二一葦一。

いまだ夜ならねど、悉巖昏々無風にも白浪おごれり。春にもまがふ四方の景色、ゆふらかにうち吹風に、海の面はなぎわたれど、我が行道は小暗くて、波の音おそろしう岸にたてる巖にくだけ散るさま、雪ふりかけたるやうなるを、千丈の下を臨めば、親知らず子知らずなど云はこゝらなるべしとぞ思ひやる。たうげに至りて、くら澤と云ふにやすむ、名にも似ず、いとはれ〴〵と淸けなる樓にて、海つら遙に見わたさる。靑山簇々として水

茫々たる、ひろ／＼とはてもなく、たゞみを敷きたるやうなるに、いづち行らん眞帆かけて、はしる舟とも、行かた霞にたちかくれたり。左には幾重を打ち重ねたる山々見ゆるこそ、きのふこえにし函嶺なりと人の敎ふるを、げに故鄕は山のいくへゝだて來ぬるいとかなし。山のふもとかすかに烟たつ見ゆるは、何ならんといといぶかし。元弘建武の亂れより、みちのへに立つ烟ありとは聞にしを、かうしづけき御代には、これやあまの鹽やくならんといふ。彼の戀しき君よ、いかにと見わくれば、きのふ氣ちかき姿には似ず、遠く美しう、裾は八重山に隔つゝ、みがゝれ出たる淸らに潔ぎよしともいへばおろかなり。こゝは海道第一のけしきとぞ、人もめつるなり云々。また興津に到りて、宿につき。

始知爲レ客苦。不レ及二在レ家貧一とうちずして寢ぬれど、沖津なみたかくていもねられず。

かへるてふ名もなつかしき波の音を
ねられねまゝにおきつゝそきく

と詠み出で。岡部を過ぐる時、わさ田、さては色々の草などを見て。

莫レ惟貴與レ賤。莫レ言富與レ貴。
含レ香生二幽谷一。葆レ光交二俗塵一。

これ殆と鬚眉男子の言なり。花顏柳姿の口吻に似ず。その自負知んぬべし。近江に入り湖水を眺めたる記事に。

十七日、けふはまた夜明けぬ間に、松ともして出づる、道遠からねど、大津にとく行て、物したためばやの心がまへなり。泉暇にて夜明けはなれて、日さし出づ、まだ東雲に橫田川をわたる。先づ三上山遠く見ゆるに嬉しうなりぬ。これが左に打ち積きたる山々いと多かり、そが中に少し白き

所あるを、何に心もなくて行を、物擔ふ男の心あるが、あれ御覧ぜよ、あの少し白き山こそ、比良の峯なれと敎ふるに、心つけてよく見るに、まだ消えやらぬ殘の雪、しら布を二筋三すぢ引かけたらんやうに見ゆるが、かへりて白妙なるより見どころ多く、なつかしさ氣そひて目かれせず。花はさかり月は隈なきを見るものかはといひしもおもひやる、とばかりに景色うつりて、山もかくれぬ。わかぬ心地にかへり見がちなり。夏見と云ふ處に休む、こゝは「ところてん」と云ふものを、あまた水に入れて淸く潔くし、その上に、種々おもひ〳〵の人形造り据ゑて、水の上さまにとりて、こばるる計すゞしきに、勢に人かた自から舞出などす、いといかめきたれど、今日の暑さには、所得たる心地ぞする。所の名とあき物とけふの暑さの心もちて、されうたいかにと人のそゝのかすに、みそかに取り敢へず。

　　けふはさてところ天氣もあつければ

　　　　夏見すゞしき人かたの影

照まされば、暑さことに强く、とく湖見んとおもへば、梅の木の藥うる家、うばがもちゐも目につかず。矢倉といふ所より遙に湖ぞ見ゆるうれしさたくひなし。誠に八つの眺は一所ならねど、世に似るものなく見ゆ。そも琵琶のうみと名づくるは、古きよりの名にあらず、好事の人のち〳〵いひそめしなるべし。附會の說とこそ思へ。先づ瀨田より貝津のあはひ二十里、堅田より北へ十七里とかや、これをびはの腹にたとへたり。宇治へ入らんとするにいよゝ細ければ、海老尾にたとふるを、竹生島は覆手にやあらん。そは敦賀にとなり、東に賤ケ嶽比良の高根の殘雪、こゝよりなごりなく見ゆる。鏡山ことにさし出たれど。しらが嫗にな

りぬれば、立より見んもいとはぢかはしう、湖には小舟あまた漕ぎわたるは、釣するなめりとぞ見やらるゝ。所々竹にやあらん、簀を長く編みて水にひたし、それが中に又横ざまに木竹をあまた渡せる見ゆるは、あじろと云ふものにや。網代の氷魚とる業は、歌にぞきゝ及びたる、見るははじめにぞ。三上の山はさしむかひつゝ我れにつれて歩み行く、げに鹽尾と歟いひ習しけん形こそおかしけれ。石山は小暗くて見えやらず、唐崎の松は朧にて、萬代のすがたいと目出たし、矢走は舟數多よせて、歸帆の趣なつかしからぬにはあらねど、人氣多きに却て、愛なき心地せられて、今少しふりたる景色沿ひたらんには故あらましとぞ思ふ。

　山冷有二微雪一。波平未レ生レ濤。
　水心清如レ鏡。千里無二纖毫一。

瀬田の長橋うち渡る頃、夕日暉きて、湖に照そふ景色、三千世界眼前に盡きぬべし。橋もとゞろに人多きを左に眺めて、長閑なる流れに筏さし下すは、宇治に通ふかたと見ゆれば、人多きよりもゆかしうて、諸共に行かまほしき心地ぞする。

　浮きて世をわたるはおなじ水なれ棹
　　さしてともなへ宇治の川をさ

粟津の松原いと長けれど、松の木の間より膳所の城ほの〴〵見えて、打出の濱いづちならんとゆかし。兼平の冢も左にあり。げに睦月二十日あまりなりけれど思ひ出でゝ、心ばかり佛の御名を唱ふる。義仲寺などゆかしけれど、例の立よらず。此程目習れぬ手弱女ども引つどひ、笠きつれて歩み來る姿、都人とはしるく、艶なるものから、何の故ありてからは集ひ來るやとあやしきを、宿にきて後ぞ、三井寺に御帳開きて拜まれます佛は、女人結縁の爲めとて、參り集ふとぞきゝし。我れ

も女なるを近きに參れど、佛の御影拜み奉らず、よそに過ぎまゐらするぞ、罪深ういとかなし。玉川の古き跡とて、濁り江かたばかりして、いと白き木にあやしう書いつけたる、昔の人戀しけれど、餘り新にはりて、草一つだになきものから、興なきにや、過行く人見返りもせず。何も〳〵から愛なくなり下りたるぞ口惜しき。急ぎいでたるしるしありて、未の時刻に大津に着きぬ。

和泉日記五卷は、文化四年土屋紀伊守堺に赴任せしより、同六年三月十六日までの日記なり。いかにも筆たけて、なまじひの專門學士は及びがたく、優に漢才もありと見えたり。年齡は四十餘歲頃の作ならん、生れつき文才あまりありて、比較的に稽古の力うすきか。師承の少きまゝに、多少たがへる節もなきにしもあらず、玉の瑕とやいはん。聊か筆加へたらんには、決して中昔の日記に劣るべしとも思はれず。上の二卷は筆花やかに、中の二卷は古雅老練。下の卷は强弩の末力なるべし。女史や、學藝優にして才識長け、昔時政所平氏の君は、とみに五種の和歌をつらねて、兄の大臣を助けまゐられしなど、男にも勝れたるすさみあるにおさ〳〵劣らず。その筆の匂はなやかに、文の實あはれなり。ひるくひの女にかぐはしさ、やゝ立ちまさるべくや。此の夫たらん者は、よくせずば瓜くはれぬべし。』

家庭園藝

◎朔紅藤　支那南方の產にして又臺灣藤と稱せり其花紅にして美しく八朔を期して咲初むるをもて此名あり仕立方は花開の時節まで油粕を水に浸して絕えず根元に培ふべし◎蓮　冬季葉の枯れたる時別鉢に取りて水を張り春まで持越して又植替は夏季に至りて更に水盤に入るべし種類多き中にも一本蓮最も風情あり

學藝

通俗土佐日記（第廿一回）

北海道師範學校教諭　兒玉彌三郎

八日、尙ほ川の邊に煩みて、鳥飼御牧といふ處に留まる、

○川の邊に云々　海より入りて幾程もなき處なれば、川の邊といひしなるべし、煩みては前に出でたり、

○鳥飼御牧　攝津國島下郡に在りといへり、川口より五里許の處なりとかや、

今宵、舟君、例の病起りて、痛く惱む、

○例の病　とあるを以て察するに持病なるべし此の鳥飼にさへ舟の留まれるに依りて、旣往將來を思ひ合せて持病も起りしなるべし、是れ亦例の歎きを思はせんが爲めなり、然らざれば此處に限りて持病の起れるを記する理なし、

或る人鮮なる物持て來たり、米して返り事す、男共、竊かにいふなり、飯穗して石鯨釣るとや、斯樣の事、處々にあり、今日、節忌すれば、魚用ゐず、

○或る人　誰とも知られず、此の近邊の人々ならば豫て紀氏の恩を荷へる人なるべし、

○鮮なる物　とは鮮魚なり、下に魚用ゐずとあるにて思ふべし、

○米して云々　米を以て返報したるなり、前に

もありし如く、受領の歸途なれば誰も富めるが通常なるに、紀氏廉潔にして貧しかりしを示したるなり、

○男共云々　是れは從者なり、記者の女より然か言へるなり、窃かにいふなりとは主人の吝嗇なるを誹る言なるを以て、主人に聞えざる樣にいへるなり故に前の米して返り事すとあるも淸貧を衒ふにあらずして、吝嗇なるを思はせんが爲めにせるなり、

○飯穗して石鮅釣るとや　とは飯粒を以て石鮅を釣るといふなり、俗間に麥飯で鯉を釣るといへる諺に同じ、好からぬ物に易へて好き物を得る譬へにいふにて、鮮魚の代りに米を與へたる故に戯れて書けるなり、石鮅は溪間中に生じ赤白二種ありて共に眼赤く嘴尖り味美なる魚といへり、とやとは從者等の窃かに言へるなれば確かには聞えざれど、飯穗して石鮅釣るといふ樣に聞えたるが、眞に然か言ふにやあらんとの心なり、是れも設けて書たるなるべし、畢竟從者等の心には、鮮魚を得たるからは相應の返報すべきことなるが上に、受領の歸途なれば其の贈れる、人も善き物を返報せらるべしと思はんに、意外にも米を與へし吝嗇を窃かに誹れることを書きて、さて記者の心は、紀氏元來廉潔にて、任中毫も貪らざりしかば、他の受領とは違ひて貧しきが故に、眞に贈るべき物も無きに米を贈りたるにて、從者等の思ふ如く吝嗇なるにはあらじ、止むを得ざることなるべきに、思ひ遣りなきことをいふものかなと、紀氏に同情を寄せたる樣にも見え、又從者等と同意にて誹

りたる樣にも見え、何れにも偏せざる書き樣、偏に紀氏の自記ならざる由を思はせんが爲めなり、

○斯樣の事云々　とは人の好き物を贈れるに對し、返報の輕きと處々にてありしといふにて、片腹痛きこと一度のみならざりし心に書けるなり、言外には紀氏の恩を荷へる人の多きを思はせたり、

○今日節忌すれば云々　節忌のと前に言へり、魚用ゐずとは精進なれば魚を食はずといふなり此の魚は上文なる人の贈れる鮮なる物なり、舟君の食はざりしにて從者等に食はせたること明かなり、故に其の魚は皆、人に與へたりといふべきを、自ら食はずとのみ書けるなり、

九日、心もとなさに、明けぬから、舟を引きつゝ上れども、川の水無ければ、膝行にのみ膝行る、

○心もとなさに　とは辛うじて此處まで來れば一刻も早く都へ歸らんと思ふに反して水の干たるをいふなり、

○明けぬから舟云々　を明けぬにて句としから舟をと續けて解する說もあれど、今は本文の方を取れり、即ち未明よりの意なり、よりの意にからといふ詞を用ゐるは古體にして萬葉集などに其の例多し、俗語と思ひ僻むべからず、畢竟片時も早く歸京せんとて斯く夜の明けざる中より舟を引き上せるなり、

○膝行にのみ膝行る　舟底砂を磨るをいふ、斯く二つの同じ詞の間にの字を挿める意は、前の後方退きに退きての處にいへるが如し、海に

て既に充分困められ、今又川に來ても猶は斯く舟の進み難きを歎きたるなり、

此の間に、輪田泊の放處といふ處あり、米魚など乞へば、行ひつ、

○輪田泊　淀の邊に大輪田泊といへる處ありて後には大渡といひし由なれど、今は確かに何處とは定め難し、

○放處　とは放にわの添はりたるなり、道などの別るゝ處をいへるなり、

○米魚など云々　是は舟中用意の品乏しくなりたる故、此の邊に知人ありしを幸ひ、乞ひに遣はしたるに貸し與れたるなるべし



和畫通信講義

山崎隆子





箱根山上の別莊

廣田星橋

溫泉場も面白からずとの思立で中流の會社員白フランネル脊廣の洋服でカバン一ッを持ち男女の愛兒を携れて東海道列車に乘込み、車室中ビスケット、サンドウイチに、愛兒を慰め國府津から電鐵を驅り一時間程で箱根湯本に達し、夫から車二臺を傭ふて堂ケ島に至り、其手前「玄のぶ塚」の邊で車を返し同所某別莊の門前で歩を止めたが此日實に褥暑ひので愛兒もたゞをこねる、ヤッと茲へ着て先よしと思つて時計を見ると三時頃。

別莊の玄關前で魚板(寺の喫飯時に打つ魚形の板)を撞木で打つた、すると一分間程で取次の女中(島田髷矢絣の單物)靜に出で敷臺へ下り一寸手を突き「居らつしやいまし」と慇懃に挨拶した、客は名刺を通じ「不意に伺ひまして甚恐縮ですが御主人は御別莊に御滯在ですか」、「ハイ當方に居られますが暫くどうぞ」、と奥へ行く、見れば溪流は蛇のやうに旋つて汗を洗ふ心地である、傍にベンチがあるのでヤット皆腰を掛けた、すると女中が出て「何卒お通りを願ひます」、其言葉に履を脱かけると女中が右手を指して「こちらへ」といふから其案内の通りに行く。

右手の入口は支那風で敷瓦を踏んで行くこと五間程石階を昇ると十五六疊敷、宛然禪寺の選佛場といふ構造で辰巳から涼氣を納れ其階下は溪流湛へ瀑水の響は那邊より來かると坐に快味は起つた、

女中は「一寸御休息をどうぞ遊ばして、嘸お暑う居らつしやいましたらう」、眞中の紫檀のテーブル籐製の安樂椅子二脚があつて、「これへ」といふから三人はそれに腰を掛け、机上に烟草盆卷烟草入れ、團扇杯が備はつて居る、女中は去つて暫くすると切り立の白手拭を熱湯で絞つたを小籃に入れたのと、朝顏茶碗三つを盆に載せ、麥湯を貯へた支那製茶壺(此は夏季に飲料を冷却する器で冬季は溫度を保つ便利な物)を持來つて此麥湯を注で行つた暫時此に渴を癒て休んで居ると、主人は絽の羽織帷子にて出當季の挨拶簡短に畢り、又案内につれ北隅の入口より進むと、八疊程の小座敷で茲は日本造りであるから客は履を脫ぎズット通ると女中が「どうぞ風呂を召しまして」、此間帽子、カバン杯は女中に運ばれて、竹製の衣服臺に白地浴衣三枚を載せへコ帶も添ふて來て居る、で衣服を着替る、此室は一方口で開戶に鍵を裝てある、案内に隨つて風呂場に至る、四間程の間口に立る四枚引の板戶を開る、そこは八疊敷の一間籐蓆を敷ぎ、大玻璃鏡と棚に化粧道具左り手の階下を降ると六疊の間、茲で浴衣を脫ぎ、四間間口に玻璃板を嵌た大板戶を開け階段を下りると風呂場で奧行六間も有らうか流し板に風呂が二通り藥湯と並湯、高き龍頭を捻れば湯瀧低きを捻れば頭髮を洗ふ水も出る、女中は、タウエル石鹼を置て去る、で浴すると流しの男(白木綿の筒袖、半股引)横手の開戶より出「お風呂のお加減はいかゞで、お流し」と桶數杯の湯を出し脊を洗ひ「御ゆるり」と、直に去る、愛兒は溢れる程の湯水にボチャ〳〵狂ひ遊ぶ快味は又格別、入浴、二時間餘、鏡の間で髮を梳たり杯して元の八疊敷に戾る茲に籐枕、麻の敷物、茶、烟草盆、卷烟草、郵劵、封筒、卷紙、半

紙、硯箱、杯備はつて居る、で團扇に身體を煽がせ皆ゴロリ暫時トロ〳〵涼風に驚された、女中更に着替を持來り(子供の筒袖共)手製の葛饅頭を玻璃器に盛り、新聞紙、箱根總温泉の寫眞手遊びまで來て居る「御用がございましたら呼鈴をお鳴し下さい、」と立去る、やゝあつて又出來り「主人がお待受致して居りますからお休息になりましたらどうぞこちらへ」と手をついて演べた、で案内されて行く。

庖厨の模樣

母屋より廊下傳ひに折れて行く山の麓が十疊敷和洋折衷の庖厨で瓦屋根煉瓦造り石敷で三方二口宛のガラス窓は引戸になつて居る、正面にストーブ改良竈は右手棚數段、茲に鍋、鉢の類が乘つて、次に大テーブルに俎板此間に石造七輪三ッを据え、左り側に臺流し、傍の戸棚に手廻りの器皿がある、臺の左りに石造の大な生洲、水鉢、之に山上から樋が仕掛け龍頭の捻口より常に清水を堪へ、洗ひ物に供ふる石造の水盤がある、汚水を流す、樋は「流し」の下より外に通じ、離れて三疊程の煉瓦屋に日本酒ビーヤ杯の樽があつて溪流中の竹棚にビーヤの瓶は浸つて、傍に菜園も見得る。

馳走の獻立と庖丁

一吸物　鮒、素麵、

蘆湖の鮒を片身おろしにする、此は鮒を能く洗ひ頭を切捨て三枚におろし、其身を角切り器に取置一寸ゆがきザット炙て臭を去り、茹素麵を程好く加へ、冬瓜の頭、蔕を切り捨て四ッに割り皮を剝き、せんに打つて一寸湯にがき、前の切身と共に椀に盛り別に煮立せた清汁を上より注ぎ口は柚を入れる、

一洗ひ　鮒、

鮒を以前の通りおろし、刺身の樣に切り目笊へ入れ、清水にて十分に洒し、皿へ氷を置て玉簾を敷て之を盛る（尤氷は出す時に添ふべし）、獨活を白髮に切つたを妻とし、山葵醤油で用ひる、

一酢の物　白瓜　椎茸、鯉、

白瓜を皮を剝き薑擦子にておろし（一人二本當）十分水を絞り置小椎茸を薄醤汁で味を附け、鯉の鱗をふき、脊の良い肉を取り其皮をそぎ、程好き大さに切りザツトゆがき置、前の白瓜を皿に盛り、右鯉の身を加へ、小



椎茸を添へ甘酢を上より注け、罐詰の味附海苔を炙り二枚程放す、

一うま煮、鳥肉、自然薯、牛蒡、

自然薯を茹で竹串で上を擦り、皮を剝き五分程に切り鹽と和三盆（上砂糖）で煮る、西洋人參を前の如く皮を去り、二寸位に切り前の如く煮る鳥は鶩の上肉をブツ〳〵に切り、炭火で醤油、三盆とで能く煮たのと前の品とを小鉢に盛り、靑身に小人參の葉を一寸添ふる、

一玉子燒

此はヲムレッ仕立で鳥肉の切れを薄醬汁で煽り鷄卵を割り攪交て脂油を引た西洋鍋を煮立せて之へ玉子を注ぎ、炙る間際に肉を入れ片々より卷煎餅の如く卷のである、

一燒物　鯵

大な鯵の頭を切捨て脊骨の兩際から腹の切れぬまでに庖丁を入れ左右に開き、骨をすき取て其儘尾を中へ折返し、二本の鐵串で下より×形に廣く縫ひ、斜に鎌の角へ貫き鹽を撒りて炙き皿へのせて靜に串を拔き去ると膝折れの形になる又姫百合の根を見得よく削り、鍋へ和三盆と鹽を解してピタ〱に入れ、中へ伏せ並べ、水色にあるまで煮上げ根の眞中へ竹串を刺し引上げ皿へ並べ酢取りの生姜を添へる、

菓子の製造

一葛饅頭

久助葛（上等）を五合程漉水で固い程に捏ね、適宜の大さに伸し置、別に製へた漉餡（此は干餡を用ゐるが手數を省く）を和三盆と食鹽で煮たのを丸め、其伸した上へのせ四方より包み蒸籠の中へ行儀よく並べて蒸す、釜の湯が沸騰つて居れば直にプーと湯氣が噴く夫で出來上る、

一馬鈴薯羊羹

蜀黍の粉を程に練り親指の頭程位に丸め、沸騰つた湯へ入れ熟たのから網杓子で掬び揚げ、馬鈴薯を其儘茹て手で皮を剝ぐ、先に庖丁で剝ぐもよいが少し煮過た位にして引揚げ擂盆へ入れ擂木で搗き能く擂り、馬尾篩の裏漉しにして甘過る程三盆を加へ食鹽を程よく加へ（極甘い所へ鹽氣を持つを度とする）夫から濡布巾で前の蜀黍の濕りを拭去り、別に濡布巾を敷て其上に之をのせ餡で包み、布巾の儘「つまみ羊羹」の形

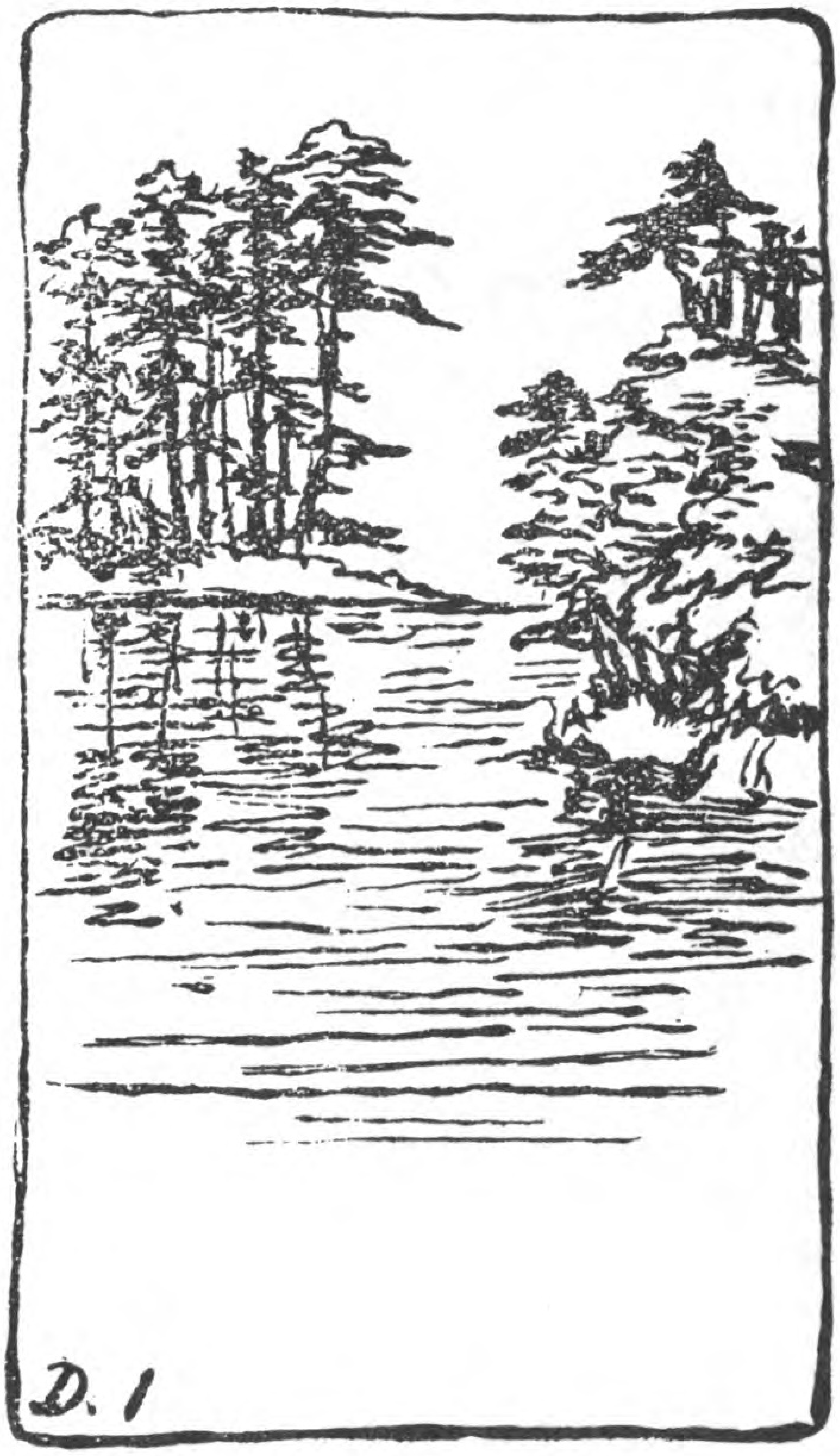
に拵へた、

臺所の專任

不意の客に膽を練つた茲の奥さんが單物襷掛で白前垂を掛け手拭冠り、褄端折りで料理方の專任として魚箸を取り鹽梅して補助は女中二人何れも同前の形で甲斐〳〵敷働き指揮は行届いてさも愉快氣に見えた

廣間の體裁と馳走

二階の二十疊敷にパナマ織の敷物正面一間の床に文晁筆、墨畫雲龍の大幅支那籃へ七草の投入れ、七官青磁の香爐、違ひ棚に蒔畫の料紙文庫、硯箱を飾り、麻布の坐蒲團、煙草盆、卷煙草入れ、香合、羊羹、盛りし青磁の菓子器、支那製の煎茶器は備はり、主客安坐で懇談は熟して、東南の椽側より庭前を望めば眼下に調べの瀧は飛下し溪流潺々山腹に夢窓國師の堂あり天然の風色を假り來つて正に是別天地の感は轉湧出、涼風袖を拂ふて其の快味は盡されぬ、所へ前述の品々は何れも清楚なる器皿に盛られ、打水した膳、ビーヤ瓶を氷詰にした桶、切子の杯杯順次に運ばれ、献酬闌なると共に早夕暮となつて、ワザト茲



は電燈を廢して洋蠟の燭臺二個は照され、數時にして喫飯は畢つた、此から盆立の點茶は奥さんの手前で十二分の歡を盡した、すると主人の誘引で宮の下邊を夫妻等と共に散歩した、歸れば十一時、

寢床の有樣

先の間より西北へ折れた廊下を行くこと六間程で十疊敷の間へ送られると、茲に麻の蚊帳が吊つてある、女中が「お寢衣をどうぞ」と香水に薫らせた寢衣に着替え帳中へ入ると麻布の敷蒲團に金巾は包まれ、麻の御殿摸樣のカイマキ、白布を卷たくゝり枕、枕畔に烟草盆刻烟草とシガーが備つて「寢覺」に長羅宇の銀烟管、香の薫りはほのめいて、「瓶掛け」に、銀瓶、傍に煎茶器、水指、紫蘇、香煎(京都祇園の)が並べて湯は松風を響かせ、有明燈、手蠟燭マッチが臺にのせ、呼鈴は手を延した所に装置してある茲の周圍は縁側で葭戸の外は小さきガラス入りの戸である、宵の内耀ひた電燈は消されて一際寂寥と愛兒も遊び勞れてたはひなく臥した、枕時計は十二時過、

目覺れば九時過、いつか枕畔に單物、小玻璃鏡、煉齒磨、楊枝、陶製の啖吐き、タウエルが並べてある、ベルを押すと女中は來り「お目覺でございますか宜しければお風呂をお召し下さいまし」と此内楊枝を遣ひ、入浴の次第前日の如く直に二階の八疊敷へ通され、其内女中は愛兒を入浴させ茲へ連來る、居廻りの備付は畧前日の有樣(品質は不殘異つてをつた)である、

朝食と舟遊の準備

沸した牛乳はコップに盛られてある、で之を飲み畢る時に燒立の上等パン、半熟の鶏卵珈琲抔進められ、主客共に喫し了つて懇話は湧いた、此から

主人の誘引で酒肴を携へ蘆湖に舟遊することなつた。

客の料理感

昨夜の献立は只譯もなく、舌皷を打つたが當意即妙といふ山家料理で自家有合での庖丁は御手際といふより外はない、併し「洗ひ」に鯉を遣はずに「椀」種と衝突する「鮒」を遣ひ分けたは感心と譽るか窮策か知んが鮒一種の惡臭を感じさせぬが妙だで「鯉」は酢の物へワザト遣つたが可笑しひ、全體の趣向が「普茶」と「會席」と「洋食」の三種で成立たが盛夏の即席料理は殺風景の我等にはあんなのが快味だ、唯奥さんの苦心は思ひ遣らる、之が眞の「馳走」だ、サゾ子供連の押掛客には困却つたであらう、感謝々々！。

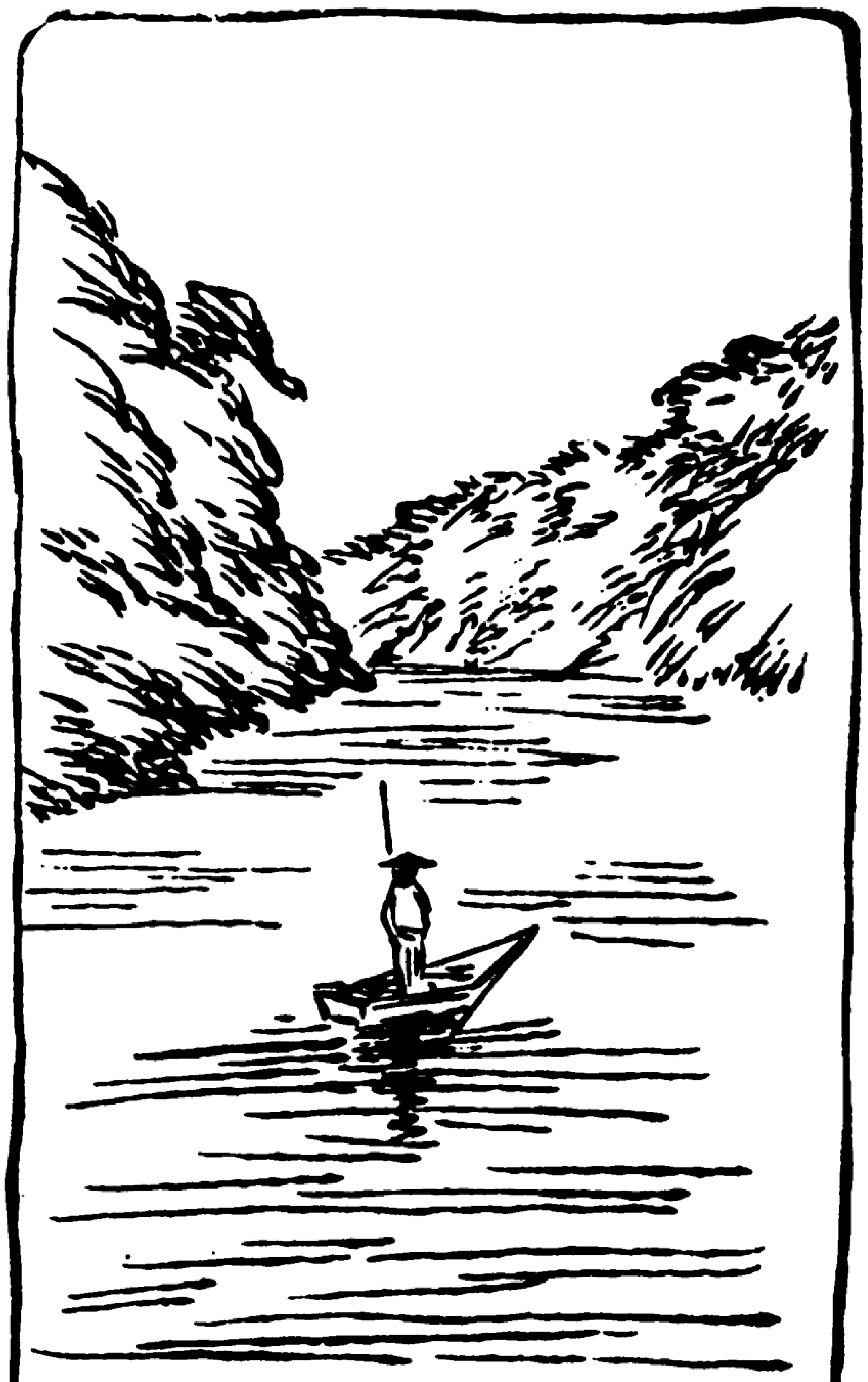
帆柱や青葉の中の冬木立　馬季

夏の主婦

土肥月巴

▲臺所の衛生　勿論一概に論ずる事は出來ないが兎角下女なんと申す者は、生得萬事に疎末勝の者で、殊に衛生の、清潔のと云ふ事に、餘り注意を拂はぬのが多數である。故に一家の主婦たる者は、最も斯樣の點に就て、周到の監督と、親切の指導を與へねばならぬ。決して放任主義を取つて、爲すが儘に打ち任し置くが宜しからぬ。扨て其の第一に取締るべきは、飲料は勿論、總て食事に用ゆる所の水である、此の水が完全の者でないと、凡て食物の味不味若しくは敗不敗に關係し、從つて人間衛生上にも、大なる影響を及ぼすことは、今更喋々する迄もない。取り分け夏期に於て申せば、眞水即ち生水は宜しからぬ。故に之を用ふるには、

必ず御飯を炊く前に、釜で一旦煮沸して、それを貯へ置く樣にする、是れ實に肝腎の工夫である。又た食物は消化し易く、滋養に富めるを撰むべきは、今更申す迄もないが、左ればとて、強ち價値の高貴なる物のみ、滋養分に富むと云ふ譯にあらず。元と素と人間の身體なる者は、種々樣々の分子から成り立つて居る故に、獨り獸肉、鳥肉、魚肉など、中流以下の社會に於て、ノベツに需め得られぬ物だけが、滋養になると云ふ事が無い。假令大根、葱、豆腐の類でも、善く調理して適度に用ゆれば、價を拂ふことと割合に少く、却つて滋養を取ることが多い。此邊の見計ひ、匙加減は、即ち主婦の手腕に依つて、解決を要すべき所である。



▲衣服の注意

衣服の人體健康に對して、多大なる關係あるとは、是れ亦た今更申す迄もない。併し往々世間には、案外之に注意淺き方も見へる、依つて少しく述べて置きたい。衣服に就て第一に必要なのは、上衣より寧ろ下衣……即ち直接皮膚に觸れる者に、最も重く心を注ぎ、成

らうことなら三日に一度、若しくは久しきも七日に一度は、必ず之を洗濯して、垢つき汗くさくなからしめん事である。殊に最も注意すべきは、病ある身の人の爲めには、一層此點に力めねばならぬ。寢具に就て注意すべきは、入梅か冬時の天氣さわり無き以上、必ず三日に一度づゝ位、烈日の光に曝しかけて、自然の濕氣を打ち拂ふ事である。

▲常用の食物　偖て前章にも申述べたる如く、食物は身體を榮養して、活氣を補ふ者なるが故に、必ず新鮮の品物を撰み、精良の調理法を加へて、之を用ゆるに力めねばならぬ、苟も此の注意を怠れば、假令滋養分に富めりと云ふなる、牛、羊、豚、鷄、魚肉等のものと雖ども、所含の滋養分は分解して、反て有害物となる。而して滋養多き肉食と雖も、偏すれば啻に厭惡の情を來すのみならず、却て滋養に適せざるが故に、宜しく植物性の料理を、調和伍用すべきことは、固より前章陳述の通り。

▲肉の撰擇法　總て肉類は、屠殺後時を經過せずして、肉温未だ去らざる者は、人身に有害なるが故に、少くも屠殺後二十四時を經て、而して後に用ゆるを可とする。扨て又た新鮮善良の肉は、其の色常に眞紅を呈し、指もて之に觸るゝ時は、堅實にして且つ一種の臭氣ある。若し軟にして不快の臭あるは、已に腐敗に陷ゐりし徵である。此の腐敗的臭氣を發覺するには、肉片を細に切斷し、白湯にて一寸之を洗ふか、若しくは庖丁を肉中に刺し入れ、引き拔いて之を嗅ぐときは、直ちに有無が判明する。

▲魚肉調理法　新鮮なる魚肉は、ナマの儘か、煮るか、炙りて食ふべきである。醃藏の魚肉は、暫時清水に浸し漬け、其の鹽分を減消して用ひぬと

其の弊食後に渇を來し、爲めに多量の湯水を服し、種々の疾病を誘發するの恐れあり。

▲鷄卵鑑別法　鷄卵の腐敗するとせざるとは、卵白の透明不透明に依つて、大抵判別することが出來る。左れど若し疑似決し難き時は、大器に食鹽水を盛り、鷄卵を之に投ずれば、新鮮なれば沈沒し、腐敗せるのは浮き上るを以て、直に鑑別する事が出來る。

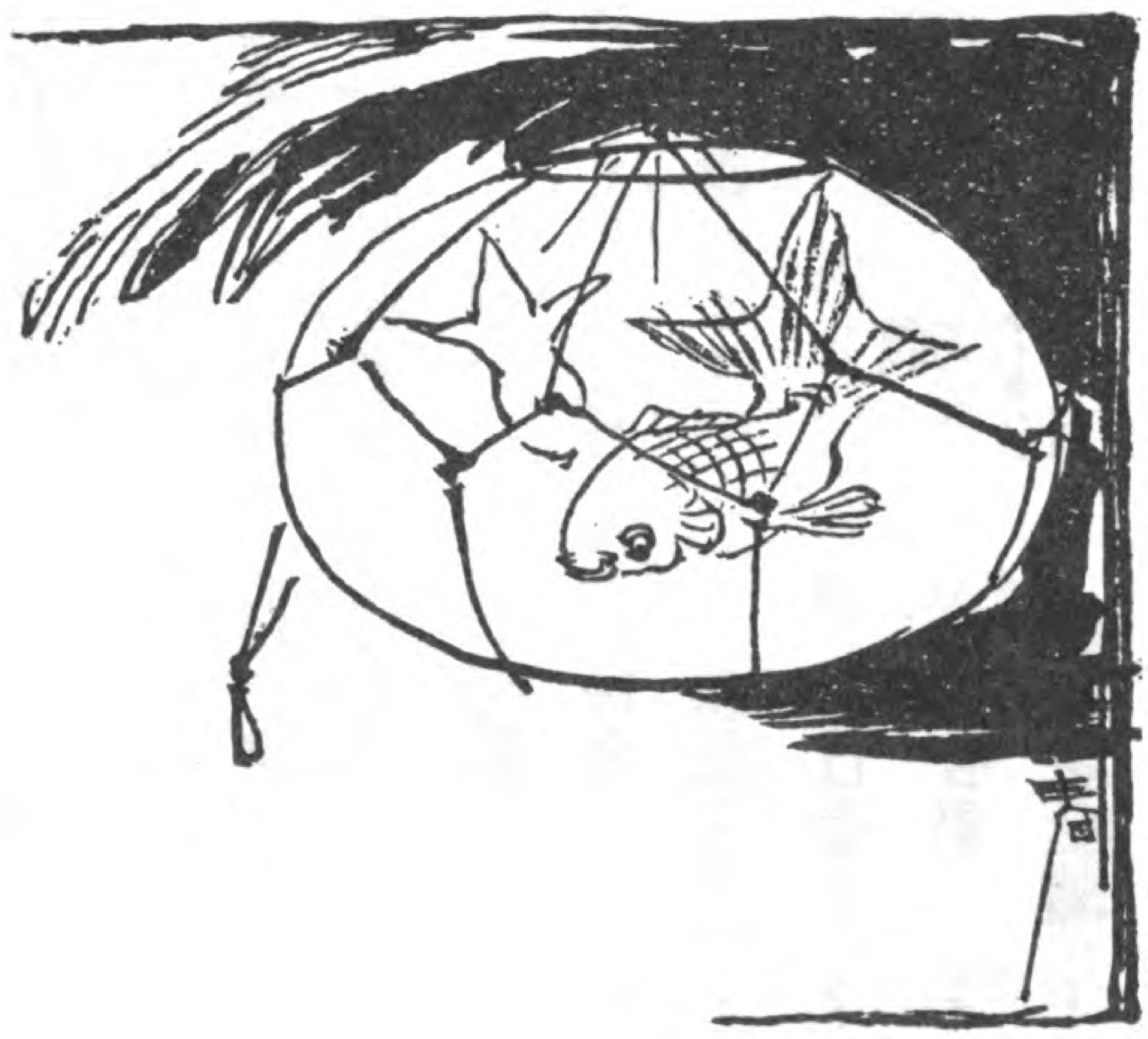
金魚の話

菅原倭翁

金魚は人皇百三代柏原天皇の御宇文龜二年正月二十日に初て泉州堺の津へ渡來したものでありまして、その頃は珍魚と申したそうであります、その來歷に付て德川時代には本家本元があつて由來書を秘して世に示さなかつたのでありましたが、幕末の騷ぎに紛失して遂に分らなくなつたと申すとであります、今日では追々其種類も殖へまして琉金、和金、金鱗、丸子などその重なるものであります。

目下東京には四十八軒計りの金魚養殖家がありまして昨卅五年の飼養高を聞くに、

金鱗	一〇七、三〇〇
琉金	二一四三、六〇〇
和金	五〇九九、九〇〇
出目金	八一、二〇〇
合計	七四三二、〇〇〇
此代金金鱗	二一四四、〇〇〇
琉金	一六五八四、八二、五
和金	一五〇八一、〇〇、〇
出目金	七九二二、五〇、〇



合計……………………三四六〇四、三二、五

と、云ふとでありまして、今年の相場は百尾につき並屑三十三錢、下屑三十錢、小琉五十五錢、同下五十錢位じやそうでありまず。近年は北海道の需用が増したそうで、年々八十萬尾以上の和金、琉金などを捌き居ると云ふとでありまず。又海外輸出も好望を來しまして、其額は、深川千田町の金魚商一手でも昨冬以來の商ひが壹千圓以上に達したと申すことでありまず、その輸出先は清國及び米國が重で琉金、和金の二歳以上の大形ものが向くのじやそうでありまして寒冷なる季節に輸送するのでありまず。

東京には愛魚家が申合せて觀魚會と云ふものを拵へて各自飼養せる逸物を持寄つて互に品評する、毎年秋季に一回審査大會を開きまして府下金魚の番附を造りまず、その外六、七、八月の三ケ月間に毎月一回づゝ研究會を開きて當歳金魚の餌養の良否などの鑑識方法を講究することゝなつて居ります。

一體金魚は木の葉形と申して腰の極く落ちたもの

を上等と致してありますが、今觀魚會の審査法を一通り紹介いたしませう。

魚體の發育不同ならずして全部均しく良好に成長し、姿勢優美にして天性を失はず、游泳に便なるものを良魚の標準といたしてその審査部を、頭、背、尾筒、尾、腹、鰭、姿勢の七ケ所として之によつて其優劣を定むるのであります。

その色模樣の名稱は、赤の部金色、丹色、猩々は此部であります、白の部銀色、更紗の部更紗、多赤更紗、多白更紗、腰白、背赤などの別があります、黑の部銀色、虎の部斑黑あるもの、又頭模樣の部には面被り、白面、丹頂、白頂、兩奴、口紅など澤山あるそうです。

その背鰭のあるもの、背及び尾筒の曲り、瘤、凹凸、尾心の曲りつまみ、尾の剛張り、つぼみ、行張り、不揃、ちゞれ、二つ尾、揖鰭の外出、片孕み、頂下げ、又頂上げ等は疵ものとして、審査せぬことゝなつて居ります。

金魚の交尾期は桃や櫻の花盛り頃で、八十八夜過ぎまでには二番子、三番子を產落すものであります、愛魚家はこの季節に產落した新子を丹精して養ひ、九月の半頃に至ると、追々黑色が剝げ去つて、性質の色合及び體軀恰好の定るものですから、四月より五月へかけては、愛魚家の一生懸命の時と謂てよろしい、かくて養魚家の最も難事とするのは魚の雌雄を見分くることであります、每年產落した新子が九月漸く色格好の備るときになると、先づ一番に魚の前鰭に小さき星の有無に注意するので、此時追星と謂つて雄の前鰭の片端に必ず出來るものですから、それさへ認むれば大丈夫間違へることはありません、雄は自然に堅

固で體が締り、比較的幅が廣いから大體は體格で判斷する人もあります、最も成長した上ならば水搔を見分くれば直ぐ知れます、即ち雄は鰭の骨が太くして、雌は細いです。

金魚の餌は毎朝十時頃に遣て丁度午後四時頃に食ひ終つてから水を換へるのです、雨が降ると運動致しませぬから餌の遣方を控へ目にするがよろしい、折々鰹節をけづりて粉を少し遣れば色が鮮かになると申すことです、又水は掘井戸の水であると一旦沸かしてからでなければいけませぬ、水道の水ならばその儘で差支へなし。

金魚の壽命は舊幕頃には五才に達するものは稀でしたが、愛魚家の嗜好が體格の具備せるものを賞美する傾向を來してからヅッと長壽を保つやうになつて、今日では六七才より十二三才迄の壽命を保つやうになりました。

さて素人が冬季金魚を持越とするには少々面倒を見ねばなりませぬが、毎年新らしい緣日物を飼ふ考とならば、故に手數をかけることもいらず、如何なる家庭にても一樣に賞觀を縱にすることの出來る調法な動物であります。

春夏の遊樂

はやし生

予が田舍に居るときは、讀書の暇あると、實に無邪氣なる遊樂をして居ります。其一端を語つてみましやうか。

『おサカ、今採集に行くが、一所に行く氣はないか。何うする。善やお前も一所にお出で』と予は例によッて採集胴卵を肩にかけ、花鋏をとりつつ言ッた。小供等は大喜び『行く』『いッぺえ』と直

に勇み起ッた、恰度獵犬が獵に出掛けるとき、躍り跳ねて獵師の前に進むが如くである。予も一人で行くよりは張り合ひがよい、で畑の間、山の麓を經、田の傍より野原へと進んだ

『おサカやあれは何ッ。ソー黒松、ソー〳〵こッちのは赤松、ウム榎』

『善やあれ知ッてるか、榧、ウム樫、それから欅、ソー〳〵能く知ッてる』

『おれは知るまい、あれは樅、そッちは扁柏』など且つ聞き且つ敎え行く程にサ



カは、
『兄ちやん、アラ〳〵いゝチヾバヾがあること、どッさり』とかけよる、
『成程よいのが澤山ある、待て〳〵これで採るから』
これはなア、能く書に書いてある蘭の類でチヾバヾでもわかるが、ほんとうの名は春蘭といふのだ。次に善が『こッちえ、スモトリバナがしッかりあらア』
『採ッて相撲をとらせるさア。それは菫菜といふのだ、花の白いのがあッちえある』
サカ『兄ちやん、餅え入れて喰ふ草がこんなに』
『此草を何といふ?』
善『クサノハナ』
『ウム此邊ではクサノハナといふが、これは艾といふのだ』

サカ『この黄色な花は何といふ名?』
『それは六ケ敷い名だキジムシロ、雉の座はる蓆と覺えてればよい』
善『これは矢張りワラビ?』
『違ふ、葉があらい、それはアキノカラマツ』
『それはオニタビラコ』覺えもしられないのに、右から左から聞いて、面倒であるから、質問は暫く止めさせ、野原を横ッてから或る河岸に到ッた
『それ、そこに金平糖の形をしてる實があるだらう、黄色な花もついてら、能く覺えてお出で、それはキッチノボタン!!』
『キツネノボタン〳〵、此金平糖は喰はれるのかしらん』
『いや〳〵これには毒があるから喰ッてはならん何んでも性の知れないものは喰ッてはいかん』
『それはツルニガナ、そッちはマツヨヒグサ、そ

れはタビラコ』と採集した草の名を教えてると、サカは田の面を指して、

『オーあるが〳〵芹が一パイある、こんだあッちやんと一所に採りに來るだ、アラ〳〵あッちへも』

『もー大概採ッたから歸らう。今度はこッちの方から還えると、予が先導になり、ピタ〳〵還へり路、とある麓に來ると、今やイチゴの實盛り、大きな玉が、皆黄金色をして、而かも山吹の花の如く、驚く程澤山下ッてる。

『サカや、善や、あれ見ろうイチゴの實が』

『オヤ〳〵、オー〳〵』と二人が躍りかゝッた、予も思はず走り出した、其實がまた甘いが〳〵、殊に果物好きの予には、何程甘いものだか、

『あはてるな〳〵、棘があるから用心して!!』これか、これは葉が椛の様であるからモミヂイチゴといふのだ、實に甘いなア、飽きたと、意氣地がないなー、もッと食べ食べ、そーかそんならお母アさんと、あッちやんのに、土產に持ッていから、直き潰ぶれるから、ソッと包め!!』と、これから採集の時いつも謠ふ歌を、三人が聲を揃えて、勇んで家に還りました。

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎

夏の初めの或日でした、山に散歩したら、木半夏の能く熟したのに出會した、枹位ある實が、眞紅に下ッてる、食べるのもよいが、唯眺めてるのにも誠に奇麗でよい、予は體が大きいから樹に上られないが、手を伸ばしていくらももがれる、善は未だ小さい、が男の子だけあッて、ズン〳〵細い梢まで上り、得意顏に食べてる、獨りサカのみは、自分で取ることが出來ない、恰度昔話の蟹の様に、予や善が折りて與る枝を貰らうばかりで

あッたから『男に生れば、よかッたッけ』と、さも滿足らんといふ顔付をしてつぶやいた。

✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿

或る時でした、水中に棲んでる龍蝨、ヤゴ、タイコウチ、ミヅカマキリ、負子蟲、豉豆など捕え、瓶の中へ入れ、飼ッて置かうと思ひ、例の三人で遊漁に出掛けた。善は殊に大勇み、はやくも水田に入り逐ひ廻はした、サカがまた女の子のくせに、水の中に入らんことを頻りに請求する『お前は女だから、そこへ待ッてお出で』『ねー入いるよ、女だッて搆ひはしない。ねーねー、よーよー』『だ入いるなら、成るたけ着物を汚さん樣にする』といッたら、裾を端折つて、ガブ〳〵入り込んだ。予は玉網を以てスグリ〳〵て、餘程遠くへ離れた、や丶暫くたつと、サカが牝鷄の尾に火が付いた樣に、アァワァ〳〵と、ひやうきんに叫び出した、『何うしたと』聞いたら、蛭が足についたといふこと『エー馬鹿な、それが何んだい、蛭なんぞに恐れるものがあるか、とッて投げてしまへ』といッても、とるのが怖くて、ワァ〳〵と矢鱈に足をふるばかす、『厄介な奴だな』と予がとッて投捨てしまッた、此子は全體蛇と蛭が大嫌いであるから、早々足を洗らい、陸に上ッて、もう二度と水中に入いる氣がない。それから二三回スグリ試みてから切り上げて、そう〳〵還りかけた。

『此金平糖見た樣な實のある草は、何といふか覺えて居るか』

『狐のコンペイタウ』

『いや〳〵』

『狐のボタモチ』

『いや〳〵ボタモチではない、キツネノボタンといふのだ!!、あッちにあるのは、實から花から莖から葉から、キツネノボタンにそッくりだが、能

く観ると、葉はキッチノボタンより、黒がゝッて光澤がある、また葉の裂け方が違ッてる。あれはタガラシといふのだ』など、語り語られ、例の『四百餘州を擧ざる』の歌を謡ひつゝ、家に着いたこともありました。

（終）

蓮花

清水橘村

八月上旬より立秋の日なり。芙蓉咲き、法師蟬鳴き、女郎花咲き、柿の實はのかに黄ばみ、秋思天地に入る。

蓮又、拍々として紅白華開き、清香衣袂に滿つ、夏晨、池邊の逍遙何ぞそれ爽快なるや、又何ぞ明快なるや。花無心にして我が心靈を動かすものあり、胸襟忽ちにして洒脱、心地忽ちにして寛裕自ら忘機の化境に入るものゝ如く、玲瓏乎として形骸なし。此の時此の間、異香薫ずるは彌陀の來迎にして、葉ずれの音は一念稱名の聲、唯心池の水の鏡、朝の風は如渡得船のそれかとも思はれて、眼を上れば、頭上高く、圓月の大慈眼を垂れ給ふが如きを見る。柳帶受レ風元不レ結、荷盤承レ露覺無レ粘。池水翠蓋の白玉露、宛轉水晶の念珠、實に蓮花は佛意を含む。

去ればにや、往古より此の花は、佛閣の裝飾或は佛陀の手向草等に用ゐられ、關係彼と淺からざれば、今人猶此花を觀るに佛性の眼を以てせり。

蓮は池沼等の泥土中に其の根を置き、水上に出て花開くものなれば、「濁」に染まぬ心を女子の或者に擬へ、或は其姿の高潔なるにくらべたり。東滿翁の『花と云へばあたにのみや見はつべき池のにごりもそまぬ蓮は。』といへる歌は此の意味なり古人がうたへる蓮の歌を味へば、其の花の美より、

葉蓋に乘れる白露の風情を歌へるもの多きを發見すべし。左に其の例證を掲げん。

夕されば浪こす池の蓮葉に
玉ゆりかくる風のすゞしき　（三條入道）

池きよき蓮のつゆにやどりきて
月もすゝしき影そふるらん　（成　章）

おろかにも露のいのちを惜むかな
はちすの上にゐるを見ながら　（契　賢）

といへる如く、花を詠じたるものは其の半にも滿たざるなり。

眼を轉じて之れを科學の上より見る時は、此の一本の草花にも自然の慈愛がゆき行はれ居るを識る先づ葉には蠟質のものを被りて、雨露の水濕を防ぎ（葉上の水の玉となるは之れが爲めなり）、葉柄には其れと共に多くの刺を持せしめて、能く外敵を防ぎ。而して莖及び葉柄、花柄等には數條の溝を通じ、水溶液の通路として養分の輸送を行ふ。人の蓮根と稱して食用に供する部分は、乃ち地中莖にして、莖には節を供へ、節より根、葉及び花を出す、又蓮根を破壞すれば微細の絲を引くは、之れ水汁導管の膜壁が破れしものなり。花は、重瓣にして紅白の二色あり、淸香窒に掬すべく、花色又賞すべし。全體蓮の花は瓣蕚の區別明かならず、花托は上方に隆起して倒圓錐狀をなし、その内に數多の雌蕊を納め、その形宛ら蜂の巣に似たり、故に蓮をハチスといひ、ハスは其の轉訛なり。

蓮に就て特に注意すべき所は、其の果實の成熟したる時なり、世人多くは、此の果實の陷入せる胎座の如きものを、果實の外皮と誤解す、然るにこは外皮或は莢の如きものに非ずして、前に述べたる所の花托とす、蓮の果は即ち花托の中に沒入し、

苺の果は紅色の美くしき花托に附着し、無花果の果は厚くして青紫色の花托の内部に羅列せらる。宜なる哉、自然の内部に立入て、造物主が周到なる其の手の構造に、一顧の價も拂はざる、謂ば常識なき世人が、或は之れを果皮と見、或は是れを莢と誤り、或は全く知る所なき、其の故無きに非ずと云ふべし。

譬へばイチゴ、イチヽクが、其の種子に或る作用力を有せざる時は、これを蕃殖せしむるに大なる不便を感ずるが故に、天は各々蕃殖の作用を與ふること、蒲公英に於ける冠毛の如く、楓に於ける翅の如く、又柿、林檎等の色と美と、香と味との如くし、先動物を誘はしめ、其の動物の餌食となり、據て以て種子を地方に散布せしめんが爲め、苺、無花果には美と香とを與へて、其が蕃殖の作用を營ましむるが如く、蓮にも亦その力を與へて能く蕃殖の目的を達せしめんとせしは、即ち其の果を包める花托なり、蓮の花托は何故に果實の蕃殖力となるや、曰く種子の軟弱なるに依れり。

吾人多くは説かず、乞ふ植物の果實と種子に就て研究せよ。花托に就き、尙ほ儲め置かざる可らざる一事あり。即ち梨、林檎等の吾人が「味」と稱して食用する部分は、これ眞の果實に非ずして、實に花托の肥大せしもの、眞の果實は通常「心」と稱して食用せざる部分なることこれなり。

東京府下には上野公園の小西湖、芝公園の某池、井頭の池頭等皆蓮花を植ゆ、而して蓮池の中島には辨財天を祀れり、辨天は梵語のサラスヴアテキーにして、河の神なり。曉晨池邊に立ち、蓮の清香を心とし、サラスヴアテキーの幽姿を、その姿とするは誰が子ぞ。

（了）

雜錄

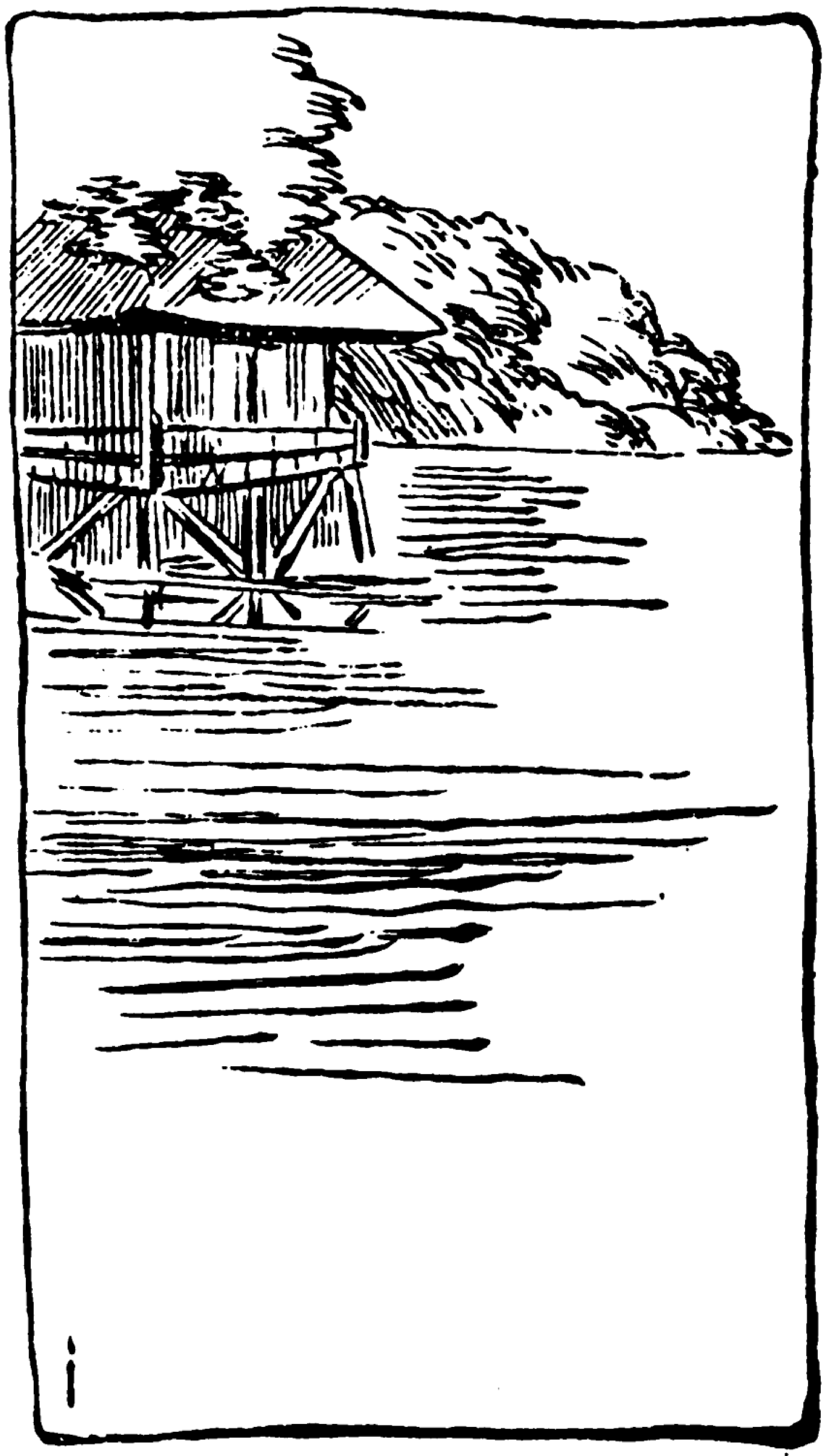
風教談片

石黒男爵談話

頃日汽車で、數名の女學生と偶然同車した。何心なく其の人々の談話を聞いて居ると言語いかにも麁野に失し、方今の所謂海老茶式部なるものはかうかと一驚を喫した。ソーデスカ、オヤマー、ワタイイヤヨ、キザヨといふやうな耳障りする語句が、臆面もなく繰返へされつゝ、其人々は平氣で居る。立派な教育を受けつゝある女子として、もそつと言語に注意がなくてはなるまいかと思つた。女學生とか、女教員とかいへば、社交上先づ中等已上の位置を占め、時としては人の模範ともなり、未來の賢母良妻と、自らも信じ、人も許して居る者なるに、品性はいかに高いか分らぬが、其の言語かく陋劣なるに於ては、行末いかにも賴母しからぬ次第である。且夫れは生徒間のみの事ならで、先生たる教師のお方も矢張り同斷、耳で判斷を下せば、此連中の話振りは、女工とか、酌婦とか、下婢とかいふ下層婦人と擇ぶ所なきやに聞えたには一層困つた。考へて見るに、事の此に至りたるは、都下女學生の一半は田舍者であつて、上流良家の人と接すること稀れに、交際ふ對手は、同じ田舍者とか、否らざれば下宿屋の主婦とか、無教育の僕婢とかいふ類なると、若くは妓女蕩兒に關する戀愛小說などを讀んで、東京の風俗皆然りと

心得、其の言語を擬ねる結果であるらしい。そで女學校の教師諸君に對し予が望むところは、學課教授以外に、かゝる實際問題について、ま少し矯風正俗の道を講せられたいとである。教育とは黒板に對してばかりではあるまい。學校教育と社會改良とが、矛盾する所あつては、學校教育の目的は達せられまいと思ふ。どうぞ學校で習ひ學んだ事が、造次顛沛にも實地に役に立つやうにしたい。

てにをはの講釋をばよくするが、通常の手紙は滿足に書けぬ。數學では高點を取つたが、月々の小遣帳には違算が多い。女禮式は卒業したが、其の娘の持出す煙草盆には塵埃が着いて居て、灰吹竹には吹殼が一ぱいだといふやうな事は、間々耳にする所である。方今の女學生達は、兎角卑近な事を忽せにして遠き高妙の學藝に



馳る弊はありはせぬかと思はれる。

嫂物語

田村松魚

或日自分が一人の友人を訪問すると、其家に矢張り古くからの友人が如何したことか食客になつてゐた。久し振だから互に別後の情を述べて、さて、どうして君は此家へ來て居るのか、今迄に令兄の家に居たのではないか、と斯う尋ねると、其時友人は悲しげな顏色をして幾度か嘆息しながら、お耻しいことだが、自分は兄に絶交せられたので、行く所が無いものだから、此家の御世話になつてゐる、どうも斯うして居ても致様が無いが、何か好い口でもなからうか、と繼ぎ切つての相談、自分はこれを聞くと、直ぐ其友人を疑つた、親味の兄弟に絶交をされて、其家を追ひ出されるやうな不心得な男を誰が同情を表して口などを探してやるものか、肉親の兄に見離されるといふのは、何處か、此の男の品性に嫌な缺點がある爲であらうと斯う思つたので、自分は居直つて眞面目になつた。

君は好い兄樣を持つて居るではない、第一兄樣に身の振附け方を賴めば好いのに、何をすき好んで食客などをしてゐるのだ、兄さんに見離されるやうな事をしては君の信用に關するではないか、他人は矢張り他人、朋友と云つても同情に限はある、兄貴に棄てられた、と聞くと、誰しも君の品性を疑ふやうなものだ、と切り込んだ、それは自分が平生から兄弟仲の好くない人を非常に擯斥して、餘程劣等な人間のやうに思つてゐることが、人一倍強かつたからで、何時となく鋭く責めつけると、友人は俯向いて默つて自分の言葉を傾聽してゐたそして自分の言葉が切れても、猶何か深く感じた

のか、顔の色が青褪めて、眼の色が濕んで、深い感慨にうたれたやうに、幾度か嘆息してゐるのである。

自分は、それこそ、と思つた、で、疊み掛けて斯う云つた。

どうだね、僕の云つたことに無理はなからう、僕は第一兄弟仲の能くない人は大嫌ひさ、不心得だもの、左ういふ人に肩を入れることは御免を蒙りたい、○○君などは寛大な人だから、君をそうして世話をしてくれるのだが、僕等のやうな偏狹な人間は、君を容れる程の腹がないのだ、と憎く／＼しい程に云つて退けたので、友人は一入悲しげな顔をして、垂れた首をもたげながら、じつと自分の顔を見つめてゐた。

君の云はれたことは一々御道理だ、併し、さう一概に罵倒されると、僕も甚だ心外に思ふ、事物にはそれ／＼情實といふものが纒綿して居て、種々の事がこんがらかつて、そして嫌な結果を作るものだ、といふことは僕が云はなくつても御承知だらうが、一體僕が兄貴に絕交された、兄弟の緣を絕たれた、……………といふのでもないが、兎に角兄貴の家に出入を許されないやうな、人の弟として耻かしい身の上になつた一事は、妙な事が原因を作つたので、自分は斯ういふ事から兄弟の仲が惡るくなるものであるか、と思ふと情けなくなつて了ふ、耻を云はねば理が分らぬが、他ならぬ君のことだから、マア、一つ内々で聞いて呉れたまへ、兄貴や、自分の耻をさらすやうなものだが、君が僕の品性を疑つてゐるやうだから、それを辯解もしたいのだ、と氣兼ねさうに小さな聲で、煙草も喫はず、温順しく坐つて話し出した。何も珍らしい話でも何でもない世間には能くありうちの

ことだ、それが自分の身に適切に降り掛つて來て、そして自分が、そのわりうちの事の波瀾の中に卷きこまれて、とう〳〵斯ういふ食客の身にまで成り下つたかと思ひ、且つは君の爲に品性をまでも疑はれて、友人の一片の同情をも買うことが出來ぬかと思ふと、今更ながら恐ろしいやうな氣がするのだ、マア聞いて呉れたまへ、僕が兄貴の家を出た、去つた、といふ一條は、斯ういふのだ、僕の兄貴は御承知の通り、法學士で〇〇銀行の支配人をしてゐるのだらう、マア、僕の兄貴としては一ト通りの成功をして、同輩の人からも多少重きを置れてゐるし、また世間からも紳士として見られて居る位、家はといふと場末でこそあれ、冠木門の玄關構、見渡らしの宜い二階造りで、下女の二人も使つて居るし、出入の車夫もあらうといふ、先づ中等以上の生活をして居るのだ。



兄貴は一寸と變物で、銀行の方へ出るやうになつてからも、兎角書生時代の氣風が取れない、何方かと云ふと、所謂才子肌でない方で、上役の御機嫌などを取つて、昇進の手づるにする

程な世才のある人ではなかつたが、事務には勤勉だし、肩書もあるし、大酒家といふではなし、敏腕でない丈け、それ丈け忠實であつたものだから、自然マア其位置丈は固く守つて行くことが出來たらしい、併しそれで、づん〳〵羽振を能くして、自分の働を人に見せて、目に立つやうな昇進をするといふやうな派手なやり口は些ともなかつたのだが、不思議なもので、それが唯つた二三年の中にめき〳〵伎倆を上げて來た、今迄は交際拙手な男であつたのが交際も上手になるし、上役の受の餘り好くはなかつた人が上役の受もよくなるし、とう〳〵支配人までやり上げたといふには、其所に何等かの動機がなくてはなるまい、君はどうして斯う僕の兄貴の性格が一變して來たのだと思ひますか。

他でもない、兄貴がさういふ風に變つて來たのは

[illegible]

妻を娶つてからのことで、云はゞ細君の感化を受けたのである、夫が妻に感化されたといふと、何か語弊があるやうだが、實際兄貴は妻に感化されたので、妻帯以來日に月に兄貴の人物が變つて來た、一體なら夫が妻を敎育もし、感化をもさせやうといふのが世の常であるのに、これは其れと反對の傾向を來たしたといふのは、その兄貴の妻なる人、自分から云へば嫂であるが、此女の性格に餘程の特長があつたからであります。嫂といふ人は、自分なんぞはとても婦人の容色を見る眼は以て居ないけれど、それでも十人並勝れた美人であるといふことは憚らず斷言が出來る、小柄の細面の、目鼻立の愛嬌があるといふよりは寧ろ利發氣な、そして癇癪持らしい、それで極くの機嫌かいであるが、萬事才氣があるので、人の顏色を見て物をいふといふやうな人で、口數も多い方だし、

女一通りの藝も出來るし、マア、一家の妻女として、僕の兄貴の細君としては過ぎる位の賢婦人であつたのだ、で、兄貴は何處までも氣に入つて居るし、僕なども能く可愛がつて世話をしてくれるから、姉樣〳〵と敬ひ尊んでゐた、すると、一月二月も經つと嫂はいよ〳〵其才氣を實地に發揮させて來て、根が口上手ではある、教育もある、何處へ出ても妻女としての引けは取るまいといふ程の嫂だから、上役の家への御機嫌伺ひはいふに及ばず、同僚の處への時候見舞、下役への心づけ、總て兄貴が銀行員として今迄手落になつてゐた交際……、といつて表てだつた表面の交際ではなく裏面の交際だ、妻君と妻君との交際の間に、上役などは其所を旨く奥樣に取り込んで行く、下役ならば情をかけて夫の評判を取るといつたやうに散々妻君的手腕を揮つて、當抵武骨な兄貴などが思ひもつかぬ所に、女の一得といふ愛嬌を盾にして、それを持前の辯舌と才氣で、旨く切り込んで行くものだから、サア、兄貴の評判は急に能くなつて、銀行の受が今迄とはすつかり變つてしまつた、それに嫂が萬事斯ういふ行き方だから、兄貴は次第にそれに感化される、今迄は餘り容子などもかまはなかつたものが、口髯の曲り加減にまで氣をつけるといふ風だから、下駄や帶で耻をかくやうな間拔な事はなし、宴會の席でも、今迄は苦り切つて杯と白眼めつくらをしてゐたものが、下手ながら洒落の一つも云はうといふやうな鹽梅で自然に人間の角が取れて、丸い男となつたのが、當世向きの銀行員には誂へ向き、上役の御氣に入り、同僚の評判がよく、づん〳〵昇進をする、といふのも全くこれ妻の御蔭で、女房の盡力だと、元來が惚れきつて居る所へ、おれが妻は素ら物だ、

男勝りだ、敏腕家だ、と斯う思つたから、感心の上に敬服をすると、其所が男で、もう兄貴はすつかり妻を信用してしまつたのです。（つゞく）

亞米利加だより

澁谷馬頭

第一信（シャトル港）

◎十七日午前無事にシャトル港に着、上陸してグレート、ノーザン、ホテルに投宿、暫く當地に滯在して事情を視察する考へです。

◎當地の事情を通信するに先つて、まづ當地の地理上の位置と、歷史上の位置とを申上げて置く必要があります、當地は北米合衆國の西北部で英領カナダに近づいて居る、日本との交通には最も近くて便利な港であります。

◎以前、日米間の交通はサンフランシスコを必ず通じた者でありました、今日では合衆國の中部以南に用のある人ならばいざ知らず、其他の地方及び東部のシカゴ、ヒラデルヒヤ、ニウヨルク等に往復しやうと思ふ人は、此のシャトルへ向けて來た方が、日數も少くて便利も多いのです。市街の交通機關なども横濱などの及ぶ所でありません。

◎そこで此シャトル港は後來桑港を凌ぐ所の繁華な市街となるのでありませうと、先見のある人は今からソロ〳〵事業を興す計畫をして居ます併し當地の開けたのはやう〳〵近年の事で、十數年以前には誠に寂しい所であつたさうです。

◎新に開けた地の例として、敎育、殊に女子敎育などの設備は一つも見るべき者がありません。そんなら我輩こゝに滯在して、何の通信を諸孃の前に呈しませうか、我輩はまづ暫くの間、或る善良なる家庭（白人の）に入れて貰つて其家庭の、狀況

を見、更に善良ならぬ家庭にも入れてもらつて、其やうすをさぐり、善悪ともに取調べて見たいと思ふのです。多少皆さんのおためになる事だらうと思ひますから。

◎それのみならず新開の地には諸種の人々が入り込んで居ます。たゞ街上の目に入つた事柄ばかりでも、諸孃へは珍奇なおみやげになるだらうと思はれます。

◎晝間、最も人通りの多い場所に行つて見るに、通る人も通る人も黒い服着た屈強の男子ばかりで此地には女子や子供がないのかと疑はれる。殊に不思議に感ずるのは、其繁華な辻々に、十八、二十人、三十人位づゝ、散歩するのでもない、見物するのでもない、談話するのでもない、ボンヤリと大の男どもが立つて居るのです。これは皆勞働者で、勞働者は音樂なり、舞踏なり、其他の遊戯の趣味を解しませんから、暇なときには、たゞボンヤリして居るのです、勞働者と云つても、馬鹿には出來ません、一日の賃銀米金三圓もとるのが隨分あります、日本金に換算して一ヶ月百八十圓とるのです。そして一食十錢で隨分よい食料が食はれるから、生活には困難しない。所で、無敎育の悲しさには一月働けば二月も三月も遊んで食つたり、バクチして費つたりする。ダカラ市街の中に日中ブラツイて居る大男が澤山あるのです。

◎其勞働者の中で白人はもとより多數であるが、其次にはジヤプ(日本人)其次にはクロンボ、インデヤン等です。

◎黒奴は我輩始めて見るので、甚だ珍らしく感じました。東京で我輩の住居の隣にチパール人が住んで居た。人はこれを印度人だと云ひ、クロンボだと云つた。が、クロンボはチパール人とはまる

で違ふ、其黒さ加減はとても比較にならぬ。クロンボの顏は顏のつくりから違ふが、其色と云ふとまア鍋炭を塗つたか、漆をぬつたかのやうで、目ばかりヒカラカして居る。

◎黒奴は大方勞働者であるが、中にはフロックコートに山高帽と威張つてゐる者もある。或時二頭馬車威勢よく走らして來たのを見たら、中にはクロンボの十五六の令孃が、漆のやうな顏して只一人乘つて居た、聞けば黒奴には大分金滿家があるさうです。又辯護士だの、巡査だの云ふ役について居るのもあるさうです。

◎夜のシャートル市街また一入の珍談いづれ次回の通信に（六月二十五日、北米ワシントン州シャトル市にて）

◎第二信

（シヤトル、ハイスクール卒業式）

◎ハイスクールは高等學校と云ふ事です。けれども日本の高等學校よりは程度が低いので、丁度、日本の中學校や高等女學校の程度と見受けられる。

◎日本の中學校と高等女學校とは、校舍が接近して居るのでさへ、劍呑であるとして、わざ〳〵遠く離なして設置するが此地（米國一般に）のハイスクールは妙齡の男女を一緒にして置くけれども、醜聞とて別に聞かないやうだ。

◎此度の卒業は男生三十人女生七十人ばかり、男生のうちで、日本人一人ありました。上原悅次郎と云ふ方です。

◎卒業式は今日（廿五日）午後二時半から學校に於てゞはなく、來客を寄せるに都合のよい劇場グランド、オペラ、ハウスと云ふ所に擧行いたしました。私も臨席の榮を得ましたから其摸様を一寸御通信申上ます。

揷繪



◎午後二時頃から私は入場しましたが定刻頃には來客七八百人となりました。其うちに女の客が七分通りで、男客は實に僅かです。その男客も皆背廣服の出立で、日本の儀式のやうにフロックコートの人は一人もなしです。

◎來客は正面と兩側との土間と二階と三階とに各定められたる椅子に就きました。正面の舞臺のすぐ下に音樂隊の席があります。二時五十分頃になるとやう〱始まりました。舞臺の幕が、オーケストラの始まると共に巻きあげられましたら、舞臺の上には卒業生が來客の方へ向いて五段ばかり並んで居て職員は其兩側に二三人づゝ並んで居ました、舞臺の前の端には花束を一面に列べてありました。これは來客の持つて來た者で、式の最後に各其來客の名指して卒業生の人にやるものです。

◎第一に樂隊、第二にレヴヱラント某氏の祈禱、第三に卒業生カー孃の演說、第四に同パッカード氏の演說、第五に樂隊、第六に卒業生演說、第七に同、第八に樂隊、第九に卒業生演說、第十同、第十一樂隊、第十二職員の一人なるパッターソン氏の演說があつた、終て同氏自ら卒業生の名を呼びて一人づゝ卒業證書を授與するのであります。

◎卒業生は、起立して、前列の者から順番に、パッターソン氏の前を通る時に右手を出して、丸くリボンに縛つた證書を受取り、廻つて舊の位置に復するのでありますが、受取る時に一寸挨拶をする者もあり。何のあいさつもなく只受取つて行く者もあり、儀式張らずに簡畧な者と見えました。

◎卒業生の氏名をよみあげられる毎に來客は拍手をします。卒業生中に跛足が二人佝僂が一人あ

りました、此三人と日本人の卒業生との名を呼びあげられました時には、殊に多くの喝采がありましたやうです。

◎私の隣席に居ました三人姉妹の令孃は双眼鏡を出して卒業生の演說する顔つきを見詰て居まして時々拍手の代りに靴を鳴らしたり抔しました。

◎最後の音樂のすんだあとに卒業生は前面に飾つて置いた花束をもらつて（それを贈る人は入る時卒業生の名を指して事務員に渡したのです）名譽をかゞやかしてかへります。式のすんだのが四時半すぎでありました。

俳壇の女流（つゞき）

四溪隱士

（三）柏原の捨女

みつ女に次で俳壇に見はれたる巾幗作家を柏原の捨女と爲す、田氏の女にして、寛永十一年、丹波國氷上郡柏原村に生れぬ。

雪の朝二の字〳〵の下駄の跡

とは、捨女が六歲の時道破せる秀句なりと聞かば人誰れか其の天稟の異才を驚嘆せざらんや、年やや長ずるに及び、北村季吟に就て、和歌俳諧を併せ學び、後又た宮川松堅に從つて修學せりといふ季吟は、貞德門下の高材にして、博聞强記、殊に國學に秀で、後進その道を主とするもの、仰で以て泰斗と爲せり、源氏物語湖月抄、萬葉拾穗抄、枕草紙春曙抄、等の大著述あり、その他、大和物かたり、徒然草等にいたるまで、註解する所の書五十餘種に及び、學德臺聽に達し、江戸に召されて食祿五百石を賜はり、且つ再昌院法印の稱號をゆるされし程の大儒なることは、人の普く知る所なり、宮川松堅も亦た貞門の一名士、俳諧の妙手

にして和歌の才を兼ねし者、京大佛堂の南なる先師貞德翁の舊地に家居し、柿園庵又た道阿居士と稱し、俳壇の一方に雄視せりき、この二人に師事せし捨女が學識の、すぐれていみじかりしは言ふに及ばず、其の稀世の天才は、こゝに至て愈よ異常の光りを放ちぬ。

雜煮々々や千代の
　數かく花かつは
いさ摘む若菜
　もらすな籠の内

などの吟は、思ふに捨女が尙は浮世の春にうかれて、花を追ふ胡蝶の、ひたすら樂しかりし頃の作なるべく、句調自然に花やかにして、麗かなる春の山邊に怡々如として若菜つむ少女の面影の、は



の見ゆる心地せらる、蓋し、捨女が早く歌を季吟松堅等に受けたるは「まさしく少時家を出でゝ花洛に遊學せし事を推定するに足り、我子の天才をいとほしみて、専ら好む所に從はしめし父母の慈愛の、なみ〳〵ならず深かりし事も思ひやられ、從て其の家の、たとへ有り餘る程にはあらずとも、固より事缺かぬほどに富みて樂しかりし事も朧氣ならず想像し得らるゝなり、さればこそ捨女もひたすら風雅の道に意を委ねて、月の夕に雲なきを賞で、花の晨に風吹くを悼みて、或は

花よりも氣にわたりぬる嵐かな

と咏じ、或はまた、

　月やそらに居よげに見ゆる簾越

と嘔ひなどして、清くやさしく穩かなる境遇の樂みに耽りしならむ歟。

この幸多き處女詩人は、かゝるめでたき境遇の間に、妙齡二十の春を迎え、良縁ありて宗族某の妻となり、琴瑟和合の歡樂極りなく、やがて一人の子寶をさへ授かりぬ、

　蝶々は花にはなれぬ間かな

とは、いつの頃の作にやありけむ、兎にも角にも嬉しき事のみうちつゞきて、春風嬝々、一家夫婦の間に盈ち滿てりと見しは、あはれまぼろしの浮世の夢なりけり、

　花は世のためしに咲くや一と盛

　落花せん耳もおどろく風の音

嘆ずべし、古より佳人多く薄命なり、捨女が良人は、一夜無情の嵐に誘はれて、散り行く花の哀れを示し、安く眠れる蝶々の夢を驚かしぬ。

捨女は深く悲しむの餘り、轉た人生の如露亦如電なるを悟りて、塵外に慰安を求めむとし、烏羽玉の黑髪をおろし、花の如き姿を墨染の衣につゝみて佛門に入り法名を妙融と稱し、初め淨土律を學びしが、後盤珪和尚に參禪しぬ、

　秋風の吹き來るからに糸柳
　　こゝろ細くも散る夕かな

とは、遁世の折の述懷なりき。

　尼になりて太秦に住みける頃

　花をやるさくらや夢の浮世もの

其の調のあはれにものかなしきは、前の句のやさしく花やかなると比べて、そゞろに惆悵の情を禁せざらしむ。

盤珪和尚は、播州龍門寺及び江戸天祥寺の開山にして、其の死するや、天皇詔りして禪師號を賜ひし程の高僧なり、捨女の妙融尼が、この人に參禪したるは、さすがに良くも師を撰みたり、世に在ては天下の鴻儒に學び、世を遁れては一代の名僧に從ふ、洵にいみじき良因緣果報といふべし、かくて精進怠りなく、勤行嚴そかに一意禪味をたづぬる折々の慰みには、かねて好める俳味に耽りて、清涼閑寂の生涯を送り、晩年には、師僧に從つて播州に徙り、網干の里龍門寺の傍に草庵を結び、不徹庵と號してこれに住せり、

蜩や捨てゝ置いても暮るゝ日を

來る秋の散りきは見する一葉哉

夜明には露まで月のわかれかな

等の句、みな多少の禪味を含めり、その悟道のさまもさこそと思ひやらる、

憂き中に馴れて雪間の嫁菜かな

の句及び

思ふ事なき顔しても秋のくれ

の句に至ては、眞情流露、その人、その境、髣髴として眼界に浮び來たるものあり、彼の俳句を卑俗なりと爲し、女性の性格に適せずといふもの、これ等の秀句を諷誦せば、釋然氷解、踵を回へして俳壇に向ふに至らむかな。

この氣高き女性の、氣高き句品は、當時普く世に推稱され、ある貴人は、

萱原に惜しや捨て置く露の球

と詠じて、賞美の言を賜はりき、而も捨女は

粟の穗や身は數ならぬ女郎花

と吟じて、謙退自讓の德をあらはし、網干の里の草菴に行ひ澄しつゝ、元祿十一年八月十日、六十五歳を一期として、其のうつくしき生涯の終りを

告げぬ、法諡を嶺雲貞閑禪尼といへり、貞閑の二字殊に捨女が半生の心境をいひ盡せるもの。

捨女が六十年の長き生涯に於ていひ捨て、よみ連ねし歌俳の數は、集めて卷をなすに足りしならん憾むらくは世に之れを傳ふるもの尠し、諸書散見の句を抄錄して、僅かに以上の十數首を得たるのみ、概して之れを評するに、捨女の句は清婉を以て優る、古來みつ女と併稱すと雖も、人品、句品凡てみつ女の上に在り、これ捨女が才と學の優れたるに由るは勿論ながら、又た時代の進步をも稽へざる可らず、蓋し捨女の俳諧生涯は、寛永より元祿に至り、俳壇の氣運が著しく變化せる時に屬す、貞德沒後、古調派の氣焰漸く衰へ、西山宗因談林調を唱へて天下を風靡し、既にして松尾桃青蕉風を起すに及び、俳壇廓然として氣運を一新するに至る、元祿年間は即ち俳諧の黄金時代なりき、捨女が作の全く滑稽趣味を離れて、清婉閑寂の響あるは、即ち俳諧が貞門の古調を脱して、蕉風の新天地に入りたる感化の作用にあらざる莫きか、そは兎もあれ、捨女が聲名の稍く世に傳稱さるゝ頃よりして、女流の俳諧に指を染むるもの、遽かに其の數を加へ、梢風、智月、田上尼、羽紅、園女などの才媛輩出し來り、女流俳壇の春色闌にして、花紅葉いろ／＼に咲き榮ふるに至れり、思ふに捨女の如き、才と學とを兼ねたるものが、俳壇に名を成すに至りし事は、女流と俳諧とを接近したるに就て、洵に良き機會を與へしならむ歟。

靑葉の影

文學士　濱田紅於

花の都を出發して、この仙臺に來た當時は淋しく

つて〳〵、果は涙さへさしぐむ程であつたが、住めば都とやら、今は全く村夫子となつてしまつて早や一年餘を送つた、そこで大抵此地方の事情も分つたから、たゞ見聞しただけのことを有りの儘にかいて見やうと思ひます。

もう一つお斷をしておきたいのは、地方の事情が大抵分つたと云ふものゝ、研究的に觀察したのでもなく、廣く材料を集めて推論したのでもないから、隨分僻説も多からうが、當るも八卦當らぬも八卦と思つて、御笑覽を願ひます。

さて仙臺へ到着した當時、兩三日は宿屋住ひをしてをつたが、下男や下女に時々所の模樣を問ふたことがある、或者の曰く、仙臺には美人が居りません、それは高尾の祟で御座いますと、容貌の事は別に書く必要もないが、これも經驗の一つだから少々云ひませう、その後市街を散歩する毎に目に觸る所は多く圓顏の顴骨の聳えた所謂アイヌ式の人相で、一見して東北人か他地方人かゞわかる位でありませう、それはまさか高尾の祟ではあるまいが、外に原因があるのでせう、いつかも云つたやうに、此地方は昔は蝦夷人の根據地であつてその後大和民族に逐ひ退けられたが、その血統は尙殘つて居て、此の如き人相を形作つたのです、併しこれは私の一家言ですから、當にはなりません。

それから下宿をして、東北人と交際するに及んで私の知り得た所は次の如くであります、大體に於て此地方の人は鷹揚で無頓着で、物事にこせつかない、これは美德でありますが、これに伴ふ弊害もあります、鷹揚で物にこせつかない性質は、一轉して保守となり退嬰となり、進取の氣象に乏しいやうに思はれます、その證據には、東北第一

の都會たる仙臺に、一ヶ所の製造場工場もなく、一本の烟突もなく、商人共が專ら學生を第一のお得意としてをるのであります、心機一轉しなければこの仙臺市は仙臺村となり下るでせう。

又無頓着は一轉して無作法となり無責任となります、無作法の一例は婦人の立小便の如き是であります、勿論敎育を受けた令



孃や夫人たちにはないけれども、田舎者になるとそれはひどいのがあります、公園の如き群衆の中で、しかも白晝公々然として、妙齢の少女が立小便をしてをるのを見るとあれでも人間かと思ひます、一方には無責任であるから怠惰者が多いのであります、勿論これも中等以下の小役人や會社の手代位の細君に多いの

で、良人は汗水垂らして働いてゐるのに、その細君は間食をする、午睡をする、家を空にして遊びに出る、不埒千萬、言語同斷であります、これは私が一年有半の間に於て親しく經驗したのであります、もつと委しく書けば他山の石ともなりませうが、他人の惡口を云ふのも、いかゞと思ひますから止めます。

以上は東北人の大體の氣質であります、勿論私は婦人のみに就いて特に取調べたのではないけれども、幾分か此氣質を有してをるでせう、この弊害を矯正するには、如何なる方法によるでせうか私は經世家でも敎育家でもないから、別に定まつた考もないのですが、試に愚見を云つて見ませう。

東北の田野はなか〳〵廣大なものです、又仙臺市中にも彼方此方に溜池のやうなものが澤山あつて、空地が非常に多いのです、これらの空地を利用して製造場を建てるなり、又天然の山野を利用して、物產を作るなりして、怠惰の夢を醒ますのが必要である、煤烟が渦卷く每に汽笛が鳴く每に人々は何事かを悟るでせう、小人閑居して不善をなすと申します、終日のたり〳〵としてゐるから間食や午睡をするやうになるのである、競爭は進步の母であると云ふことを、地方人の頭に浸み込まさなければならぬのであります、かの昏睡病を治するには、競爭心が第一の良藥であります、當局者もこゝに見るありて、農工商の實業學校を設け、工業及び商業學校を縣立にする企もあり、又高等工業學校を仙臺市に建てる運動も初まつて居る、兎に角に東北地方には、實業敎育を盛にして人々に實業を奬勵し、天然の生產力をつくさしめるのが第一義だと考へます。

婦女子の方面でもその通り、元來中等以下の細君は、無教育者が多いから、時間の貴ぶべきことや、家政を整理すべきことを知らないのであります、それ故に良人の勞働を餘所に見て時間や金錢を浪費するやうになるのである、抑も宮城縣は割合に教育の盛な所で、仙臺市にでも公私の中學校は凡そ十ヶ所もありますが、女子教育は充分とは云へませぬ、仙臺市の例を取れば、師範學校女子部と、公私の女學校が三ヶ所で、年々入學志願者の半數は入學することができないのであります、世の中に無教育者程役に立たぬものはありませんから、何とか相當な教育をして、家政の整理とか、時間の利用とかの念を與へなければならぬ、前に云ふ通り此地方には怠惰者が多いのであるから、何でも忙しくしてやらなければならぬ、此頃は或る婦人の團體で、刺繍を教へてをるが、大家の令孃方もこれに通つてをられると聞きました、至極良法である、又他の團體では、一週に一度づゝ、點茶挿花を教へ、又修身上の談話をすることにしてをります、これも一策であります、前にも云ふ通り東北には無作法なものが多いから、相當な方法で以て、女らしい婦人を仕立てるのも必要であります、姫御前のあられもない立小便などは以ての外でありませんか、即ち美的教育が最も必要ではないかと思ひます。

終に臨んで一言します、私がこれを書く時に、家人が申すには、此處の人はお世辭が上手で、心にもない諂を云ひ、蔭に行つては惡口を云ふ、誠に油斷がならぬと、併しこれは何かの間違であらうたま〳〵一人や二人そんな人があつても、全體の人間がそうであるとは云へまいと思ひます、仙臺人が聞いたら嚥腹を立てるでせうが、しばらく異聞を記して、この稿を終ります。



小説

夏休み

松濤庵

俊子の島田家に嫁いだのは、去年の暮である。未だ昨日のやうに思はれるが、早や半歳以上も經つた。其當時は丁度冬季休業で、良人の妹弟なる糸子さんと重雄さんとが、共に東京から歸つて居たが、今日は又、夏季休業で、二人共歸つて來る筈の日。月日の經つのは、實に早いものではあると、今更のやうに思はれるのであつた。

目一ぱい、滴るばかりの樹々の新緑を、稍涼しい風のたゞそよ〳〵とばかり。漸く人心懶い日の、青青とした向の岡の半面を照らす、彼是五時頃であらう。母衣を下した二臺の俥が、家の前に梶棒を卸した。糸子さんと重雄さんとが、東京から歸つたのである。

母なる人の悦びは一通りでない。良人も至て機嫌が克い。俊子自身も嬉しいやうな氣がしたのである。急に島田の家は賑かになつて、談話は此の二人の珍客に依て持ちきり、上下からの待遇は、無論大抵な事ではない。夫も其の筈、山も川も村も人も、皆幼な馴染の、戀しき我故郷に歸つて來たのだものを!。

が、只一人俊子は、糸子さんにも重雄さんにも、去年結婚式を擧げた時、少しの間一緒に居たばかりで、實は未だ沁々と打解けて話した事も無い、謂はゞ全たくの他人同士と云つても可い位の間。殊にかねがね耳にもした通り、嫂と呼ばれ、小姑と見る關係を有つたお互の身の上、意中には少しの隔りも無いにしても、何處となく、恁う蟠りがあるやうな感じがしてならぬのである。

すると又、日の經つに隨つて、糸子さんの氣質も、重雄さんの心持も、段々と解つて來て、重雄さんは其麼でも無いが、糸子さんは、何處となく氣の合はぬやうな處があつて、成程聞いて居た小姑といふものは、恁ういふものであるか！を知り、時には糸子さんが、わざと自分に辛く當るやうな事も無いではない。其度毎に、俊子の胸には、一種云ふべからざる嫌な心持が起るのであつた。が、それを顏色に出すやうな事は、今までに一度もない、否後々とても、決して爲ぬと、我と我心に誓つて居る事は勿論である。

夏季休業にならぬ前とても、俊子は、姑に侍き良人に事へるに、只の一時だに、心を安めた事はないのに、ツイ此間二人の歸つてからの今日此頃は、一入心遣ひの急しくなつて、夜眠むでからも、萬一今日の一日、我身に落度は無かつたであらうか？明日も何うか互ひの胸に惡しき感じの起らぬやうに！と、小さき胸に種々樣々の事を考へ浮べて、まんじりとした事も無いのである。

俊子は此家に嫁ぐまでは、丁度今の糸子さんの如に、東京の某女學校に在つて、休業の度毎、我故鄉に歸つて、やはり昔馴染の山や川、村や人に會ふのが、無上の樂しみであつたが、卒業後は、今の良人

から懇望され、自分も此人ならばと許して、而して現在の身の上とはなつたのである。で、學校に在る頃、教師に書籍に、嫁とは如何なるものかの？一通りを教へられ、自分も確かに解得し盡した積りであるが、さて實地に遭遇しては、さう理屈ばかりにも行かず、隨つて他日他家に嫁いだなら那斯と、考へて居た事までが、皆空想では無かつたかと、我ながら疑ふ位。其上に今又、鬼千匹とも稱へらるゝ小姑に接して見ては、嫁の地位に立つ者は、如何に人生の悲慘を嘗め盡さねばならぬものかを、今更ながら味はつた。

俊子の良人は、俊子に向つて、無論全身の愛を灑いで居るのである。姑は姑だけに、隨分堪へ難なの事は始終無いでもないが、兎に角我娘の如に可愛がるのである。末子の重雄さんは、時々腹を立てて物言はぬ時もあるけれど、血氣壯な青年だけに、淡泊として居るのである。此等の凡ては、寧ろ大に嬉しくて、少しも辛いとは思はぬ、否辛くは無いと爲て居るのではあるが、けれどたゞ、自分よりは三歲年嵩の糸子さんは——今年廿三にもなりながら——些細な事まで凝乎と眼を注けて居て、而して何となく凭う自分に、邪慳に當るのが、それが日一日と甚だしく、漸く休業の三分一を經過したといふ頃には、糸子さんの邪慳な仕打が現になつて來たので、俊子は口惜しくて悲しくて、遂には人知れず瞼を脹らすやうな事さへ、度々あるやうになつた。

俊子は更に新らしき考を起したのである、嫁といふものは、斯くまで悲しい辛い思ひを爲ねばならぬのであるか、一生涯さうであらうか。又、姑といふものは、果して那いふものであらうか。小姑といふ

ものは、果して斯いふものであらうか。はた、我身の味方と頼むものは、たゞ一人良人のみなのであらうか。世間に多くの嫁になつて居る人は、皆自分と同じであらうか。斯く悲く辛いのは、果して自分が惡いからではあるまいか。縱令滿腔の愛情を濺いで居て下さる良人でも、此事ばかりは打明けて話す譯にも往かず。さらば誰に話して聞いて貰はうか。實母さんの側に居るのなら、直ぐ聞く事が出來るのだが、あゝ急に實母さんに會ひたくなつた。

實家の實母さん！おゝそれよ、實家には嫂が居るではないか、さうである、自分と同じ境遇の嫂が在るのである。しかも子供まで擧けて。それからそれと、種々樣々の事が、俊子の小さき胸を辿るのであつた。

俊子は遂に、我が身の往時を繰返さゞるを得なかつた。

自分の未だ此家に來ない時、休業の度に東京から歸ると、實母さんも兄さんも、それは〳〵大悦びで、他の者までが珍らしがつて大切にして呉れた。丁度今の糸子さんや重雄さんと同じことである。其時の自分の嬉しさ愉快さは、今に忘れることは出來ない、恐らくは、糸子さんも重雄さんも其通りに違ひない。

それから或冬の事――一昨年の冬季休業の時であつた――兄さんはお嫁をお貰ひなすつた。自分は急に嫂さんが出來たので、嬉しく思つた、仲も良かつた、それから間もなく東京へ歸つてからも、始終手紙を上げ、彼方からも下すつた。其後度々實家へ歸つても、毎も嫂さんは大切にして下さるし、自分も

懐かしく思つて來て、今でも其心は變らない。が併し、思へば其當時自分は、嫂さんには小姑に當つて居たのだ、そうである、實母さんは姑で、自分は小姑であつたのである。

姑！小姑！あゝ丁度現今の自分の身の上は、其當時の嫂さんの身の上と同じことである。けれども、實母さんは、姑として現今の自分の姑の如であつたらうか？。小姑として、自分は、現今の自分の小姑の如であつたらうか。

兄さんが嫂さんに、全身の愛を灑いでゐなさることは、那の仲の善いので、能く解つては居るけれど、實母さんは嫂さんに對して甚麼であつたらうか？。此家の姑のやうに、いくら年を取らぬと言つても、嫁は嫁だけの事を爲なければならぬとばかり、少しは無理といふ事も構はず、やれ今の若い者は暢氣で困るとか、意氣地なしで仕方が無いとか、やれ妾等の若い時分は、恁麼事ではとても勤まらなかつたとか、子持にでもなつたら何うする積りだとか、實母さんからでも言はれぬ事までも、皮肉な毒々しい蔭口をお言ひなすつた事があるだらうか。自分の實母さん、那の涙脆い實母さんは、決して其麼事をお言ひなすつた事は、自分は覺えない、知らない。又小姑の糸子さんが、自分のすることなすこと、何事につけても、氣に入らぬやうな顔付をして、毎も自分の見えない處で、阿母さんと密々語り合ふ如に、自分も嫂に辛く當つたことがあつたらうか？否、決して自分は其麼ことは一度も無かつたと記臆して居る。

して見ると、何故此家の姑小姑ばかりは、斯く邪慳なのであらうか、これを所謂不幸福といふのであらうか。世間にはまだ自分のやうな人が他にあるであらうか。一生涯斯くして自分は世を送らねばなら

ぬのであらうか？。

俊子は終に煩悶せざるを得なかつた。煩悶すると同時に、此家を去つて、我實家に歸つて了うか、と思つた事は幾度であつたらう。が、其念の起る度毎に、良人の上に聯想すると、忽ち掻消す如く消えて了うのであつた。

何時しか夏季休業の日限も盡きて、糸子さんと重雄さんとは、靜養蘊蓄の英氣を抱いて、再び東京へ往くのである。阿母さんは、又急に淋しくなると云つて、名殘を惜むのであつた。

二人は次の休業を期して、今日しも母の膝下を辭したのであつた。秋風は早くも立ち、村の一面颯と黄ばみ初めて、恰がら豊年の兆と謠はるゝ馬子唄が、此處彼處遐の方に聞ゆる好時節となつた。

俊子は如何に暮して居るであらう？。

（をはり）

子供芝居　臆病もの

ペリエ、クレッケー作
ＡＳ生譯

役者

良雄　六歳

お花　七歳

一室の中央に良雄とお花と遊んで居る。良雄は木の馬の上に跨がつて、紙のシャッポを戴いて、其上に鳥の羽を挿して居る。お花は帽子をかぶつて、前垂をして居て、小テーブルの上にテーブル掛けをかけて、其周邊には澤山の人形を並べて置く。

母　　　十一歳

・　・　・　・　・　・　・　・　・　・

第一齣

良雄（馬上に於て其シャッポを脱いで、上に差しあげて、）

「敬禮！勇敢なる我が兵士よ……」

（其姉に向つて）

「あの。花ちやん。僕はホントに大將のやうでせう。其裝束から見ても、其身ぶりから見ても。」

お花（其手に小鍋を持つて立ち止まつて、暫く其弟を見つめて）

「さう。さうです。私の大將のおぢさんに、ちと、似て居るよ。たゞ、ネー、シャッポは紙のシャッポネー。シテ、私はおまへの聯隊を見られるのかい？……」

良雄（人形を取りわけて）

「僕の聯隊。ソレ御覽よ。よく整列して居るだらう。若し、花ちやん。御望みなら、僕の中隊長にしてやらう。」

お花（テーブルの上に皿を置いて、笑ひ乍ら）

「有がたう！それよりも御料理が私はすき。そして私は臺所の用をするのが何よりの樂みだよ。私の人形も戰に出ることなんぞ望まないよ。」

良雄

「ハー。ハー。分つた。姉さんは臆病ね。女てい者は皆こんな者だ。僕は男だ。僕は強いよ。若し御國に仇する奴があつたら、僕は其頭をぶんなぐつてやる。怖い獸でも打ち殺してやる。」

お花

「お云ひでないよ。怖い獸なんて。おまへは狼を知つてるだらう。其狼がネ、此間の晩に、此村のあたりまで來て、誰とかゞ、雪の上に狼の足跡のついてるのを、見たッてんだよ。

あんまり寒いもんだから、狼が山に居れないで、來るんだよ。私は又本の中に讀んだ事がある。かう書いてある。或村の小さな家の中に、狼が入つた。其所に二人の小供を見付けた。極小い娘は寢籠の中に眠つて居た。其傍に其姉が眠つて居た。又其わきにすこし年上な小間使の娘が寢て居た。狼は一番小い娘に喰ひかゝらうとしたら、大きな娘は起き上つて其頭に枕を投げ付けて、つゞいて小刀を持つて狼の口へ突き込んだ。其時それと一緒に大きな聲で助けてくれ！と叫んだらお隣の大工さんのおぢさんがかけつけて斧で狼を打ち殺してしまつたと書いてある。しかし此小娘が怖がり者であつたら、あかゝんぼは狼に食はれてしまつたであらう。若し狼が今私にむかつて來たら、おまへは私をふせいでくれるのか

い。さうぢやないかい。」

良雄(再び其馬に跨り)「左樣。左樣。姉さんの云つた御話はヅッと昔の御話だ。そして僕はすぐに姉さんの云つた其小娘のやうに、するのサ。」

お花「どうして?」

良雄「どうしてッて。狼なんぞはおとぎ話の中にだけ居るんだ。何、怖がるもんか。」

お花(頭を振つて)「ダッテ、昨夜お父さんの御讀みなすた新聞に狼が來たと書いてあッたのよ。おゝいや。私は他の事を話しする事がすき。まア御覽よ。私のテーブルの飾り付け。私はあなたを人形さんの御馳走におよび申します。」

良雄「ヘン!。大將を御招待。アー。併し僕はから威張は大きらひ。其の御馳走はどんな御馳走?。うまい物ならたべてわげやう。」

お花

「バタ入れ菓子に、チョコレート、」

良雄（大急ぎに馬からおりて）

「ぢや、行かう。すぐに。」

お花（テーブルの端に坐を占めて）

「どうぞ上席におつきください」

（と云つて、菓子の端をチョコレートの茶碗の中へ入れてぬらして、食べはじめる。）

良雄

「これは大そう結構です。」（と姉の方に向つて）

「しかし、俄に暗くなりました。日は短くなりましたナ。もう、蠟燭を付けやうぢやございませんか。」

お花

「おゝお母さんが私に蠟燭をつけさせません。付けるにしても、蠟燭もございません。附木もございません。ものを食べるにそんなにあかるくなくてもいゝぢやありませんか。」

良雄

「僕も御同様ですが、僕は暗い所を好みません。誰か暗い所からのぞくかも知れませんナ。オー、そこに動いてる者がある。なんだらう!?。

お花。（こはごは、立ちて）

「どこに。どれ。」

良雄。(指で示して)「あすこの隅に!。あれ!。こッちを見て居るやうだ。壁の所に頭が見える耳も立つて見える。」

お花。「アー。おまへは私を怖がらせるのだ。」

良雄。(其姉の側にひッついて)「昨夜此村へ狼が出て來たと新聞にあると云つたが、其やつが今日まで居て此所へ來たんだ。……あら!。頭が大さう大きい頭になつた。まア早くふとることと!。姉さん!。」

お花。「そんなに引つ張つちやいけないよ。私の袴がぬげるよ。」

良雄「私はこゝに居られない。逃げやう。助けてくれ!。」

(二人は出て行く所である。戸が開いた所でお仕舞になる。)

第二齣

良雄。

お花。

小某

母。

二人の子供。(其母親をまだ見つけないで)

「助けてくれ！。助けてくれ！。」

母。(子供の驅け出す所を止めて)

「まア、どうしたの？。何が來たの？。何を助けてくれッて？。」

二人。(双方から母にすがつて)

「オッかさん。あれ。あれ。あすこに！。」

母。(見まはして)

「あすこに何が………」

良雄。

「狼が！」

母。

「狼？」

お花。

「さうです。おつかさん。狼ですよ。昨夜おとッつあんが仰しやッたでせう。寒くなつたから狼が此村へ出て來たッて。」

母。(大きな聲で)

「お！。しかたがない子供たちだね　。(其子供たちを手に抱きよせて)狼が來て、そして家の中へ入ると思ふのかい?。臆病者だねー。さア、さア、氣を落ち着けな。オトッツアン、オッカサンの側がもー、一番安心な場所だよ。いつぞや私が狼のお話をして聞かしただらう。狼は人の住居して居る家の中へ入つて來ることを、捕りおさへられるかと思つて、大へん怖がつて居ると云ふ事を、覺えて居るだらう。野山に居る狼でも人はそれをいろ〳〵して追ひ狩つてしまふ。だから何も怖がるにあたらない。しかし、こゝに別な狼が、怖ろしい狼があるよ。おまへたちの考へて居る狼よりも私にとつては、もつと怖くてならないのだよ。」

お花。

「お母さん。どんな者ですか」

母。

「それは何だよ。花ちやん!。おしやれで高慢な娘は狼だよ。其狼は薄情で人の困る所を見てちッとも氣の毒だと思はない。それから、も、一つあるよ。坊!可愛い良雄!。惡い小僧は狼だよ。其お父さんお母さんや其主人を欺したりするうそつき小僧は狼だよ。こんなものを永く友だちにして居ると自分もそんなわる者になるよ。」

良雄。

「しかし、お母さん。それは狼ぢやありません。なぜ狼とお云ひなんですか。」

母。「それは詞の云ひやうと云ふものだよ、惡い友だちは恐ろしい狼だ。仲よくして居ると腹の中にある、おまへたちの、立派な心が、だん〴〵食ひ込まれる。氣を付けな。」

お花。「ねー。お母さん。私は其御話はいやですよ。併し若しそんな狼が私を追ひまはしたり、私に付き添うたりして離れなかつたら、どうして逃げませう。ねー。」

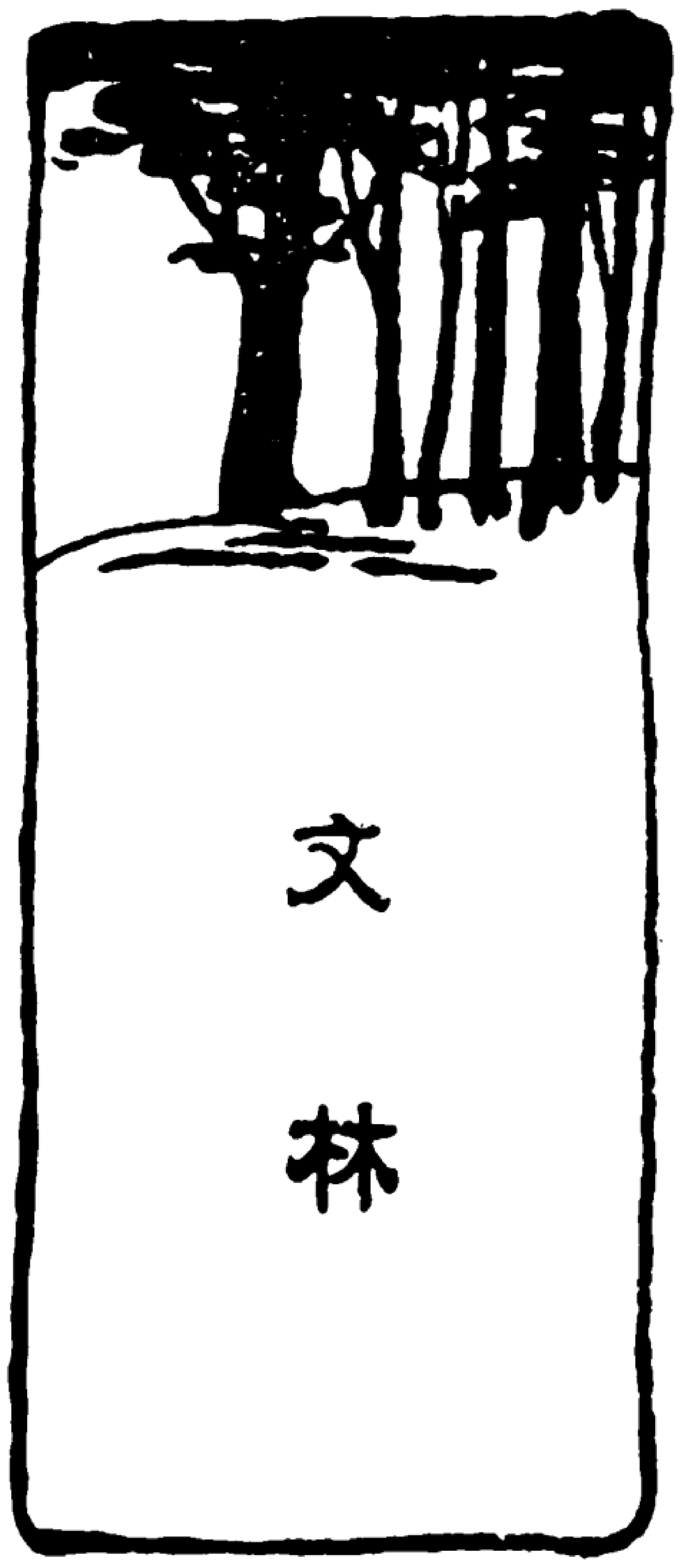
母。「それは、いつでも私の側に居ればいゝのだ。そしていつでも、斯う云つておいで。「お母さんがおいでだから大丈夫だ。狼が來ても、何な狼が來ても。」（こゝで幕がさがる）

（終）

次號小說豫告

花日記

佐藤露英女史



文林

宮中月次御歌會詠進寫

雨中蓮

姉小路良子

花はちすたちは浮葉の茂りあひて
雨にも池はにこらさりけり

宮地嚴夫

いくたひか玉をおきてはこほす覽
雨のふる日の池のはちすは

坂正臣

くれなゐのにほひやあせん蓮の花
つほみに復れ雨のふる日に

小池道子

池水のはすのひろはにおとたてゝ
一ひらかゝる雨のすゝしさ

津守好子

いけの面のはすの浮葉に露みえて
雨ふりそゝく音のすゝしさ

鎌田正夫

夕立ははちすのたち葉かたふけて
かくれし花をみせてける哉

大口鯛二

さみたれに又かくれけり昨日かも
水をはなれし池のはちす葉

猪熊夏樹

ふる雨にみかさまさりてたつ波に
ゆらくもすゝし池の蓮葉

粟田口顯久

文林

しけりあふ池のはちすに雨ふれは
　玉とくたくる露そすゝしき　千葉胤明

不忍のいけのはちすのはかくれに
　くひなもなきて梅雨そふる　遠山英一

ふる雨にみかさまさりて蓮葉は
　皆浮葉ともなれるころかな　加藤義清

よるなれはふるともみえぬ村雨を
　まつ蓮葉のおとにしるかな　鈴木小舟

このあしたひらきそめたるはな蓮
　をしくも雨にうたれける哉　則武正副

花はちすひらくをみんと思ひしに
　けさはあやにく雨そほつ也

山家夏　下田春輿

やまざとはなつこそよけれ
みやこびとゝくおとひませ
　たてまたすものはなけれど
　まゐらせむものはあらねど
手づくりのはたけのなすび
なすびはもよしあらずとも
　手づくりのかきねのきうり
　きうりはもよしあらずとも
かどちかきあを葉のもとは
つりどこのかげとなるべく
　まどちかきいづみのみづは
　くみとりて茶をもにるべし
みやこびとゝくをとひませ
やまざとのつきにうたはむ
　たてまたすおものゝしろに
　なにはなくとも

教の庭

八月十五日兼題

樞密顧問官正三位子爵黒田清綱先生撰

（黒田先生目下避暑旅行中により菊地武則先生の代撰にかゝる）

朝顔

天

埼玉縣入間郡川越町　横田音羽子

去年の秋こほれしたねや生つらん
おもはぬかたに朝かほのさく

地

麻布區東町四十七番地　林雪子

あきやすき人のこゝろをはかりてや
さきかはるらんあさかほのはな

人

下谷町下根岸町三十三番地　椎野鋭子

けさはまた竹のあみとにまつはりて
あくるもをしきあさかほのはな

甲

東京　岩谷淺子

おきいてゝ見るぞ嬉しきあさかほの
つゆをむすひしはなのさかりを

東京　山本梓子

うゑしより咲を待しかうれしくも
けさはひもとくあさかほのはな

東京　椎野秀子

しのゝめをしはしはかりのわか世とや
さくもすゝしきあさかほのはな

秋の庭

われはてしつか垣ねもあさかほの
はなのさかりにかくれけるかな
香川 大山豊子

はなのさかりにかくれけるかな

しらつゆの玉をかさせるあさかほの
はなのすかたぞすゞしかりける
伊豫 南せい子

このあさけわか袖かきにむらさきの
つゆもおもげにあさかほのさく
三河 堀田伊勢子

朝日影うときかき根の葉かくれに
ひるまてにほふあさかほのはな
河内 辻本ひさ子

朝かほのはなはとなりのものなから
あさきよめしてみぬあささそなき
筑後 鏡山増代子

いひしらぬにほひなるかなしら露に
ゑまひてほるゝはなのあさかほ
三河 永井さい子

たちかへりをる人もなきふるさとの
われしかきねにあさかほのはな
三河 白井よし子

咲く花のいろをきそひてわかやとの
まかきにあまるつゆのあさかほ
水戸 富田千代子

是あれはあさとくをきてとなりとち
はなしはたえぬあさかほの花
出雲 岩倉すみれ子

ほのかにもあさかほの花みえにけり
あるしゆかしき垣の内かな
出雲 岩倉より子

うらにはのまがきにさける朝かほの
みさをそ松にましてみえける
茨城 中里希武子

おきいてゝ見るそ嬉しきまちくし
庭のあさかは咲きそめにけり
伊豫　小野文子

思はすもわさいせしまにあさかほの
花は日影にしほみつるかな
伊豫　小野末子

珍らしきはなもさくやとわさまたき
おきいてゝ見るあさかほのはな
東京　山崎文子

あさなくさかりを見よと朝かほの
にほふもにはのをしへなるらん
愛媛　高市もと子

あり明のつきかけしらむたけかきに
ほのくにほふあさかほのはな
東京　積山きやう子

露のまのさかりしいへとたけかきの
ちよのいろあるあさかほのはな
東京　岡田柳子

あさな夕なこゝろつくしゝかひありて
さかりになりぬあさかほのはな
長野　岡田千穂子

乙

つゆなからみるそすゝしき袖かきに
さきあまりたるあさかほのはな
東京　山本茂子

あさなくつゆに色そふませかきの
あさかほのはないまさかりなり
下野　川連美喜子

しのゝめに花のひもとくあさかほは
日かけなしらすしほむはかなさ
肥後　徳永多瑠子

むらさきの袖かきふかくにほひつゝ
つゆにあらそふあさかほのはな
肥後　徳永廣子

やれ垣にはや色みゆるあさかほは
葉のほろつゆにひもやとくらん
下野　佐藤たか子

音にきく入谷のさとのあさかほは
よに香くばしきなどころにして
埼玉　横田秋子

はかくれにさくあさかほはよみなきし
つほみのほかのものにやあるらん
福岡　武田龜子

咲ぬまとたち出てゝみれはうちゑみて
いさめかほなるあさがほのはな
福岡　武田外代子

あめふれはことにるひしき山てらの
かきのあさかほはなやれにけり
三河　石原逸子

教の園

あれはてゝ野となるにはのましは垣　愛知　後藤信子
つくろひて咲くあさかほのはな

ちよふへき竹のまかきにさきなから　長野　今井萬子
さかりみしかきあさかほのはな

白つゆのきよけにはなにやとるまて　水戸　富好ゆき子
いそきみはやといつろもろひと

朝戸出にたけのまかきをうちみれは　同　富好くり子
さかりほとなきあさかほのはな

咲くはなの色をきそひてわかやとの　水戸　酒井すゑ子
まかきにあまるつゆのあさかほ

しけり合ふにはの木たちの下かけに　東京　辻なか子
ひともとゆかしあさかほのはな

また殘るあつさにたへぬころとてや　三河　服部正子
つゆのひぬまにさけるあさかほ

竹かきにはひまつはれとはかなさの　山口　村上操子
つゆはのかれぬあさかほのはな

おきいてゝあさとくみれは咲いてゝ　陸前　三浦ゑん子
まかきにゝほふあさかほのはな

咲にほふあさかほのはなおきわたす　肥後　佐々有鄰子
つゆのひぬまそさかりなりける

つゆしけきしつか垣根にまつはりて　栃木　岩間きよみ子
咲き初めにけりあさかほのはな

兼てよりはかなきものと知りなから　栃木　森田みと子
みる目すゝしきつゆのあさかほ

なにことももこたりかちの我にさへ　大隅　稻恒政子
あさいはさせしあさかほのはな

たらちねの親のねさめもなくさめて　大隅　稻恒政子

うれしかりけりあさがほのはな

おくつゆをいのちとたのむ朝かほの　鳥取　大塚信子
いかてひさしきさかりなるらん

をり〳〵にそゝぎし水をたよりにて　三河　本多きさ子
はなさくまでになりしあさかほ

おく露のひぬまにひとのとへかしと　大隅　山田よね子
しつこゝろなきあさかほのはな

朝かほの咲けるをみれはしかすかに　和泉　福原すみれ子
あさいのとこそいそかれにける

朝かほのかさしと見ゆるつゆのたま　東京　吾妻ちか子
ちらさぬほとにかせもふかなむ

夜すからの露のなさけを身にしめて　東京　川村まつ子
けさうるはしきあさかほのはな

朝かほにさしむかひては寢みたれし　東京　川瀬たき子
わかすかたさへつくろはれけり

朝かほのさかり見にくるひとのため　東京　中野昌子
はや槇の戸はあけておきけり

田畑もるしつかふせやのいふせきも　横須賀　岩橋花子
咲くあさかほになかめゆかしき

あれはてゝつゆのみしけき蓬生の　同　岩橋久子
やとのまかきにあさかほのさく

露ほとのいのちなれともあさかほの　東京　牛山秦子
はなのさかりはうれしかるらん

うるはしく咲きそめにける朝かほに　攝津　森本芳江子
かさゝしそへてあくまては見む

となりより垣ねのひまをくゞりきて　攝津　大岡はな子
ひとはなさけりにはのあさかほ

とく咲きてとくしほむかな朝かほよ
せめてひと日はのこらましかは　攝津　大岡幸子

おく露をいのちとたのみおのかじゝ
すかたあらそふあさかほのはな　若松　高橋操子

赤そよきしろもきよしとあさかほの
しなさだめする賤さめうれししも　名古屋　瀬木せき子

せの君のこゝろつくしゝあさかほの
つほみかそふるゆふへたのしき　佐倉　岩本操子

しつか家のしはのいけかきけふはまた
ひとかけしけしあさかほのはな　東京　椎野薫子

とくるまもしはしかほとそ朝かほの
つゆにいろあるはなのしたひも　東京　椎野ぬき子

いさやこらとくなき出よけさもまた
なれよりさきに咲けるあさかほ　播磨　和住千鶴子

ふる雨にかきゆふひまもなきものを
しらすかほなるあさかほのはな　大和　栗山しゆん子

きぬきぬの別れをおしむそてかきに
つゆこほしつゝさけるあさかほ　長野　山本直枝子

いきたなき人のこゝろのいましめに
とくおきよとてあさかほのさく　長野　山本基子

賤か家のまかきのもとに夜をこめて
つゆにうちゑむあさかほのはな　長野　小泉みつし子

あめかせをしのき生ひてし朝かほの
けさ此のにわにさきそめにけん　東京　淺井のふ子

よろほへる賤かま垣をやつさしと
ひとりゑみてそさけるあさかほ　松山　水木よし子

朝かほのはな咲きてより見るかけも
なさしはのともときめきにけり　松山　水木とも子

むき出てゝかきれをみれは朝かほの
われをまちけんうれしけに咲く　下野　菅沼淑子

井戸はたのま垣のもとに咲きにける
はなのすかたのあいらしきかな　下野　菅沼篠子

はかなしや縈のひるまもまたすして
しほみけるかなあさかほのはな　下野　菅沼篠子

はかなしや露のひるまもまたすして
うつろひやすきあさかほのはな　下野　川中子てつ子

けさもまた我よりさきにさきいてゝ
あるしかほなるにはのあさかほ　京都　椒山かめ子

植おきしかひはありけりあさな〳〵
つゆにいろそふはなのあさかほ　東京　積山鏡子

つくろはぬしつか垣れのあさかほに
あかつきおきのそてひかれつゝ　東京　三好珍子

あかつきのつらきわさめもしら露の
おきてうれしきあさかほのはな　東京　大町律子

露なからにほひこほるゝあさかほを
みれはすゝしきこゝちこそすれ　松山　梯たけ子

床しくもつゆにぬれつゝさきいでぬ
ちごもよろこふあさかほのはな　東京　中林英子

白つゆのひぬまをしはしさかりにて
とくもうつろふあさかほのはな　武藏　大江春子

朝つゆをよそひてさけるあさかほは
ひかけまつまのはなさかりかな　東京　三上誠子

夕へよりつほみかそへてみつそゝぎ
あすをまたるゝあさかほのはな　東京　山口琴子

すゝしくも露のたまちるくさむらに
たれかまきけんあさかほのさく　神田　田村みつ子

あはれ／＼とひくろ友もかへるらむ
しばのあみとにあさかほのはな　三河　石川代志子

くみいれしたらゐの水にうつりけり
まとにまつさくあさかほのはな　羽後　三浦さわ子

月かけのなそきなうらむやまもとの
さとにうれしきあさかほのはな　羽後　三浦ふさ子

あた人のこゑもゆるさぬまともとに
はひまつはれるあさかほのはな　秋田　佐藤かつ子

つゆわけて花のさかりになくれしと
ひとかけたゑぬあさかほのいほ　佐倉みさな子

あれはてしゝつかま垣とおもほへす
みるもすゝしきあさかほのはな　宮城　大槻初音子

千代こもる竹なちからにたのめとも
つゆないのちのあさかほのはな　宮城　大槻慶子

朝かほのはなのこゝろのむつましさ
へたてもおかぬにはのなかゝき　陸前　鈴木しき子

つちかひしほとも嬉しくさきいてゝ
ひとめにかゝるかきのあさかほ　陸前　鈴木千代子

あさな／＼いろ新らしく咲きかへて
さかりひさしきあさかほのはな　薩摩　松原峯子

瑠くこくまたくれなゐにおく露の
そめいたしけりあさかほのはな　札幌　山田静子

つゆわけて入谷の里に來て見れは
みきもひたりもあさかほのはな　札幌　山田婦美子

丙

けさはまたさきまさりけり朝かほの
いろめつらしきはなもましりて　東京　河田いし子

袖かきみのふりしやつれもつくろひて
さきかさなれるあさかほのはな　東京　河合象子

竹かきにちよなちきりてさきなから
さかりみしかきあさかほのはな　東京　金原玉城子

あすさかむつほみかそへて夕へより
さくなまたるゝかきのあさかほ　東京　大枝庸子

袖かきのやつれも見ゑすさきみちて
うらおもてなきあさかほのはな　千住　佐々木八重子

白つゆのたまなよそひてませかきに
さくもゆかしきあさかほのはな　武藏　松本まつ子

ありあけの月のひかりもさしそひて
つゆにひもとくあさかほのはな　東京　西山英子

あさかほの花こそけにもはかなしや
露のひぬまのいのちとおもへは　三河　石川滿壽子

あさかほの花さき初めしあしたより
あさいせぬみとなりにけるかな　三河　石川文子

咲き替り咲きかはりてもあさかほの
はなのすかたはかはらさりけり　伊勢　川原なてしこ

朝なあさな藥かけにさきてしら露の
ひるもさかりのあさかほのはな　東京　杉田業子

植しよりいかな[illegible]花かさきいてむと　攝津　鹽見文子

朝なくさきかはりつゝあさかほの　まつもうれしきあさかほのはな　攝津　塗井春子

あさかほのけさきく花やいかならむ　はなのさかりはやつれざりけり　攝津　駒井この子

あさとての妹かまかきにまつはりて　いさおきて見むつゆのひぬまに　攝津　駒井登雄子

しめゆひし籬のまかきもこゝろせく　いろなつかしきあさかほのはな　若松　高橋泉子

よひくにたとろ夢路のまほろしを　さきそろひたろあさかほのはな　若松　川島謙子

うまいすろ身のおこたりをいさめてか　うつゝにかへすあさかほのはな　若松　高橋久子

とくおきてたれに見せまし朝かほの　とくさきにほふあさかほのはな　大和　栗山たか子

たなはたのに手向草とやあさなく　はなはさかりもみしかきものを　肥後　徳永萬壽子

つゆにふす尾はなか袖にまつはりて　露ににほへろあさかほのはな　福井　平田そう子

朝なくれさめたのしくなりにけり　さけろもゆかしあさかほのはな　北見　中川伊代子

しつかやの声のかき根もあさかほの　かきのあさかほさきそめしより　陸前　前田川みさを子

はかなさもわすれてぞみろ有あけの　はなさく秋になりにけろかな　東京　後藤喜代子

みしか夜のゆめのこしても見まほしき　つきににほへろあさかほのはな　東京　安井じゆん子

ちひろなる竹にからみて朝かほの　あさなさき分くあさかほのはな　東京　安井みし子

つゆの身のはかなきものをやとさはや　つゆのひろ間を千代とちきれろ　鹿兒島　秋瀧

あすよりはまたとく起きんあさかほの　たゝひとゝきのあさかほのはな　同　秋月

よのさまをみせてそさくかふろさとの　ひかけをいとふはなにしあれば　伊豫　吉良貞子

はかなくも露のまかきに咲きいてゝ　あれしかきれのあさかほのはな　上總　高石登代子

あさかほの垣ねもいまは葉かくれて　しはしにほへろあさかほのはな　奈良　植谷とめ子

柴の戸をおほふまてにもはな咲きぬ　葉よりもおほきはなを見ろかな　東京　敷島うた子

朝またきおきいて見ればうれしくも　すさひにうへしあさかほのはな　東京　柏田靜子

さきまさろ庭のあさかほあすはまた　さきいてにけりにはのあさかほ　長崎　岩田春子

しら露はまたおきあへぬはきのとに　いかなろ花かひらきそむらん　埼玉　前野壽賀子

しら露もおきまよふらんあさなく　ひとりひらきしあさかほのはな　埼玉　前野ふさ子

疾くさきて照らす日影にしをれつゝ　さきかはりゆくあさかほのはな　麻布　林環子

朝いするひとにみせはやあさかほの　あさいいましむあさかほのはな　神田　牧兼子

下代こめし竹のまかきに咲きなから　つゆをおひたろはなのすかたを　名古屋　木下鶴子

朝かほにみつなそゝきてあすさかむ
さかりみしかきあさかほのはな　東京　篠田圓子

朝つゆの玉なかさしてくれなゐの
つほみかそふろゆふへたのしも　水戸　富田千代子

あさ月よのこれるつゆのそてかきに
いろにに保へるあさかほのはな　伊豫　小松千代子

よもすから露のかゞみによそほひし
ゑみほころひぬあさかほのはな　勢州　戸倉信子

さし櫛のあかつきおきのすゝしさに
いろさま／＼のあさかほのはな　豊橋　服部萬子

うゑしより日數かそへてまつはなの
ひらきそめたりあさかほのはな　三河　河内ぬひ子

朝な／＼おきいてゝまづうれしきは
さくぞうれしきけさのあさ顔　肥後　佐々小筝子

うゑはしくゑみほころひてうき秋の
わかまとにさくあさかほのはな　美濃　吉村せむ子

明けわたる霧のまに／＼ほのほのと
こゝろもしらぬ朝かほの花　横須賀　上田霽子

しぼますて匂はゝあきのゆふくれも
ひらきそめたろあさかほのはな　松山　上原のぶ子

なくさまゝしなあさかほのはな

華族女學校教授　井上賴圀先生撰

歸省

天

下谷區御徒町三丁目三十三　岡田柳子

塵深き都を離れて、今は山水明媚なる、我故鄕にあり、いつくしみ深き、たらちねの、御前にて、戀しきはらからと、語りあふ、嬉しさにても、夏の暑さは、忘られぬるを、まいて山は高く聳え、水は淸くすみて、我をなぐさめぬるをや、あゝ樂しきは歸省、嬉しきは、故鄕なるかな。日頃學びやにて、授け給へる、家政のわざ、今まのあたりに、母君の、いたつかせ給ふを、見るにつけ、婦人の責の、輕からぬ思ひ、知られて、いと身にしみ、せめては、暑中休暇の中だにも、及ばむ限り、仕へ奉りなん、思へば來ん年は、げに我卒業の期なり、今よりいよゝ、勉め勵みて、譽あるしるし文、賜はり、いや高き、み惠の、一つをだに返し奉らてやは。あゝ此高き山よ、淸き水よ、我錦きて歸らん迄、我學び終へてきぬる迄、朝な夕な母君の、御心なぐさめの、友ともなりてよ。あゝ此後は一すじに、いそしまん、學びの、道を

も、心をも、研き究めて、とくかへり、母君が友と、たのみてし、此秀靈なる山、清冽なる水に、はぢざらむことを、心がけばや。

人

伊豫松山市出淵町廿一 南 せい子

松山々々と驛夫の呼ぶ聲さへもおのづから勇ましげに聞えて嬉しう汽車より下りぬ。さて我家をさして足を運びつ、かぞいろの君は如何にますらむいとしき妹は今何をかなすなど思ひ廻らす内に早懐かしき門べに歸り着きぬ、可愛の玉は我を見るや否、尾を振り立てゝ足元にまつはり來ぬ、おゝ玉かと脊などを撫で居れば、折しも駒下駄の音高やかに驅け出づるは妹なりき。あな姉樣よと懐かしげに笑みをふくみつゝ寄りくるいとあどけなしげにや一とせ見ぬまに變りし事よ、脊も高くなりて、短かりし黑髮は早や桃われに結ひあげたる、最と可愛ゆけあり。やがて諸共に手を連ねて、父母君の居たまふ奥の間に行きつ、我は先づ膝まづきて只今と頭をさげぬ。げにやつゝがなくおはするみけしきを久しぶりに拜する我心のうち、歡ばしとも歡ばしうなむ。あはれ海山遠く隔たりに、絶えず住み馴れし故郷をのみ忍びたりし身の、今は立歸りて、慈愛深き父母君のみ許にて、學び舍の有樣を初め、萬積れる物語聞えまつれば、おのづからすが〳〵しき心地ぞせらるゝ、いでや今日より家事の手傳をも、暫の間にてもなしまゐらせむ。

東京 篠田圓子

今年は學びの業を卒へたれば久々にて一先づ歸省せむと過日其の途に就きぬ。嬉しさに心のみ、はやりて、まがれ路を走る車も尚もどかしく思はるゝこそをかしけれ。三年計り過ぎぬる程に片山里も大に開けて目馴れし故郷の地とも覺えぬまで變れる所の多かるも進み行く世の惠なれや。家に入りて先驚かるゝは妹の見違ふ計り成長したるなりけり。垂乳根の君は、さして變り給はねど、顔に白き所多くなり給へるが、いとしう思はれてなむ。己れ故郷を立ち出づる時五才なし妹は、唯辞儀のみなしけゞむなる顔して打まもりぬ。されど母君の宣はせ給ふを承れば己が歸省するとき〳〵

數の庭

て、いたく喜て居たりしと。こは幼子に有がちの事にて、己が姿の變れるに他人の如き心地やすならむ。末の弟は三才なるが、こは却て無邪氣にちどり足して我が傍に寄りそひ片言にて姉チヤンと呼びかくるぞ愛らしき。積る物語は數々ありつる物から嬉しさに胸ふたがりて何より語り出でむ術も知らず。唯とひ給へる儘に答へ奉るのみ。一日二日と打すぎて今は心もおちいたれば聊なり共母君の手業を助け奉らむと思へど久々の歸省にて交ゐし昔の友の誘ひ來給ひて兎角徒にのみ暮しつ。昨日は滊車の歩みも遲しと思ひし心にも、此頃の日足の早さには實に驚かるゝにこそ。

東京　杉田繁子

樂みに、待ちつゝありし、暑中休みも、明日よりと、定まりぬ、一月ほとの、いとまを得たれば、うれしくて、去年の春立出たるまゝ、一年あまり、ふみし事なき、古鄕に、立歸り、久々にて、父母のすこやかに、すごし給ふを、いはひ、又すみなれし、家居の樣、野山のけしきなどに、心をやりてたのしく、遊ばましと、あすの朝一番の滊車にて、いよいよ、立出んとす。行李も、大方ととのひたれば、ただあくるをのみまたれて、一夜を千夜の思ぞすなる。やうやう、ふしどにいりたれど、まどろまれず、しばしあはざりし友どちはいかゞ、はた、土地の有樣も、少しはかはりしか、妹などさぞ、成長せしならん、今春の試驗にて、得たる、優等賞など、ひらき示しなば、父母はらからのさぞやうれしがらましなど、おもひてなん、近き里なる、わらにべども、にもこのめるものとらせなば、いかによろこぶらん、など、と、とつ、ないつ、思ひうかべて、心の胸の、あやしうさわぐ、のみにて、此一夜を、あかしかねつれば、まだきにおきて、文机のもとにより、氣をしづめて、歸省のしるしとして、かくなん、とどめおくになん。

東京　山本梓子

あらかれもとけつへき日頃のあつさは、賜のかせも軒はの松の嵐にも、はらひかれたる此頃、旅衣いとかろらかに、出たちゆく人の、あるは、砂清き海邊へ、或は綠らるはしき深山路に、都のちりさくるなど、巳かしゝなる樂みはありなめと、我に一度の、まなびのいとま得て、花のあした、月の夕、思ひ出てぬ事なき故鄕へ、打向ふたのしさやいかならむ。なつかしき父母はさらなり、はらからなとの、まして去年まで、うなしにもとゞかさりし、振分髮の、今は、かた過るまでふさやかに、すゝしげなるかざしなどさして、むかへ出でたる妹、乳のみまさくりゐたる弟の、母のひさとくはなれて、とゝのはぬことはながらに、走りいて迎へたるうれしさのあまりに、淚をさへとゞめかねつ。親しき友とちめつらしかり集ひきて、都の事も故鄕の事も、つきせずかたみにいひかはしたるなと、ひとつきあまりがほとは、花笑ひ、鳥うたふ、春のなかばの長閑さにも、いやまさりたらむと、思ひやられてかくなん。

和泉　篠原すみれ子

海山萬里遠く他鄕の客窓にいそしみし身も、夏の休暇を得て、なつかしき故鄕に暫し螢雪の苦を忘るゝ身とはなりぬ。かごひなる草の庵とて見聞くへき節は少なけれど、塵深き都とは事かはりて、前は山又山につゞき、松風の通ひくる涼しさ。後は伊勢地川の流の響肌寒き許り。山里はげに夏としもなりかけり。日毎に情深き父母君は、われの恙なきさまを喜ばせ給ひつ、なにくれと萬つ暖かなる御言葉をたまはるありかたさに袖をぬらす事もありき。また夕べ涼しき遣水のほとりに樂しきまとひしては、夜の更るも知らず、あな心なやいたく夜風の當れば身に惡し、とくふし戶に入り玉ひれと、母君の屢々仰せらるゝぞ忝なき。又幼き妹は明暮我に

まつはりて、此垣根に咲ける朝顔はわが蒔きける種よ美しとはおほさぬやと誇りかに言ひ出づる口つき又なく愛らし、あるは螢狩にとすゝめ杣には稀なるすさびにおはさめなど言ふもなかし、又或時は、此は妹君にまゐらせんと過る日學校にて縫とりせし物なりと持ちくるなどあはれに優し。今更に家庭の趣味の斯く樂しきを味はれて、今まで心にもかけざりし、裁縫、割烹など實地の修業をなさばやと思へば一日だも上京の日の來るを遲かれと祈らるゝぞ、あやしきや。

肥後　佐々有瑞子

八月の十五日は、官幣社筥崎宮の祭なり。なりふし都の空より歸省の途中なれば。九州鐵道滊車筥崎停車場より下車して詣でぬ。はや祭式をはりてあれば。父君の親しく交はり給へる。宮司君をおとなひ來る。なにくれと引出物給はりて。父君にも短册をおくられぬ、且つは海山の御物語を承り、妾が朝夕の心の柱をつきたて侍り、いといとうれしかりき、姉君の在す、館には立よらずて、夜行車より直に父母の君を省んとて、いそぎ樂園にかへりつきしは、曉方にぞ有ける。かぞいろは、更なり、はらからも、奴婢も、つどひて、鷄のねぐらないづるもしらずて、道中ありし種々の事がらを、今日のなぐさと、ねもごろに問答せり。午前十時に、氏の大神に參詣し。ひさしく拜みて、社頭の景色に、心をこめて見渡せば、西に肥前の溫泉嶽あり、北に菊池の八方嶽あり、社邊をながるゝ、木野川には浮よをよそに、釣たれて、ちりに交らぬ村翁もあり、後の山には雨よびかはす鳩のこゑ前、の野には空はればたる犬の遠れも、とりとり、ものめづらしくきこえ、歸省して、見るもの聞くもの一として、なづかしからぬはなし。

秋の庭

肥後　德永[illegible]子

日頃住なれし都の夏のよそひうるはしく、おばしまの風鈴の音もここちよく。隅田川邊の夕けしき、いとなかしく、おぼねつれど、心よはくも故鄕の戀しく、たらちねの母君姉妹のなづかしさ。おひにはやる方なくまちわびし。あつきやすみも、今日よりときく嬉しさに、今朝ははや曉に起出て、遠近に袖をわかちて、歸省の友垣と、しばしの別をつげて、新橋驛の二番汽車にて乘り出ぬ。不二の高根は、雲間に見つゝ。須磨明石の浦氣色も、いとうるはしけれど、滊車のはやき、まゝに打すぎ。三日の日數へて、故鄕なる植木驛にぞ着にける。是より人力車にて、我家に着けるは。はやたかれの頃なりけり。一丁あまりも此方に弟出迎ねて、姿のすがたの見ゆるや、手招きしてよろこびしことのたのしさに。姿は車上より。只今よといへるをも、またで、弟ははせ歸て、つげたりけん。母君さへ門に出させ給ひぬ。我里は岩山限のかげなれば。朝な朝な松が枝に輝く日影うれしく。夕月の西の方、雲の絶まにさやかなるけしき、言の葉につくされず。都の友に見せま欲しきなどかたりつゞけて、家族の人々と語りかはすも。歸省のなぐさみ也。

東京　中林英子

あゝうれしき暑中休は來りぬ。都の紅塵を跡にして、滊車にのれば、香山前に迎ね、碧海後に送りて、またゝくひまに、故鄕につきぬ。まろぶが如くに、いでき給ふは父母の君なり。後より、同じくゝるは、我が又なく愛する弟妹なりけり。一家團欒して、都の物語などす。世にかく樂しみ多き事はあらじ。緣したゝる計りなる庭にて讀出し、或は日くれ頃より、弟妹の手を引きて、小川のほとりに、螢狩りするなどの樂しさ。見る物、きくもの、皆我の心を慰めぬものこそなけれ。

敎の庭

播磨 和住千鶴子

待ちに待ちつる、暑中休日は來りぬ。懐かしき古里に歸らんとて滊車に乘りぬ。見渡す野山の緑、美はしきに、折しも百日紅の花さきみちたる、あるは、千草のひまより、野菊のをぼつかなう咲きいでたる、都にはみるよしぞなき。古里近き停車場より降りて車に打乘る道すがら見る山又水、いづれ幼なき昔、遊びしかたみならぬはなし。水底の石も數へらるばかり、清き流に魚つる人の姿もあはれ、とり〴〵の景色みる程になつかしき山の端見え初めぬ。いと嬉し、やがてきつきぬ。飛ぶが如くに出できし弟、姉上お歸、と、云ふも、うれしく、まさきくありしやと云ふに答はなし。いかにと見れば、はや家に入りて、姉上かへりませしと云ふ、聲きこゆ、やがて、入りぬれば父母君の笑もしげく、さきくありしやなどて歸りのおそかりしと、のたまふに答へんすべもなく、いと堪へがたうなりて、そゞろに涙催されぬ。さるにても、樂しきは歸省なり。かく美はしき、古里を持てる世の姫たちのなどて、塵多き都路に、みふせの暑さを送らんとはする、その心の中こそ、おやしけれ。

伊勢 川原なてし子

錦かざりて歸るにしもあらねば、唯たらちめ、はらからのみ、停車場に待ち設けられつ。車つられて、なつかしき家路へと急ぐ嬉しさ。思ひに思ひし故鄕をきて見れば、また今更に胸轟きて、何となううら耻かしき我身の上。

ふとすれ違ひし侍友の、いたくもおもかはりせし事よ、三とせ見ぬ間に、美しき丸髷姿。しかも玉のやうなる男の子さへ抱き給ふ、何方にかしづき給ひつるにや、かくては多くの友の誰彼、いかにかわたらせ給ふらんな、一夜二夜につきぬ話の、一時に胸の中に往來しつ。

かくて、眼につく、山の姿、水のたゞずまゐ、荒れし畑、新墾の田、新らしき大家、草茫々たる屋敷跡など、しばしが程に變り果て、儚なき人世の歷史をか弱き胸にくりかへさしむることよ。

とかくして、家に着きぬ。物珍らしげに集ひ來る近隣の人々、さては、乳母などの訪づれて、ひたぶるに無事を祝ふ。我は、嬉しさと、おかしさとに醉ひて、瀧なす汗を押拭ひつゝ、一々の挨拶やう〳〵濟めば、此度は、お土產の配分に額を鳩めて、先は、それ〳〵に小供だましの、耻かしき品物をずらりと列べて。

昨夜、新橋停車場を發車してより百二十餘里。さすが氣勞れの一時に發して、術なき息を洩らす內にも、亡き父君の御墓に詣でつこゝらある新墓の名を一つ宛問ひて、更に、一層の無常を感じたりき。

日は暮れぬ、佛壇にみあかしは點ぜられぬ。忘れがてなる涅槃經の一卷覺束なく誦し奉りて、いとなつかしき香烟に咽びぬ。

あゝ、この歸省の第一夜には、そも、いかなる夢を結ばん、あな、樂しき故山の夏や。

東京 平田うゑの子

つかのまも忘れがたきは故鄕なり、父母おはせばなり、弟兄ゐませばなり、けふ八月一日故里に歸り來りぬ、鎭守の森をあなたにすればうれしうも竹籔のかげに我家の手にとるやう現れいでたる姉樣も喜色あふれてほゝゑみ給ふ。

橋のたもとにまちわびし弟と妹と二人、姉樣とばかり走りきて、右ひだりより袂にすがり、暫しはなつかしげにものもいはでみ上げしがはてはもてる風呂敷包うばふやうにしていつか姿は若葉の

中に隱れぬ。

母樣叔母樣門に立たせて二人迎へ給へば、ゆのと呼ぶ犬も去年よりいと肥へてしきりに尾をふれり、いひしらずかわゆくて頭なでやりぬ。都のことなにくれと語るまも汗いでむと風送り給ふ叔母樣の心忝なく、都にもかゝうなる人ひとりだに得まほしう。弟は早や包展きてはーもにかの若緑に染めなしたると、朝顔のかざしのまだうら紅きとたづれいでゝ、笑める樣わらはも心樂し、はがきの便りにもそち二人きりしより何となくさびしうといひおこせ給ひし我宿も、けふよりは又時ならぬ春にあふてめでたきまどゐとこそなりぬれ。

豐後　大内てる子

母上の琴調べよと仰せられければ、久しぶりにて爪搔きならせば父上やがて尺八とり給ひて、ふきすさび給ふ程に、月は東の峰に上り、松風すゞしく吹き拂ひて、面白さいはん方なし。一曲終りて、また一曲と所望せらるゝまゝ夜ははや闌になりぬ。父上は姿に向ひ、學の道のいそがしきに、幼きなりのなぐさみを、よくぞ覺ね居れりしとて賞め給ふ、母上はお菓子、梨など持ち出で給ひて、すゝめ給へば、幼き弟の目をさまして、われもそれほしといふもをかし。

かくて晝は母上の御手助けにもと、家事のと何くれとなく立働らきて、夕べよりは、例の琴とり出でゝ、父母を慰め參らするも、せめて萬分一の孝道にもやと思はるれば、いとゝゝ興多く、いつまでも斯くてありなんとこそ思はれて、都の學舍の事は全く忘られてなん。

女鑑兼題豫告

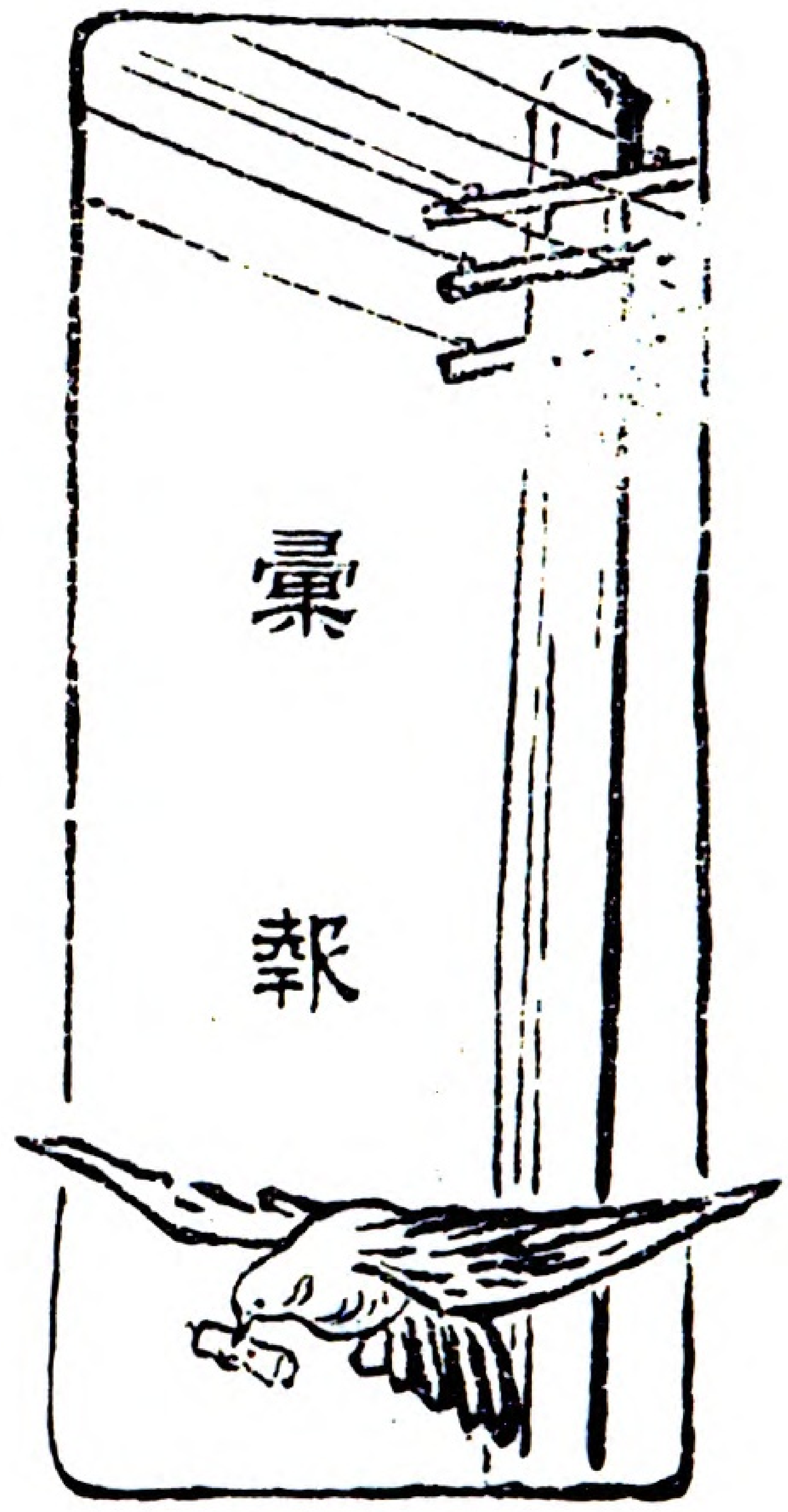
九月	歌	文
一日	初秋虫	思ひを記して女鑑に贈る
十五日	殘暑	山家に月を觀て記す

注意

一 歌は題毎に用紙を別にし一題には一人一首若くは二首を限りとす上句に一二音の漢字一字入れ其他は悉く平假名又は一音の漢字にて認むべし

一 文は毎行十五字詰三十行以内を限りとす必ず楷書を用ゐ字體は鮮明ならむことを要す

一 其他從前の投稿心得を熟讀詳知せらるべし



◎鳳凰の間御飾の花瓶　臺の高さは四尺桐の圖に金蒔繪を施し花瓶の高さ二尺此地金は純金にて純金象眼丸高彫鳳凰の大花瓶一對は實に明治の大作にして其彫刻一切を彫金家香川勝廣氏擔當を命ぜられ來明治三十七年十二月を以て竣功の豫定なるが竣成の上は宮中鳳凰の間に飾附けらるゝ趣きに承はる

◎東京感化院の成蹟　同院は今度第五回內國博覽會に於て其設備の完全成蹟の良好なるを以て褒賞を授けられたる由なるが今昨卅五年末日の調査表を見るに入院生總數四百七十五名に對して全く改良の効を奏せしもの二百八十八名其他百餘名は準改良者として相當の職に就けり退院生就業の重なるものは中學生徒四二、商業者四三、農業者二一商店被雇一六、小學生徒一九、巡查四、洋行者五銀行會社員四、專門學校生徒七、兵卒七、活版職八、其他學校教師、官衙奉職、村役塲員等社會の各方面に分賦せられて至る所職務に忠實なるの評あり亦依賴主身分表を見るに華族あり、高等官あり、代議士あり、豪農紳商等何れも相當の位置あるもの多しといふ

◎海軍下士卒家族愛護事業　海軍下士卒家族愛護の目的を以て海軍士官の有志夫人に依り計畫された橫須賀の海軍下士卒家族共勵會は昨年創立の集會所と相俟て近來の美擧なるが其組織と近況

とを期くに幹部には士官の有志夫人之に當り會員には下士卒の有志家を集めたるを以て幹部並に會員が相互の補助と勤勉に依り家族に自學の道を興すと共に下士卒に後顧の憂を除き自然に家族の美風を養成して品位を高め下士卒の忠勤を慫慂して義務を奬むる等苟も愛護の範圍に入る事業は悉く網羅して漏すなきを期し漸次此主義を擴張して一般士人の同情に訴へ大に繁盛を計らんとする仕組なりと云ふ歐米の諸海軍國に於ても此種の事業盛んに行はれ設備整頓の域に達したるものは直接、



間接に國家並に個人を利するの大なる誠に量るべからず且つ好模範として先例を示すもの少なからず思ふに共勵會の期する所も歐米のものに讓らざるべしと雖も現時は先づ愛護の目的若干を達するが爲めに古來本邦に於て婦人の手藝に專屬する所の衣服の製作を選んで主なる事業とし官許を得て海軍所要の軍服を會員に裁縫せしめ之に對する勞銀を以て會員自營の資に充て家族をして閑居徒食の弊なからしめんとするもの、如し海軍には又軍服の外、信號旗の製作もあれば火藥嚢の修補もあり

被服の洗濯もあれば器具の手入もあれども從來一般の請負に委ねられ貪婪飽くなき仲請負下請負の利する處となりたるは不愍の次第なりしなり士官の有志婦人等爰に感ずる處あり共勵會を創め是等の弊を匡濟し下士卒の有志家族より漸次一般に及ぼし愛護の績を擧げんとするは誠に美事にして婦人の織手の斯の如き重要なる事業を經營されたる勇氣は廣く之を吹聽して大に世の篤志者若しくは高義の士女を促して同情を買ふに値すべし會の創立は本年一月十五日にして當時會員は下士卒の家族僅かに九名なりしも六月末日には百三十餘名の多きに達し爾來會員たらんとするもの續々ありと雖も工場の設備、器具の整頓せざるを以て其希望者全部を充す能はざる事情あれども海軍部内に於て女子の手にて爲し得べき仕事は成るべく之を同會に引受け會員をして從事せしむる方法なれば今後此事業の發展期して待つべきものあらん又會の設立に就て世間の同情を惹くこと少なからず特に山階宮、華頂宮兩殿下には各其御附武官を遣され各工場及び其事業の詳細を取調べ又有栖川宮威仁親王妃殿下は七十五圓を東伏見宮依仁親王妃、山階宮菊麿王妃、華頂宮博恭王妃各殿下にも各五十圓を下賜してミシン一臺宛を供せられ且つ懇篤なる稱讚と將來の繁榮を期するの令詞を賜はり侯爵前田夫人よりも若干の寄贈金あり其他海軍部内有志夫人の金品寄集の擧あり早晩膏雨となりて同會を潤す所あるべしと云ふ

○女子の實業學校　大和御所地方は機業の最も隆盛なる處にして實業と學問とを結び付くる爲三十四年縣立工業學校を同町に設立したる位なるが其卒業生の下に働く工女の智德を啓發するも亦機業の改良上缺ぐ可からざる物なれば春來同地の有

川直次郎氏私立御所女子工業補修學校の設立を計畫し此程規則を定め十數名の少女を養成し居り其敎授は修身、國語、算術、機織法、染色法及び實習の數科とし夫の大和木棉を製織しつゝ學科を修むる仕組にして生徒より授業料を徵收せず相應の工賃を與へ又製品は人を定めて販賣せしむる由

○孝貞美譚　山形縣南置賜郡玉庭村字馬場、横田甚助の妻おその（四十六年）といふは孝貞の道盡さゞるなし甚助方に嫁ぎしよりハヤ三十餘年なるが舅姑に事ふること實の親にも增して甲斐〲しく痛はり侍くのみならず舅甚右衞門眼病の時は秋天の霜を踏んで四里の行程ある米澤に通ひて隔日に藥取りの使ひをなし如何なる風雨の時も敢て怠る事なかりき姑又病に罹りしとき看護至らざる處なく歩行不自由なる病人なりしかば自ら負ふて叟溺をなさしめ病人の嗜むものあれば寒風積雪を厭はず必らず米澤まで求めに行くを常とし其心盡し中々實子も及ばぬ程なり養父母に事る斯の如くなれば其夫に奉ずることも亦一通りにあらず夫甚助學務委員を勤め同村の小學校は大川をへだてゝ字伊勢町にあり冬の日には飯豐山の麓に烈風大樹を動かし飛雪朦々咫尺を辨せず時ありては又洪水汎濫して生徒の通學を絶つこと屢々なるより馬場に一校を設立せんと盡力して群議多き村内の紛紜を纏め遂に其目的を遂げたりしが其際おそのは女ながらも夫の意を酌とり酒を温て集まる村人に饗し村民をなつけて咄しを纏める功亦尠なからずといふ去れば夫が眼病に罹りし後は自ら鍬をとつて農事を勵み家務に盡力し數多の子女兒孫を能く敎養し誠に感賞すべき行爲の多々なるよりして此程同村長より孝貞の婦賞與の事を其筋に願出たりといふ聞くだに嬉しき咄なり

○家庭のかゞみ　茲に一家に波風の起ちたることなきのみか常に和氣温風の滿ち渡りて餘處の見る目も麗しく快よき心地せらるゝといふは愛媛縣北宇和郡高近村大字近家なる山本彌太郎(四十四年)一家にて同人は菓子販賣を業となし傍ら農業に從事せるものなるが同家は妻よう(三十五年)と長女つるの(十三年)との親子三人暮しにて妻は今を去る數年前僂痲質斯病に罹りたるが爲め今は全く足部の運動を缺き起居すら自由ならず便所に通ふことさへ人の手を借る程なるに長女つるのは未だ幼少にして家事を自



から處理すること能はず主人彌太郎は一身にて家事萬端の重荷を負ひ朝夕の食膳の準備より拭掃の事は言ふ迄もなく苟も身體を動かす仕ことは自分の職と爲し剩さへ此商業の外に田畑を耕耘する業をも勉むるが故に朝は星を戴きて起き夕は物聲全く靜まらざれば寢ざること常にして其勉强はとても常人の及ぶ可くもあらず殊に感ず可きは此農家此商家にして充分に教育の必要を辨へ知り家に下女下男を雇ふに足るべき資產あるにも拘はらず若し下女一人を雇ふ時は年々の費へも莫大なれば

一家不自由を耐へ忍ばゞ其金を以て長女つるのをして高等小學校を卒業せしむるに足ると稱しつるの専ら學業を勵めければつるのも心勵みて日々高等小學校に通ひける程に成績も餘程宜敷き方なりと云ふが此家庭にして此子あり妻のようも自分も身體の自由ならざるより良夫や娘にまで苦勢を掛けるとて心配を爲し終日店頭に在りて商業の手助を爲す故一家の生計は倍々豐かなるより地方の人々之れを賞讃しつゝありとは世に珍しき家庭といふべし

○婦人割烹會　麴町區有樂町三丁目一番地に設置したる同會は日本料理西洋料理和洋製菓等を、普通科、速成科に分ち入會者の希望に任せて親切丁寧に教授する由教頭は久しく歐米諸國の日本公使館庖厨主任たりし宇野彌太郎氏にして幹事は岡野りえ子なりといふ

○女の服裝　三井呉服店にては女子販賣方を採用するに付き懸賞を以て其服裝圖案を募集する由尤も新案服裝は單に同店の女子用のみにあらずして一般女子就職者の爲めにせん計畫なりと其懸賞條件如左

一服裝新案は自體動作の自由に便なるものにして而も成る可く優美の態度を保つを目的とすべし
一圖案は必ず裂地若くは紙を以て其雛形を製したるものか又は圖書に寫し示したるものに說明を附すべし（但し說明のみにては採用せず）
一服裝雛形用紙の寸法は總て鯨尺を用ゐ縱一尺五寸横一尺以内たるべし
一募集締切は來る十月三十一日とす
一應募圖案は當店に於て選定したる委員により之を審査す
一應募圖案の優等當選者には左の賞金を贈呈すべし
一等（金百五十圓）二等（金五十圓）三等（二十五圓）

○露京の女子商業通信員養成所　近年露國と英、獨、佛との通商貿易漸く頻繁に趨くに隨ひて女子商業通信員を養成するの必要を感じ近頃露京の

女子職業教育奬勵　會は大藏省の高等官及び民間實業家の賛成を得て女子商業通信員養成所と云ふを設立せり、同所は英、佛、獨、露の國語を以て女子の商業通信員を養成する一種の學校にして女子中學卒業生若くは之と同等の學力を有する者にして歐洲語の一語を解し得る十六歳以上の女子は何人にても入學するを得、學年期は滿二箇年にして授業は毎年九月に始り五月に終る、其科目は商業上に關する通信文、税關事務見習及び鐵道賃金取扱事務練習、簿記學、書法、寫字器械に於ける書取法、露語及び獨語の速記法とす、授業時間は朝夕に分たれ、一箇年の授業料は五十留なりと云ふ

○日本娘の競歩　倫敦レゼント街に日本風の料理店がある其の名稱は『ファー、イスト、ティ、ルームス』と呼べるが給仕の多數は日本服裝の英國美人であるから洋食のしつこき口直しに或は日本通を振蒔かんため同店に到らば此の美人のお給仕で我が松源又は伊豫紋ぐらゐの日本料理を味ふことが出來る客月十二日の事であつた同朝七時セフアード、プッシデ給仕女の歩行競爭を遣つた即ち同街のプッシ、ハウス旅館からティ、ルームス迄駈け歩いたが一行は總べて丶十人で日本服を着飾り頭髮に花簪を挿み手に扇子を握り如何にも花花しくあつたので諸處よりの見物人は雲霞のように街道の兩側に詰掛け或る一群の如きは一行の行進に知らず〱追跡したほどであつた而して一行中のウヰルソン孃は『お金さん』と呼びて初から先登らしかつたが偖て愈よ決勝點に至ると實際の日本娘お金孃が第一着で『お金さん』のウヰルソン孃は第二着『お元さん』と云ふのが第三着であつた歩行競爭は一時間で終り勝利者は皆な賞品を貰つた

がお金嬢の第一着を占めし際などは非常の大喝采であつたさうだ

○倫敦の早婚者　最近の統計に據れば倫敦居住の已婚者中十六歳の男子三人十七歳の男子十四人あり又十五歳の女子二十一人十七歳の女子百六十五人あり又二十歳以上の結婚者の數は市民の數に比して其割合次第に減少しつゝありと云ふ結婚の多きは繁昌を示すものなりとせばこは明に倫敦の衰微に傾き居ることを證するものなりとて同地の人は大に憂慮し居るとなり

新刊書目

寄贈

通俗宗教談	第二號	東京々橋區築地二丁目	同發行所
女子の友	第一四二號	同神田區鎌倉町	東洋社
婦女新聞	第一七〇號	同牛込區東五軒町	婦女新聞社
藥石新報	第四七一號	大阪西區江戸堀下	藥石新報社
少年界	第二卷第九號	東京日本橋本町	金港堂
少女界	第二卷第八號	同	同社
音樂の友	第四卷第四號	東京府下巣鴨村	樂友社
中央公論	第十八年第八號	東京本郷區西片町	反省社
偕行社記事	第三一九號	同麹町區飯田町	偕行社
成功	第五號	同本郷區千駄木町	成功雜誌社
兒童研究	第六卷第七號	同神田區裏神保町	富山房
女學雜誌	第五一八號	府下北豊島郡巣鴨村	女學雜誌社
商家の友	第一七號	京橋區南鍋町	時事新報社
體育	第一一六號	麹町區飯田町	日本體育會
家庭の友	第一卷第五號	神田區南甲賀町	內外出版協會
大日本婦人教育會雜誌	第一五六號	赤坂區表町	同事務所
家庭雜誌	第五號	京橋區新港町	由分社
近畿評論	第五五號	京都上京區河原町	近畿評論社
婦人と子ども	第三卷八號	女子高等師範學校內	フレーベル會
商日本	第一六號	京橋區木挽町	商日本發行所
工手の母	第一四五號	大阪北區西野內新家	同發行所
愛國婦人	第三六號	東京麹町上柳二番町	同發行所

九月十五日以後の女鑑

陽春白雪の歌は、固より下里巴人の調と同しからず、高尚なる趣味の文學は、卑陋なる娯樂の文字と相容れざるなり、女鑑が多年江湖に歡迎せられ、貴婦人、令孃諸子の愛讀を受くる所以また偶然ならざるなり。

是を以て益々從來の旨義を擴張し、愈々高潔なる趣味を供給して、興趣と實益とを兼備せる良雜誌となし、內にしては家庭日夕の好伴侶となり、外にしては交際社會の益友となりて、聊か讀者諸子の厚顧に酬ゆるは、女鑑が當に任務とすべきところの道なりと信ず。

九月十五日以後の女鑑は、則ち以上の旨趣により改良を加へたるもの、廣く名家、學者、文士等の教育、學說、科學、文學等に關する意見、談話、小說、雜錄等を揭載し、其他の記事をも精選するを以て、紙上の光彩躍如として眼を射るが如きを見るべし。

樞密顧問官子爵黑田淸綱先生並に華族女學校教授井上賴圀先生の歌文添删選定は從來の如くにして諸孃の投稿隨意なるを以て和歌、文章等に資益する亦鮮少ならざるなり。

今は節早く立秋に入りて、暑氣やうやく都門を去らんとす、希はくは燈火の下、金風蕭颯たる夕、九月以後の女鑑を讀みて、その如何に翩々たる幾多の女學雜誌中に一頭地を拔くかを見認められむことを望む。

國光社出版圖書割引券

注文書名	合計	此代	外に遞送料	申込者住所氏名
	冊			

切取箋

▲圖書御注文に關する注意▼

◎割引券を以て御注文の分（教科書雜誌を除く）に限り定價の**一割半引**を以て**無遞送料**にて御送本可仕候

但し前金御送附にあらざれば送本不仕候

◎市内の御申込は現品引換に代金御支拂相成候とも苦しからず候

◎郵券代用を以て御送金下され候節は必ず一割增御送附相成度候

◎御注文の御書信は書名編次冊數及び住所姓名等文字明瞭に御記載相成度候

◎御照會は返信用郵券添付又は往復端書に相願度候未納稅不足稅の信書は一切請取不申候

◎代金は總て國光社出版部宛御送付被下度候

東京京橋區築地二丁目　株式會社　國光社
（電話 特新橋八八五 新橋二六九三番）
電信略號九二

株式會社國光社發賣書目

- 宮内默藏著 ◎王學指掌 菊版クロース美本 定價一圓 郵税十錢
- 栗田文學博士著 ◎天朝正學 菊判洋裝 定價卅五錢 郵税四錢
- 古九一昌編纂 ◎名家修養談叢 菊判洋裝美本 定價三十六錢 郵税八錢
- 高瀬眞卿著 ◎學校家庭修身一夕話 菊判總クロース美本 上製金六十錢 郵税八錢 菊判洋裝美本 並製三十八錢 郵税六錢
- 國光社編纂 ◎日本教育 定價廿一錢 郵税四錢
- 三輪田眞佐子著 ◎女子の本分（十四版） 菊判洋裝大和綴 定價金二十五錢 郵税金六錢
- 堀内新泉著 ◎家庭の鑑 菊判洋裝美本 定價金十八錢 郵税四錢
- 三輪田眞佐子著 ◎女子處世論（八版） 菊判洋裝大和綴 定價二十錢 郵税金四錢
- 杉谷正隆編纂 ◎修身百首 菊判洋裝 定價二十錢 郵税四錢
- 内務大臣官房編纂 ◎明治國民龜鑑 菊判洋裝大和綴美本 定價二圓 郵税十五錢

- 清藤正輔編 ◎皇后陛下御略記 坤德 菊判大和綴 定價二十五錢 郵税四錢 特製三十五錢 郵税四錢
- 國光社編纂 ◎明如上人遺芳錄 菊判洋裝 定價二十錢 郵税四錢
- 矢田七太郎著 ◎幕末之偉人江川坦庵 四六判大和綴美本 定價金三十錢 郵税四錢
- 水主天姥著 ◎千古寃魂石田三成 四六判洋裝美本 定價金三十錢 郵税四錢
- 安田巖城著 ◎西鄉從道 菊判洋裝美本 定價廿五錢 郵税四錢
- 大町文學士著 ◎山中鹿之助 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢
- 三好文學士著 ◎上杉謙信 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢
- 大町文學士著 ◎常磐御前 菊判三切袖珍 定價十三錢 郵税二錢
- 清藤正輔著 ◎聖德太子傳 四六判洋裝 定價二十錢 郵税　錢
- 國光社編纂 ◎新編ひめかゞみ 菊判洋裝美本 定價二十五錢 郵税四錢

明治三十六年八月十五日發行　毎月二回一日十五日發行　明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可
第拾參年第拾六號

東京築地國光社印刷